安
國
第四六十

女鑑第百六拾九號

目錄

千代能姬



歌と樂

人には、必、樂なかるべからず。人は、皆、いそしみ勉むべき者なればなり。いそしみ勉むるからに、心身を勞するは、常なり。常に心身を勞するからに、をりふしは、それを慰むる樂は、是非に無かるべからず。誰にもあれ、人には皆勉むべき道あり、いそしむべき業あり。我が爲め、人の爲め、家の爲め、國の爲め、必、其の道をつとめ、其の業をいそしまざるべからず。されど、人の身は、鐵にもあらず、石にもあらず、綠の常磐木の、露の養ひなくては、常に變はらぬ色にて、風にも霜にも堪へ行くことの適はぬ身なり。いそしみつとむるのみにては、久しくはえ堪へじ。をりふしの樂の、身を慰め、時々の慰の身を助くるものなくしては、よく久しくつとめもいそしみも得ざるべし。人は、つとむるからに樂み、いそしむ

からに慰みなかるべからず。人は、よくつとめいそしみ、よく樂み慰まざるべからず。

人には、かくて、何にまれ樂はなかるべからず。されど、その樂とし慰とする所は、つとめてよく美はしきものを擇ばざるべからず。惡しく汚き所に樂むべからず。彼の肉體の樂の如きは、大かたは、惡しく汚きものなり。惡しく汚き樂は、いそしむべき心身を養ひ助くるものにあらずして、なか〳〵に、それをやぶりそこなふもののみ。肉體の樂は、多くかゝり。これが爲に、我が肉をいため、我が身體をそこね、甚しきは、人にあるまじき非行に墮ち、けしからぬ罪人とさへ成りはつる、常に多かるためしならずや。かくては、樂も、身をやしなふくすりにあらずして、身をそこなふ毒といふべきのみ。されば、わが樂む所は、つとめて清く高く、また、よく美はしきを擇びて樂まざるべからず。

さては、いかならむ樂か、よき。貝原の翁は、自然を樂むこそ、こよなきよき樂なれといはれしを。げに、それも誠によし。自然の美、をりふしの景色などは、も

なり。されど、それもさるものにて、わが敷島のやまと歌の道も、また、樂むに清く美はしくよき道ならむ。すべて、文學の與ふる樂は、精神上の快樂にて、彼の汚く恐るべき肉體上の快樂にあらねば、其の樂や、極めて清く高尙に、また、極めて美はしくめでたし。我が身體をやぶり、我が肉を腐らせ、さては、あるまじき非行に墮ち、けしからぬ罪人となりはつる如き恐ろしき害はあらじ。殊に、殊更なる黃金をも時間をも要せず、情あらむ人は、誰も〳〵樂むを得べく、且、歌の道は、心情の美を本としたれば、それを樂むが中に、知らず〳〵我が心を美ならしめ、高尙優美なる境に、わが身を置かしむべければ、よく我を慰め我が身を養ひ助くべき樂たるのみならず、また、我が身を高く美はしく導くべき道たるべし。

おのれ、これを歌はずもよし。唯、これたゞよみこれをきくばかりを樂むにても、あはれなる心情、あはれなる歌を見聞き樂みてあらむには、いそしみ勉むる身の、をりふしの慰さとなるのみならず、知らず〳〵、心も美はしくけだかき方に進むべし。

社友なる雨江子が、此の頃

しきしまのやさしき道の奥かころ
心の水のすみかなりけれ

とうたひこしたるに、げにや、この道に樂みて、諸共に心を淸くすまさまほしと思ひあたりて、孃たちにつげまゐらすになむ。



論說

割烹と禮節と（八）

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

石井泰次郎

有住齊氏（三）

類聚婚禮式の組織は、實に前條に載錄せる、久米幹文大人の序詞、山下重民君の叙辭を以て、其大躰を知るに足らんか。

雪姑首尾は、編者が禮節學上生命と擧げ、

めざりし所なり。

斷上、識者をして、辨論せしむる事能はざる條々の見ゆたる、即ち氏が所說を滿足せ

輯上、論者をして、拜誦せしむる事能はざる條々の見ゑたる、即ち氏が所說を滿足せし
めざりし所なり。
尊姑首尾は、編者が禮節學上生命を捧げて、婚禮式法に就て日夜講究しつゝありし筆錄にして、未だ其所說の極を結ばざる物、しかして此類聚婚禮式は、先づ其筆錄を刊行し、世間の意向を伺ひ、以て著者が意見と、其研究せる所の實用的の式法とを以て、明治聖代に執行すべき本邦婚禮の一般を示さん爲に、第一鞭を附せられたる著述なる事は、毫疑を存せざる所なり。

全部五卷に就て論者の難ずる所、第一卷にては、結納品の圖の說明の乏しき。就中女のしつけ所載の圖を載せられたる。第三卷にては、床裝飾の全躰の說明、饗膳仕立方の全躰。第四卷にては、皆子餅叺の條。是等の圖說及實用的の敎授方法の詞に乏しきは、著述者が自ら滿足する所に非ざるの一端なり。

又本書の挿畫中、明治以前諸大名婚禮式の圖、其他卷首揭載の四圖、幷に卷中膳部の圖は、論者をして再讀すべき價値を存せざらしめたるは、著述者が自らも滿足する處に非

ひ給へる、翁が幸福、たとへまつらんものも、侍らかし。よもの雅人も、さこそは、松にことほぎ、竹にたとへて、とりどりに、めでたき詞の華を寄せて、かり無き翁が壽をぞ、祝ぎまつるべき。我が身、かゝ道には、一層つたなく、名木の中にまじれる何とやん、いと、恥かしき極みなれど、嬉しさのあまりに、言かくなん。

人

磐城國白河町　八木沼里子

らかに治まる御代の、三十とせあまり一とせの神無月、五日といふ日。山田いさ子刀自の、ことし七十のはひたらひ給ひけるをことほかんとて、うみの子達はかり給ひて、このにぎはしきまとゐを開かれぬ。妾は幼きより、わきて刀自のみなさけうけつる身にしあれど、いとゞうれしさに堪へぬまゝ、拙き言の葉をもかへりみず、一とふしのほぎことをまゐらするになん。ても、刀自の君は、いにしへよりまれなるよはひに至り給ひながら、しかもいとすこやかに、日夕業を執りし、安逸に身を置き給はず、婦女子の業としては、欠ることとなけれど、裁縫の道には、わきて秀でさせ給ひぬれど、こゝかしこの婦女、皆其門に入りて、敎へを乞ひぬるを、いとねもころに導き給ひて、なほ點茶、挿花、禮法、且つは婦女子の世に處する道まで、敎へ倦まず、說きて厭かず、幾年月一日の如くはこくみ給へど敎へ子は、師ともあふぎ、母ともかしづきてぞなつかしみ慕ひける。まして、妾は幼きより家居近く住みなしけれど、朝な夕なに行きかひて、出でゝは手をも携へられ、居てはみひざにまつはりて、はかなきたはぶれも、刀自を友として親しみしこと、今も昔もかはらねど、刀自の御身にさち多かれといのる心も、亦一としほまさりてなん、されどけふのむしろをことほくと共に、なほこの末は、千代に八千代に榮ゑまして、數多かる敎へ子や、馴れ慕へる妾等が、世の大海に棹さし出でんうしろ見し給ひてよと、乞ひまつるになん。

(以下原稿到着順)

中山さみ子

日毎に、寒さもいみじう候を、御揃ひみけしきうるはしうておはしますこゝこよなう御目出度御事と、祝ひまつるになん、扨御祖母樣には、八十あまり八とせに、渡らせ給ふよし、さても御目出度事にこそ。かゝる高齢はれぎても、中々にもづかしきに、猶御不自由のこころもなく、御すこやかにおはしますは、いとも稀なる御事にて、御祖母様も、定めし御滿足に、御思召され、御一同様も嘸かし御よろこび給ふらん、こなたにも、かげながらうれしうなん、げに申す迄もなき事ながら、次第に寒もまさり侍べれば、猶一しほ、御氣をつけられ、此上幾千とせもこへ給んことを祈りまつるになん。さて此品、粗末には侍れど、御祝ひの印迄に御目にかけまゐらせ候、先は失禮ながら、文もて御祝ひ申上ぐるになん、あなかしこ。

生駒ふれ子

七十なしも、古稀の賀さ、申すなるか、祖母君には、今年八十路にならせ玉ふよ　にて、近き内に、擧げさせ玉ふ、御祝ひのまどゐに、

に、御老人は、弥て御健勝に、ましませば、[illegible]て、御盛典の御事と存じ奉り候、古銅の鶴龜、八十路の後も、なほ千代萬代と、かはりなく、八十宇治川の、流れも、溢させぬ樣にと、御祝申上げ候、いづれ御目たまはり候ふ上、萬づ御喜び申上ぐべく候。先は目度かしこ。

佐々有都子

筑紫の道のくちの國嘉穗の郡飯塚の町に歴代すみませる老翁在しけり。其は木村名は二叟となも稱へたまひける● 今年は、八十歳の上なひさふたつ超ねたまひて、いとすこやかに在しけるが、年ごろ口中の齒落ちて不便におもひたまひしかば、入齒をなしたまはんと齒醫にあつらへたまひ、すでに入れまさんとなしけるに、おもひきや八十老翁の、おく齒の生ひいでんとは、その老翁の、消息を妾におくりこしたまひぬ、そのはしつかたに歌かきそへられたり●

老はてしふるははおちてまたさらに
かれいろみせぬにひはもねけり

とあり● いとめづらしき、長壽の老翁● あなめでたきためしの大人● これみづみづしきみづはの生ひいづるぞ千秋の長五百秋にうるし[illegible]の、米ながく、よはひかされますしるしならんと、ほぎこと奉る、かしこ●

谷口ふき子

我がなぢや、古も稀なるといふ年より十年をも過しきて、今年は白傳ふ八十とはなりにけり● されど腰もかゞまらず、手足もなえず、老いて益すこやかなるぞ、いとめづらかなるや。さて我なぢには、人をめぐみいつくしむ心のいと深くて、貧しき人ともに、衣を與へ、米麥をめぐまれぬること、數知らず、殊に昨年は稀なる凶作にして殆ど、道に餓ゑ死にたる人を見んばかりなりければ、或は倉をひくゝして米麥を賣り、買ひ得ぬ者にはそれをめぐみ、又粥などにてたうべさせなどして、細き玉の緒

に[illegible]ひいおろは必ずさるゆゑならんかし。こたび八十のよろこびの式をものし給はんとすさたまはりて、嬉しさにおさへがたくて、つたなりなるかたことをも恥らずかくなん。

河原芳子

千早振神路の山のいやさかねにさかね、五十鈴の川の千世かけて清きながれのたねせざらんごとく、古よりまれなりといへる七十も、十とせのまへに經て、ことしは八十の祝ひのむしろを開き給ふとて、妾をもまねき給ひたれば、そのめでたさには堪へず、つたなき筆もて、君の齡のすぐれたまへるをことほぎまつるになむ、

もゝちかき八十路のさかも越ねてきし
君や千とせの松にいこはん

藪内つき子

桐の一葉落ちそめしより、朝夕は一きは肌寒く、木々の梢も色に出て、虫の音も夜々によわりゆき、籬のもとの菊のみ、人待がほにさきにほひ、やうやう秋ふかう相成候折から、御全家樣御揃ひ、御きげんよう御すごし遊ばされ候御事、まことにうれしう存上げ候、扨て御祖父樣事、御高年に渡らせられ候よし、かねて承り居候ひしが今年は米壽の齡にならせ給ふよしにて、近き程に、その祝の宴をひらかんとて、數ならぬ私まで御招き下され、有がたく御禮申上候、あなた樣方は、御家族も多く榮ね給ひ、御親族もあまたあらせらるゝ事に候へば、定めて御賑はしき御事にて、御老人樣御始め、御一家樣、さぞさぞ御よろこび遊ばされ候はんと、只今より察せられ、私共までうれしう存居り候、殊に御祖父樣には、御高年に渡らせ給ひても、御身体すこやかに、髮の白くならせ給ひしのみにて、いさいさ御達者のよし、松のみどりのいや深く、かめの齡の萬代までも、さかゆまさむことを祈り上げ候、ついては、古銅の鶴一雙、樂燒のかめ二つ、千代萬代にあやからせ給はんやうにと、御祝ひの志

るしまでに差上げ候間、御床飾になし下され候はゞ、妾の嬉しさ、此上もこれなく候、御當日には、かならず伺ひ奉りて、くさ〴〵の祝言申上げ度、今より待ち居り候、先つは御招きの御禮まで、申述ぶるになむ、あなかしこ。

湊谷いく子

世には長壽の人も多かめれど、この芸翁の如きは、實に稀なるべし、また世には壯健の人も多かめれど、芸翁の如きは、實に珍しかるべし、翁はいさわかゝりし程より、養生の道をよくまもり、日ごとにあさは早くおきてよきほどに運動し、又さけをも飲まず、煙草をも嗜み給はずさか、さる故にや、今年は八十歳になりぬれど、ありくにも杖を力させず、居るにもおしまづきをたのまず、常にあさは起をいたゞきて、出てゝ下男どものなすわざを掟て、夕は月をふみて歸るも、いさゝかもつかれたるさまも見ゐ給はず、實に珍しさいひつべく、世に稀なりさいひつべし、かくては、

いさやすく千年の坂もすき行きて
八千代のつはき君ばたならん

吉岡歌子

かしこまりて承りぬ、御祖母の君には、今年六十の御齢を重ねたまふさて、そが御祝のむしろを開かせ給ふさか、御自らの御よろこびは云ふも更なり、常に御学む深き、かぞいろの君、さてはあなた樣の御心の中、まぞかしさ推しはかり奉る、皺や、童顏鶴髮さか申し昔より、齢久しき人の例に引き出で侍るもの、こはまた御髮さへ黑々しう物し給へば、更に左樣の御年さも思ほゐぬまで若やかに見ゐさせ給ふは、まさしく千代の御齢を重ねたまふ御徴にて、全く日頃御いつくしみの御心ふかく、物したまふ御むくいにこそ、たのしき御行末なりや、祝ひ奉る志の程、何にしらせん由もなければ、猶も常盤堅磐の御榮を祈りて、松竹梅の三幅奉る、あなかしこや。

綿野りき子

年月は過きやすくて、はやも七十の御よはひにみたせ給ひぬさか、さるに、露よわらせたまひしみけしきなく、まめやかによろつの業にいそしみ給ふ、かくも御めでたき御事の侍るを、誰も皆御うらやみまつるにこそ。尙千代に八千代の坂をこゐさせられ、之にましたる御喜びを重ね給はんこさ、御手植の庭の松にも知られ侍り、此赤白の品、いささ粗末にははべれど、いさゝか御ことほぎのしるしまでにまゐらするなん、あなかしこ。

河村君子

なにがしの翁、ことし七十の春を迎へ給ひぬ。されど耳もよくきこゐ、目もよく見ゐ給ふなり。七十路のよはひを保つ世に例すくなからざれど、かく若人にかはらぬ人こそ、世にまれなれ。さてそが祝ひのむしろに、己れもまねかれたり。そのむしろにて、つたなき一首をうたひでたるは、神路山の麓、五十鈴川のほさりにすむ河村の君子、

度川會の川水は

流れて千代も絕ゐじかし
君かこゆべき年波も
此の川水に異ならじ

名取正代子

御そばの君、ことし八そぢの春秋をかされたまひぬさて、來ん天長節の佳き日をゐらみ給ひて、御祝の宴せさせ給ふさかや、よりて數ならぬわらはにも御席のかたばしをけがしまゐらすべきやうにいひおこし給へるなん、いさもうれしうよろこび聞ゐ侍る、さてもよのつれに、七十八そぢをば、高き齢さまをし聞ゆる物から、日ごろまめやかにおはし給ふ君にしあれば、八十路はかりのやすらかにこゐ給ふは、更にもいはす、今より千させの山路のぼらせ給はんには、いまだはるかにて、やう〳〵ふもさにやれはさんかし。されば、この後、ますます御すこやかにものし給ひて、行く末は尾上の松に、將、岩が根にすむらむ鶴龜のよはひにも、立ちまさりたまふべくさ、いはひあげまゐらするになん。さて此酒肴、いさゝか御祝のしるしまでに、御らんぜさす、いかでをさめたまひてよ、あまりはまゐのぼりて、よろづよろこび聞ゐあぐ

代も色かへぬ、松のみさりを手いけざなし、日頃ゝみつむきのわさにたけたまひて。多くのみまこの君たちにも、こと〳〵のわさなれりころになしへさせ給ひつゝ、いつも〳〵、春の日ののさやかにすごして、今ははや、八十八の御いはひもいさおこそかになけさせられ、さ〳〵にすゝみ行く世をあふきつゝ、いさおもしろく、いつも〳〵御こやかにましますさの、あはれ芽出たく又うれしさ：はみになれは、さ拙くはべれども、此五葉のまつは、妾か年頃朝に夕に手入れなしつおひ立てぬるものにはべれは、すゑ永くあやからまほしさ、根こしてゐちするになむ、あなかしこ。

無名

べて、人と生れたらんには、よはひ長からんことなれがはぬ者やはる、されどまことに志を得ぬるは、百人が中に、二人一人もおぼつかきばかりにあなるを、御祖父の君には、米の御よはひ重れさせ給ひをもて、來ん菜の日に、御祝のむしろひらかせ給はんことの嬉しさ、いまよりは、千代八千代にかぎりなく、いよゝ榮ゐさせ給ふらん、な嬉し、あなめでたさ、操返し〳〵ことほぎまつる、實や御自らはさより、うからやからの君たちの御悅ひ、いかにか、御坐らん。時も秋の末つかたに侍れど、御前のみは春の心地して、ゑみつどひ給るかた〳〵の御有さまを見まゐらせなば、高砂の尾上の松に、ま年經るも、羨やみなんと、たゞ其日のみぞまたれ侍る、何れ對面たはり、つきぬ御祝は聞ゐ上ぐべけれど、嬉しさのあまりにいそぎ一筆かくん。

日吉あさ子

なうれしやな。我師の君には、和歌の浦波重れつゝ、稀なりといふ、齡をまへ。四年の前にすぎ玉ひ、日々數へ子等を導き玉ふ、御すこやき、老てふ事も、白菊の、千代の下露、くみやし玉ひけん、千うた八

侍る。

美濃君子

七そぢだに、むかしより稀なりと云ふなるを、御老母樣には、今年八十路をいと安く御越しなされ、實によろこひの極にて、芽出たくたんことほき申納め候、さて、來ん廿五日は、御誕生日に當るを以て、祝の席を御開き成され候。私も故鄕にあらむには、親しく御祝ひ申上げ、且つは、御餘滋をも頂戴して、御長壽をあやからむものをと、他國にさすらふ身は、只これのみ殘念に存じ候、別封老松遊龜の畫軸は、いと拙き品には候へ共、古歌をちなみて、此松と龜とに千歳をまかせおきて、八百萬の御齡をは重れさせ給はん事を祈る心のしるし迄に、呈上致し候。何卒御納め下され候ひて、當日宴席の御裝飾の料ともならば、幸福に存じ候、先は御祝詞まで、あなかしこ。

佐久間八重子

たれか、龜の年鶴の齡を願はざらむ、然はあれども、之を得るには道あり。常磐の松の操を守らざらば、あだなる道にふみまひて、命を縮むることあらむ。よし、行ひ常にたゞしくも、吳竹の節のごと、身を篏はざらば、ゆくりなう、玉の緒を絕つことあらむ。よし、又行ひ正しく、命永くとも、もの學び、いそしみごとに、いくそばくの艱苦を堪へ忍び、能く勵みて、譽れを世に擧ぐることと、椛の笠にすてゝふ、松の霜雪寒風にめげで、いと美しき花を開き、最芳ばしき香を發つ如くならずば、世に生ひ出でし甲斐やなからむかし。

御祖父の大人には、今年米字の齡を迎へさせ給ひて、腰に未だ弓も張り給はず、眼に未だ玉の光りもかり給はず、頭に雪は頂かせらるゝも、未だ最みづ〳〵しうて、いと健かに渡らせられ、殊に、世の人の覺ゐは、益よく、譽れの聞ゐは、愈々たかう鳴きわたれり。これ他なし、皆日頃行ひ正しく、辛苦を嘗め、勤勉の功を積ませ給ひし結果にやあらむ。い

いゝ稀にめづらしうなむ。よて、今日そのことほぎの筵を張らせらるかいさゝいめでたうなむ。それに付き、御招きに預りいさ忝なうな●わらは如きは、其の行ひ其の功しは、迚も似るべうもあられども、の露だにだぐへさの、厚き志にや侍らむ●いさうれしうなむ●さればがで、必ゝゐで侍りて、御壽ぎを聞ゆあげ、尙、長へに榮ゆさせ給はことを、祈り上げ、御恵の雫をも頂かなむ●此鯛海老取交ぜ一籠、聊は侍れど、今日の祝ひの驗迄に、參らせ侍るになむ。速に御取收め給らば最恭なうなむ。あなかしこ。

降田滿起子

常の嵐の、吹すさぶ世に、六十路七 路、生くるゝは、古よりいさ稀なり云ひ傳へ侍るに、君が祖父君には、今年八十のよはひを重れさせ給ひ、いこゝすこやかにおはゝ給ふごよ いさゝ\珍らしく、目出度限なん。御子御孫達、數多おはしませば、朝な夕な御そばに事へ給ひて白う樂しう、日を過し給らん、そがさりごりに榮ゆ行ま給ふを見たまては、如何ばかり、嬉しう思召すらん げに幸多き御身の上、いさもうらやましう、いかでわやかりなんさ こそ思ひ給ふれ、なほ千代に千代に、萬代までもながらへ給へさ祈り參るになん、

事もなく、八十路を越し君なれば、
千年の坂もものゝ數かは

頃植木などご好ませ給ふよし承り侍れば、此松一鉢御長壽を祝ふしるしさ、送りまゐらするを、御慰みの料にもなし給はゞ、いさ嬉しうこ、

みもさにさ送るさきはの姫小松
君さこもにも千代をふるらん

いもく君よりもよきやうに取りなし給ひてよあなかしこ。

丸山郁子

祖父の君には、古來稀なりさいふなる七十路の阪をわさに見送ひ、今年は米の字の御齢に宿らせ玉ふさか、いさもく御目出たき事にじ侍り、殊に御家の礎は、さきはにかたう据ゑさせられ、縮御うからやからも榮ゆ玉へば、實に人生の樂しさを御集め遊ばされ候御身さ、重ねく\も御よろこび申上げ參らせ候、かゝる御高齢におはしまさ候ひても、いよく\御健かにて、壯者も及ばぬ迄におはすさ承り候は、やがて百年の阪も安々さ越ゆさせられて、千代萬代も榮ゆまさく御志るしさ存じ上げ候、古より、仁者は命長しさこそは申し候へ、日頃御情深くまして、御慈しみは草木にも及ぶさ承り侍れば、其の御積徳の御餘慶にて、かゝる御長壽は自然の理さ、失禮乍ら存じ上げ參らせ候、さて、明日は其の御祝ひの御宴を張らせ玉ふ由にて、妾までも御案内下され、實に身に餘る光榮さ、御よろこび申 候、菊の下露それならで、御盃の雫を頂き候ひて、御長命にあやかり候はゞ、いかにか喜しからましさ存じ候、此の石龜は、昨日弟の總七川原に參り候ひて、皆むしたる巖の上に遊べるを、携へ歸りしものに侍り、是こそ御館にさゝげまつりて、御壽ぎのしるしにせよさの奇瑞なるらめさ存ぜられ候まゝ、やがて御目にかけ參らせ候願はくは、御池に放ち玉ひて、御祖父様萬代の友させれらんことを、あなかしこ。

大友つぎ子

四方の峰々には、紅葉色を爭ひて春の花よりもさ打誦すべく、庭の黃菊は、いさ艶に匂ひて香はしく、雪の中なる梅よりはさ購へつべし、かゝるよき時のよき日をえらひて、茶道の師の君若松の翁の、八十の祝ひのむしろを、常磐の緑したいろ千代の松原にひらかれしこそうれしけれ●千年の鶴も空にまひ、萬代の龜も汀に遊ふげたりさ、翁のうからやからはさらなり、多くの門人も打集ひ、翁の常磐に、いつまでも榮ゆませさほき祈り、うちあげ遊ぶこそうれしきわざなれ●此にひ、千代の吳竹もて、あまたの茶杓つくらせ給ひ、授けらるゝぞ、いさ目出たきことなりけるさ、拙き筆もて思ふ旨なかいつゝりて、ほき言の一くさとはするなり●

第八版

三輪田眞佐子女史著

女子乃本分

銀摺彩色表紙 和綴最優美

全壹册

定價金廿五錢 郵税金六錢

べき本分を明にせるもゝ之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは世間既に定評あり、敢て贅せず。

●所載極めて擴大試に其目次を示さむ●

東京京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社 （電話本局八八）

第十二卷 第四

●日本の古語と朝鮮語との比較(完)……白鳥庫吉
●五七調の七五調に變じたる理由(承前)……高橋龍雄
●大寶令以後鎌倉幕府に至る迄の官職變遷の情狀(完)……幣原坦
◎講述
●禁秘抄(承前)

婦學 裏錦
◎第七拾二號(要目)
一冊定價金六錢 郵稅一錢を要す 毎月十五日發刊 毎號六十頁以上
明治三十一年十月十五日發行

第四版

三輪田眞佐子女史著

女子處世論

定價金廿錢 **全壹册** 郵稅金四錢

本書は女教育に有名なる三輪田眞佐子女史が日常實踐躬行に徵し女子たるものの世に處するの道を詳說せしものにして字々皆着實に句々悉く誠意に出て一も虛構の文字なく其理義を丁寧反覆す此に依りて益々女德を養ひ以て國民の慈母たらんに資すべく實に婦女子たるもの坐右一日も缺く可からざる良書たり

今左に本書叙する處の目次を示せむ……

目次

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社 (電話本局八八八)

こゝろの華

九

こゝろの華は歌文専門惟一の雜誌にして畏くも天覽の榮を辱うす

●定價●一冊金十錢●六冊前金五十五錢●十二冊前金一圓●郵稅一冊金一錢●郵券代用一割增●爲替は東京青山局宛の事●

●發兌元 東京市赤坂區青山北町 こゝろの華發行所●

●發賣所 東京神田表神保町 東京堂●東京市麻布區笄町 文遊堂●

本校は日常雜菜料理より諸祝儀式料理に至るまでを速成簡易に教授す

●授業時間

女生徒　毎日曜日午前九時より午後四時まで

男生徒　毎土曜日午後一時より全五時まで

●教授科目

○雜菜料理法○普通料理法○茶會席料理法○諸祝儀式料理法○婚禮式料理法

●教授法

○切方○煮方○燒方○搔敷物（野菜むきもの造物の事なり）○献立方○給仕方○庖丁式○包物○結物

●費目

入學金五十錢　月謝金五十錢

猶細則は本校に就て問き合せらるべし。

東京市日本橋區本町壹町目拾二番地

割烹學校

四條流庖丁師範 八世

教授主任　石井治兵衛

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年十一月四日印刷
同年十一月五日發行


編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 東京國光社印刷部）


第百六十九號

女鑑第百六拾九號

目録

千代能姫



歌ひ楽

歌と樂

人には、必、樂なかるべからず。人は、皆、いそしみ勉むべき者なればなり。いそしみ勉むるからに、心身を勞するは、常なり。常に心身を勞するからに、をりふしは、それを慰むる樂は、是非に無かるべからず。誰にもあれ、人には皆勉むべき道あり、いそしむべき業あり。我が爲め、人の爲め、家の爲め、國の爲め、必、其の道をつとめ、其の業をいそしまざるべからず。されど、人の身は、鐵にもあらず、石にもあらず、綠の常磐木の、露の養ひなくては、常に變はらぬ色にて、風にも霜にも堪へ行くことの適はぬ身なり。いそしみつとむるのみにては、久しくはえ堪へじ。をりふしの樂の、身を慰め、時々の慰の身を助くるもののなくしては、よく久しくつとめもいそしみも得ざるべし。人は、つとむるからに樂み、いそしむ

からに慰みなかるべからず。人は、よくつとめいそしみ、よく樂み慰まざるべからず。

人には、かくて、何にまれ樂はなかるべからず。されど、その樂とし慰とする所は、つとめてよく美はしきものを擇ばざるべからず。悪しく汚き所に樂むべからず。彼の肉體の樂の如きは、大かたは、悪しく汚きものなり。悪しく汚き樂は、いそしむべき心身を養ひ助くるものにあらずして、なか〱に、それをやぶりそこなふもののみ。肉體の樂は、多くかゝり。これが爲に、我が肉をいため、我が身體をそこね、甚しきは、人にあるまじき非行に墮ち、けしからぬ罪人とさへ成りはつる、常に多かるためしならずや。かくては、樂も、身をやしなふくすりにあらずして、身をそこなふ毒といふべきのみ。されば、わが樂む所は、つとめて清く高く、また、よく美はしきを擇びて樂まざるべからず。

さては、いかならむ樂か、よき。貝原の翁は、自然を樂むこそ、こよなきよき樂なれといはれしを。げに、それも誠によし。自然の美、をりふしの景色などは、も

なり。されど、それもさるものにて、わが敷島のやまと歌の道も、また、樂むに淸く美はしくよき道ならむ。すべて、文學の與ふる樂は、精神上の快樂にて、彼の汚く恐るべき肉體上の快樂にあらねば、其の樂や、極めて淸く高尙に、また、極めて美はしくめでたし。我が身體をやぶり、我が肉を腐らせ、さては、あるまじき非行に墮ち、けしからぬ罪人となりはつる如き恐ろしき害はあらじ。殊に、殊更なる黃金をも時間をも要せず、情あらむ人は、誰も〳〵樂むを得べく、且、歌の道は、心情の美を本としたれば、それを樂むが中に、知らず〳〵我が心を美ならしめ、高尙優美なる境に、わが身を置かしむべければ、よく我を慰め我が身を養ひ助くべき樂たるのみならず、また、我が身を高く美はしく導くべき道たるべし。

おのれ、これを歌はずもよし。唯、これたゞよみこれをきくばかりを樂むにても、あはれなる心情、あはれなる歌を見聞き樂みてあらむには、いそしみ勉むる身の、をりふしの慰さとなるのみならず、知らず〳〵、心も美はしくけだかき方に進むべし。

社友なる雨江子が、此の頃

しきしまのやさしき道の奥かころ
心の水のすみかなりけれ

とうたひこしたるに、げにや、この道に樂みて、諸共に心を清くすまさまほしと思ひあたりて、孃たちにつげまゐらすになむ。



割烹と禮節と（八）

第二節　現今の禮節家を論ず（續）

石井泰次郎

有住齊氏（三）

類聚婚禮式の組織は、實に前條に載錄せる、久米幹文大人の序詞、山下重民君の叙辭を以て、其大躰を知るに足らんか。

…上、識者をして、拜讀せしむる事能はざる條々の見ゑたる、即ち氏が所謂を滿足せし
めざりし所なり。
雪姑首尾は、編者が禮節學上生命と參ずて、…

詳上、論者をして、拝誦せしむる事能はざる條々の見ねたる、即ち氏が所説を滿足せし
ざりし所なり。

書始首尾は、編者が禮節學上生命を捧げて、婚禮式法に就て日夜講究しつゝありし筆錄にして、未だ其所説の極を結ざる物、しかして此類聚婚禮式は、先づ其筆錄を刊行して、世間の意向を伺ひ、以て著者が意見と、其研究せる所の實用的の式法とを以て、明聖代に執行すべき本邦婚禮の一般を示さん爲に、第一鞭を附せられたる著述なる事は、疑を存せざる所なり。

部五卷に就て論者の難ずる所、第一卷にては、結納品の圖の說明の乏しき。就中女のしけ所載の圖を載せられたる。第三卷にては、床裝飾の全躰の說明、饗膳仕立方の全躰。四卷にては、皆子餅叺の條。等の圖說及實用的の敎授方法の詞に乏しきは、著述者が自ら滿足する所に非ざるの一り。

本書の挿畫中、明治以前諸大名婚禮式の圖、其他卷首掲載の四圖、幷に卷中膳部の圖、論者をして再讀すべき價値を存せざらしめたるは、著述者が自らも滿足する處に非

ざるの二なり。
此二條を以て論難せんには、著者が數十年の盡力を以て琢磨せる寶玉の光輝を損するに至らん。然りと雖、此二條に就て論難するの力を有する者、恐らくは今世上に非ざるべし。又此二條に就て彌々研究錬磨せんと欲せる著者が意向を知る者も非ざるべし。論者は此二條に就て論難するの力を、幸にして有する事を得たり。論者は此二條を論難するの力を有すると共に、著者が彌々研究錬磨せんと欲せる意向をも知る事を得たるなり。
斯の如く、類聚婚禮式は、氏が所論を滿足せしめたる著述に非ずと雖も、併も前條に掲載せる如き引用書よりなれる著述なれど、禮節學生、又婚禮法式に與からん者は、參書として必ず座右に措くべき書籍なるを信ず。
類聚婚禮式の批評は是にて筆を止めん。猶本書に次で類聚丁年式、同産所式、同祝あり。皆本書の組織に類似せる物なれど、或は本書に超越せる物もあらんか。

故實禮節の書

是、氏が禮節家として古今に其比類なきことを明證する記錄にして、又論者をして其明下に伏從せしめたる意見を、四十年來鍛錬せる禮節家の權威を以て筆錄せられたる所の書籍なり。實に是、二千年來の禮節の淵源を探りて、寛かに現今流用すべき、又千歳の

して、更に一道を開かれたる理由を筆録せられたる所の好書籍なり。巻首に擧ぐるに、禮格傳授を以てす、禮格傳授は、伊勢貞丈翁の編述する所にして、

第一蹲居の格　第二物持樣の格　第三左右順逆の格　第四足膝の格　第五進さ待さの格　第六下に置て渡す物の格　第七下に置す手に渡す物の格　第八兩人にて物を昇出る格　第九次第の格　第十衣類の格　第十一兵具の格　第十二馬具の格　第十三頭尾ある物の格　第十四長短の格　第十五包物の格　第十六卷物の格　第十七耳ある物の格　第十八　前後ある物の格　第十九前後なき物の格　第廿たばねたる物の格　第廿一あみたる物の格　第廿二魚類の格　第廿三鳥類の格　第廿四折疊たる物の格　第廿五柄ある物の格　第廿六文字書たる物の格　第廿七繪樣ある物の格　第廿八物を重ぬる物の格　第廿九緒ある物の格　第卅さちめある物の格　第卅一足ある物の格　第卅二色ある物の格　第卅三我物人の物の格　第卅四表裏ある物の格　第卅五箱物の格　第卅六袋物の格　第卅七荒卷の格　第卅八桶物の格　第卅九壺物の格　第四十泳川の傳

四十條に別ちて、寶暦十一年辛巳正月十一日、貞丈翁が清書せる所の秘藏書なり。の書を巻首に擧げられたるを以て、猶、世間無學無識の輩が專ら信用する所の小笠原氏の比類に非ざる由を知り。又小笠原流の流名を包持して、現今實用的と自稱して教授る無名禮節の遠く及ばざる事を知る。格傳授掲載の條々を陳述せんと欲すれど、未だ禮節を學ばざる者、又小笠原、及無名節家の解しがたき事實なれば今此處に言はず。に男禮百三十九條を記されたり。其目次の内殊に故實禮節の主眼とも見るべき物を擧ばれ左の如し。

○故實禮節　男禮目次　第一個屈禮　第二跪禮　第三立禮　第四膝拜　第五拔地之拜　第六稽首　第七跪拜　第八揖　第九致敬　第十動座　第十一拜賀　第十二拜揖　第十三拜舞　第十四平伏　第十五答拜　第十六列拜　第十七磬折　第十八膝行　第十九膝退　第二十柏手　第廿一路頭禮　第廿二禮法　第廿三雜禮　第廿四進退大要　第廿五起居大要　等なり。以下女禮之部畧す。

次に、包記、結記あり。以上列擧せる廿五條の解説と、包記、結記に就て聊か言はんと欲する處あれども、教授上の掟に憚かる處あれども言はず。如何に故實禮節の主眼の存する所を、右の廿五條に定めたるかは、暫らく之を讀者の判斷に任さん。

又卷尾に附するに年中儀式を以てす。

年中儀式は、明治廿五年前三年間、禮治會の設けありし時、會員と共に撰定したる所の儀式書なり。

且此年中儀式を附せるに當りて、氏は云へり。

未だ全き無疵の書にあらざれども、いたづらにしみのすみかとなさんも遺憾なれば梓げたり。看官讀みて疵あらば無遠慮に添削してさし給へ、訂直して再び公に訴んと侍りするなり。

かくいはれたる言語は、氏がすべての著述に附て、我自説にのみ拘泥せず、弘く諸説を求め、其良説に付て考究して、以て門下生を訓導せられたる一證とすべきなり。

年中儀式緒言に曰く

禮禁亂之所由生猶防止水之所自來也故以舊防爲無所用而壞之者必有水敗以舊禮爲無所用而去之者必有亂有忠と禮にこれあり我朝古來特に亂義を重んじたるは實に以あるなり維新以降時勢一變舊禮既に去られて新禮未た興らす我輩切に恐る亂患の此隙に乘せんことを夫れ禮の本は敬に在り俎豆玉帛は以て敬を表はす所のものたり內に敬あり外に俎豆玉帛ありて而後禮茲始て全し今我大祭日及祝節は國家

試に維新以前を回想せよ年始の諸儀式極て鄭重にして祝賀の情甚だ盛なりしは言を俟たず上巳には桃花以て床の間を裝ひ蓬餅あり白酒あり如之少女雛祭の周旋進退は婉娩の容儀觀るべきものありしにあらずや又端午には菖蒲艾を以て軒端を飾り旗幟を翻し鎧兜を建て列れ兒童柏餅を手にして竹馬を驅るが如き勇武の氣象溢すへきものありしにあらずや其他七夕亥猪等一年中の行事は各其由來に應して一定し全國到る處都會となく邊鄙となく皆一樣の裝飾を施し一樣の酒食を設け一樣の歡樂を盡し國民一般同一儀式を行ひたりしなり

織女の祭るに足らざるは吾之を知る然れとも姉妹と倶に紙筆を弄ひたる歡樂は吾之を忘るゝこと能はざるなり亥子餅の喫ふに足らざるは吾之を知る然れとも一家擧て新爐を圍みたる歡樂は吾之を忘るゝこと能はざるなり其喫ふ所のもの貴きなり其祭る所のもの貴きにあらず之によりて得る所の歡樂貴きなり理論の外嬉戲の中自ら民德厚きに歸するものなり

然りと雖も五節は既に廢せられたり我黨徒らに之を愛むにあらずたゞ之に代るべきも大祭日二大祝節あるもその儀式なく國民依る所を知らす風俗の終に頽敗せむことを愛むなり

恭く惟ふに今の大祭日及祝節は其起因同しからずと雖も要するに我
天皇陛下の孝道を以て天下を治め給ふ　聖意に出たるものにして陰陽禍福を主とせる五節の類と日を同くして論すへきものにはあらざるなり

本會こゝに感する所あり遠くは古典を稽へ近くは時勢に徵し各大祭日及祝節に於て國民各家の儀式として施すべき裝飾の具設くべき酒食の料を撰定せり自らおもへらく俎豆玉帛略備れり以て敬を表はすへく又以て歡樂を盡すべしと乃ち之を大方同感の士に問ひ漸次全國に普及し之をして彼の年始に於ける屠蘇酒數の子上巳端午に於ける雛幟等の如き慣例とならしめんと欲す

此儀式果して一般の慣例となるに至らば其裝飾に對ひ其酒食に就くの間知らず識らず朝廷の　則に順ひ風化の萬一に補ひある豈たゞ五節節物の比ならんや嗚呼堤防は既に壞れたり新防を築て以て水患を斷つは誰が務めぞや十七條憲法曰百姓有禮國家自治と　これ本會の深く將來に期望する所なり

例言に曰く、

例　言

一此書を年中儀式と名づく而して新年の儀式を載せざるものは新年には古來一般の慣例ありて今も大かた實行せらるゝを以てなり又元始祭は其時日猶新年の儀式を行へる際にありて此御祭事に對する儀式も自然に行はるゝによりて共に之を略せり

一此圖式の三方は足打其他の臺に代るも可なり瓶子一對を一臺に非はするも可なり其口包又花包の包方等も適宜に斟酌して可なり且つ都べての料紙は其質を撰はず唯潔白なるものを要す

一此儀式大祭日の內食物を定めざるものは之を定むるの要なきによる猶彼の七夕重陽に一定の物なきがごとし但重陽に菊酒を用ゐたるものありしが如く各自隨意に之を設け又此に一定せし食物に更に他の品を加ふる(例へば紀元節の若菜新甞祭の筍の類に魚介等を加ふる類)は固より妨げなし

一此儀式の床飾及饗膳は各祭祝の由來に適當なるものにして殊に都鄙ともに得易き物を撰へり其掛物の書畫の如きは上巳端午雛幟と同く其時節每に大小精粗人々の望に應じ製造販賣する者あるに至らん事を期す但各祭祝の由來はこの頃歲時行事朝野年中行事及祝日讀本等の書類りに印行せられて之を詳悉せるにより彼れに讓りて此に書けり

一此書は會員有住齊氏之を創草し他の諸員每月一回之を討論し每祭祝日に於て之を實行する所にして實に明治廿四年紀元節より起柴し廿五年孝明天皇祭に至て終結せしものなり

又其目次をあぐれば、

明治會議決年中儀式

○新年式○孝明天皇祭(一月三十日)○紀元節(二月十一日)○春秋皇靈祭○神武天皇祭(四月三日)○神甞祭(十月十七日)○天長節(十一月三日)○新甞祭(十一月廿三日)

又卷末に曰く、

右年中儀式脫稿せしによりて以後は人事生涯の慶賀に關する出產(着帶)喰初、髮置、誕生祝、袴着、元服、紬留、鬢そき、深そき、裳着、結納、婚禮、さしみの祝、年賀、尙齒會等の古式を蒐集したる起草に對し會員一同每月之を討議し時勢に適する作法を稱綴し漸次又發兌する目途なり云々

實に故實禮節書のあるありて、本邦神代以來古式の禮節淵源を知る事を得。又自今何萬

雛製產所式、雛製丁年式、雛製祝之書もまた故實禮節書の參考として共に備ふべき誠なり。

類聚產所式、類聚丁年式、類聚祝之書もまた故實禮節書の參考として共に傳ふべき物なり。如此禮節上に盡力せられたる餘力を以て、猶編述せられたる源氏物語考證圖繪も、又其他類を刊せざる所の好著述なること、論者が常に敬服してやまざる處なり。

女德のしをり（十七）

三輪田眞佐子

第八　私欲

をさ〳〵人として欲なきものはあらじ。寧ろ欲あれはこそ、人は日月と共に進步し、世は文明になん進代するなれ。思ひね、人の生命を保全せんとするも欲なり。財產を所有せんとするも欲なるは、何人も知ることながら、更に進みて子孫を養育し、家名を揚げんとするも、欲なくは能はざるべし。他人と交際して滿足を施さんとするも、欲なくば能はざるべし。猶深く考ふれば、一切の道德も、欲なからんか、實行すること難かるべし。蓋し人をして、絕えて欲心なきものと假定せしめんか、その反動や、所謂自暴自棄に流れんは、さながら死人と同樣たるべし。彼の浮世の汚塵を遁れんとて、世に隱るゝものすら、つら〳〵その心底を探ぐらば、多少の欲心なきにあらず。すなはち隱

遁して幽邃なる生涯を送らんとするは、既に欲の一種ぞかし。されど、人に露ばかりも欲なきを望むは、死せよと願ふに異ならず。

されど、如何なる欲も、人には必要なるか、否なり。今、人欲を分類せば、おのづから二種となるべし。一は徳を行ひ、世を益せんとする欲心なり。これを公欲と言ふ。一は害を施し、人を苦しむべき欲心なり。これを私欲と言ふ。されど、公欲は、つとめて奬勵し、私欲は必ず撲滅せざるべからず。然るに、世人往々この區別をなさずして、欲とだに言はゞ、悉く道徳に害ありと思ふは甚しき誤なり。むかし、梁の惠王、孟子に國を治むる道を糺しければ、孟子答へけらく、王何ぞ必ずしも利を言はん、唯仁義あるのみと。蓋しその利とは私欲を指し、仁義とは公欲と稱するものならんか。

凡そ私欲を退く所以のものは、唯我が一身の利害を慮り、他人の徳失を顧ざるを惡むこそ。公欲とて、強ち慈善事業の如き社會一般に對するものには限らず、一家族に於てすら、妻が夫と偕老の契を結び、歡を共にし憂を分たんとするは公欲なり。亦主婦が舅姑の安否を問はず、子孫の養育さへ思はずして、獨り美服を纏ひ、珍味を貪る如きは私欲に屬するものなり。故に、苟も私欲を去らざらんか、一家の平和團欒は得んとするも望むべからず。たとへば、前妻の子と後妻の兒と並び立つ家庭には、必ず風波の起り易

…に由るとおもるか如し。

きて女子は、境遇上見聞狹きを以て、おのづから公共心乏しきが如し。そは女子が關係する學校、若しくは協會などに於て、大方の女子は、自己の便宜を標準にして事項を議り、公衆の利害を參酌せざるは、掩ふべからざる定証とかや。されど、史を繙かば、女子にも私欲なき貴きものあり。そは誰か、大婆公の如きはその一人ならんかし。そもそも大婆公は、今川義元の臣なる河村善左衛門に嫁しけるが、寡婦となりしより德川家康に召されて、二代將軍秀忠公の乳母となりけり。その子嘗て、山中源左衛門に黨せし故を以て、流罪の刑を受けたりしが、大婆公は忠誠を以て秀忠公を鞠育し奉ること、既に幾星霜を經にけり。秀忠公その殊勝に感じ、さて大婆公病に罹り死に垂んとするとき、秀忠公その子の罪を免して以て子を思ふ親の心を地下に安せしめ、そが多年の勤勞に報いむやと、ひそかにその意を諭しけれど、それもひきや、大婆公は襟を正して曰ひけるやう、法は天下の公道なり、などか私情を以てこれを破るべき、一朝私を以て公を破らむ、天下これより法を信せざるべし、希くは、君、よく法を守り、政をつとめんこそ、老婆の本意なれと、述べけり。あはれ丈夫も及ぶべからざるその言を聞て、秀忠公も涙にむせむかりなりしとぞ。實に、後世、女子の私欲を懷かざるための模範にてこそ。

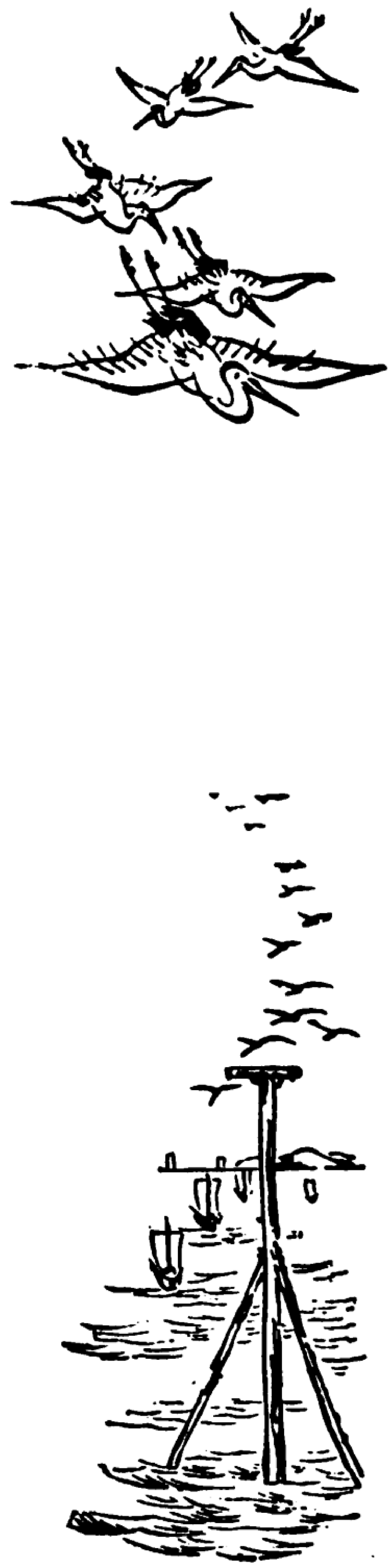
本文は女子高等師範學校より寄贈せられたるにて、今更の説ならねども、能く正道を説きたれば、特に之を本欄に收む。

兄弟姉妹に對する心得

隈部よしを子

兄弟姉妹はおなじ父母より出で、おなじ家にて人となりたるものにて、血族の親之より親なるはなし。之を樹木にたとへば、幹は父母の如く、連枝は兄弟姉妹の如くにて、互に放つべからざる關係を保てり、兄姉、父母の傍にあれば、弟妹その膝にあり。弟妹、父母の背にあれば、兄姉はその手に携へられて、共に遊び、共に食ひ、共に起きて共に寢ね、同じ慈愛に浴して人となるものなれば、その親しみの深きこと、父母を措きては他にその比なし。此の親愛なる中にもまた、兄姉は弟妹よりも先に生れて、時としては父母に代りて弟妹を見扱ふものなれば、弟妹は兄姉を敬し、兄姉はまた弟妹をあはれびいつくしびて導かざるべからず。かくて、艱難あらば相扶け、幸福あらば相分ち、心を一にして力を合せて家運の増長をはかる、これ自然の道理にして、これをこれ悌友を盡すといふ。兄姉に悌に弟妹に友なるは、これ人倫の大綱の一にして、人のまさに從ひ守らざるべからざるものなり、されば、畏くも、兄弟に友にの聖勅をもかたじけなうせり。誰人も幼き頃は、兄弟姉妹相親しまざるはなけれども、成長して他の關係いできぬれば、或

これ人にして人に非ず、あさましき限になん。
毛利元就朝臣その子等を召し、矢をたとへにしていましめていはく、此の一筋の矢と一束の矢と、これを折るにその難易いかにと皆一筋の方易きをいふ。朝臣厳然として曰く、まことにさなり。單獨の力にはこれに抗すること易くして、合成の力には難し、爾等之を忘るゝこと勿れ。凡そ兄弟の不和は皆慾より起る、慾を捨てゝ義に從はゞ、何の不和かこれあらんと。此の敎訓まことに當れりといふべし。兄弟姉妹、こゝろを合せちからをともにして一家の幸福をはかる、これ即ち孝道なり。利慾に心まどひて、互に爭ひきるは、不孝の限にて、道徳の罪人なり、嗚呼悌友の道、一日も忘れて可ならんや。





千代能姫

鹽井ふく子

げに千代はものかは萬代までも世に語りつがまほしき姫小松、千代能と聞ゆるは、結城左七郎が女なり。又或る説には陸奥の大守三浦泰盛の女とあり、又一説には金澤越後守顯時の女なりとなり。何れをそれと定めがたけれど、おのれは本朝女鑑の説に據り、しばらく結城が女として語りつがむ。さて左七郎は、鎌倉の武士にて、劒太刀はく矢の猛き道はもとより、文の道にも淺からず、鎌倉殿の用ゐも能く、所領あまた賜はりて、威勢のほどもめでたく世にときめきぬ。その父のみのみ寶として耻かしからぬ千代能姫は、げに能あり、才あり、よくたらちねの庭のをしへを守りて、學問の道をも、たちぬひ、茶の湯、糸竹の業、又武藝をもあさからず志し、心ばせやさしう、志正しく、容顏また世になくうるはしかりければ、よの人々妻にせむと、媒もて云ひ入るゝ方の多かりけるを、兎かく過すほどに、陸奥の國の住人會津の太郎信親なるもの、鎌倉に敵し、大勢を催ほして、會津の城に楯籠ると聞えしに、鎌倉にてもおどろき、左七郎を大將にして急ぎ勢を向けさせられぬ。結城乃ち馬を馳せて向ひせむること一月餘なりけるが、みちのくのあだちのまゆみ、なか〱につよく、ためむとしてためられず、遂にうち負けて、敵の手に生擒れ、牢に入れられ、やがては切られしと聞えぬるに、勝敗心もとなくいもねず思ひに伏したる姫は、聞より泣き悲しむことかぎりなく、あはれ口惜しや、我れ男子たらむには敵陣に飛び入りあだのやつばら如何にこはくとも、ためもまくりもして、恨をはらし、父もろともに死なんものを、女と生

たとへ女たりともいかでか父が殺され、恥しめらるゝを他處に聞くべき。いでよき謀こそあれ、僞りはかりて、敵を耻かしめ呉れなん、叶はねど、我が命、もとより父にうけたる玉の緒、絶つも父ゆゑ、父がためには火水もさけずとはやり立つ心をしづめ〳〵て、乳母を近づけ、のう乳母、父上牢にれはし、やがては敵の手にかゝり給はむとすと聞きぬ、女ながらも武士の子、他處に過さんも耻かし、さらば、妾遊女にさまを替へ、牢の奉行をたばかり、如何にもして父を伴なひかへらむとこそ思ふなれ、此の事母上に聞えなば我が身をあやぶみたまひて、放ち給ふまじければ、御身にのみ語るなり。のう乳母、火に入るも水に入るも妾故には日來とはぬそちと知りて、頼むはたゞ共に我を助けて、父を救て出せよと矢竹心くじくべくもあらぬに、乳母もさらばと共にこま〴〵云ひ合せ、母にはふかくつゝみて、乳母と二人、館を出で、むつの國に至りぬ。

ず宿のあるじは美くしき女のやどりけるをよろこび、一れならぬにはこりて、そちこちの人に語りぬるに、人も之を聞き、之を見傳へ〳〵て、はては牢の奉行淺香兵庫の耳に入り、あさましくも、そのやすみ子、見まくほしうし、巳が身のあたとも知らず、やがて宿の主人を呼び寄せて、密にその女を呼び入れむことを賴みけるに、宿の主人は一も二もなく心得、急ぎかへりて千代能に事のよしを語りえぞらく御越し候らへかしと言葉を添へてしひけるに、姫はかねて巧みしまた天の助とれもふ心の色をつゝしみ、さあらぬさまことと答へけるは、誠に不束の身、貴き人のあたりに出んも耻かし、如何はせんとあるを、乳母傍よりかひぞひのさまして、折角の主人の仰せなれども言葉をそふるに宿主はひとり急ぎて、言葉をつくして强ひ伴ひつゝ、其夜は酒宴に更しぬ、千代能はあやまちなきやう、牢のあたりを見れきつゝ、且つさとられじと心をこめて

人々をもてなしつ、奉行に取り分けて酒をすゝめ强ひけるに奉行をはじめ人々醉ひふし、音もせざるに、姫は密に起きてわたりを伺ひつゝ惡次と云ふ牢奉行がわたりに立ちよりて、わな醉ひ給ひてか、湯をまゐらせんかなど、たはぶれよれど、前後も知らぬに、喜びつゝ、わが帶につけたる鍵をそつと取り、牢のとぼそに立ちより、一重、二重、三重固くかけたりし錠をそのまゝひき放し、父がわたりへつと寄り、高手に結びし繩を引き切り、父上千代にて候とばかり暫時がほどに疲れし手を取り、乳母と共に引き出で、やうやう忍び出でゝ七郎が郎黨土田兵衛と云ふものゝ並びの里にすみけるを尋ねて、しばらく影をかくしつゝ、夜半に紛れて忍びに古里にかへりぬ。遂に父を助けて、耻をきよめたり。となり。あはれ矢竹心の一すぢばかり强きものはあらじな。

後越後の守金澤某に嫁し、夫を失ひ遂にかざりをおろして尼となり、偏に法の道に歸依せ　。

又一說には足利讃岐の守貞氏の後妻となり、弘安八年十一月平の貞時、長崎賴綱の讒言により三浦泰盛、其子宗景その族類みな難にかゝりぬるに、父外家の睦わりしに、北條のわたしみを以て、咎は得ざりしかど、怏々として月日を送りけるが、遂に果敢なき露と消え失せしに、千代能、今はうき世を秋風のつくづくと身にしみて、遂に世をすて、家を出で美濃の國に至り、松見寺の老尼につき尼となり、名を如大禪師無著尼と呼び、諸尼の爲めに賤婢となり、薪をとり、水を汲み勞をかへりみず、暇あるときは禪床に坐して、世をさとりけるが、そののち八月十五日、月あきらかにして雲なきに、如大、谷に下り水を汲みけるに、桶の底ぬけて水みなつきけれど、忽然として大に悟り、和歌を詠じて曰く、

とにかくにたくみし桶の底ぬけて
水たまらねど月もやどらず

世の人此の歌を傳へて口號となせりとぞ、後上杉氏、

と名づけて如大を請じ第一代となせりとぞ。時の人百年和尙と呼びなせしとか、佛の道はとにもあれ、とにもかくにもせよ、とにかくやさしき孝女なりけり。

安良賣

山本正周

波部の安良賣といへるは、筑前の人、宗形秋足の妻なり。年十六にて、秋足に嫁し、舅姑に事へて孝に、夫に事へては貞なりき。父母死して後は、其の墓に至り、哀を盡し、夫死して後、年なほ若かりけれど、之を聘せんとするもの多かりしかど、安良賣は、貞女二夫に見ゑずとの古訓を守りて、堅く動かざりきといふ。されど、郡官より、此の事を上に白しゝに、詔して、を免じたまへり。



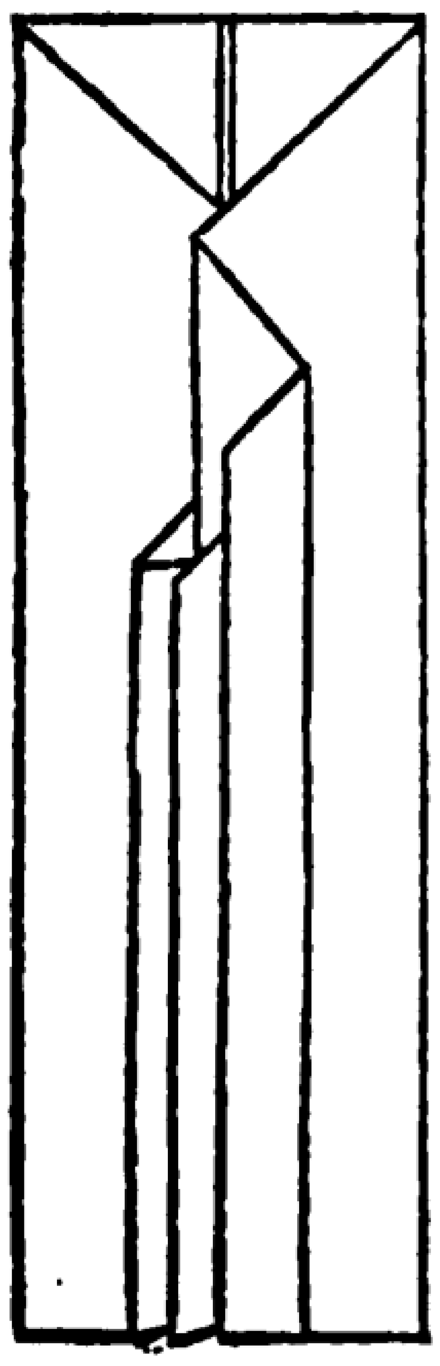
包の記

有住齊教授

門人 なみ子 鐐子 筆記

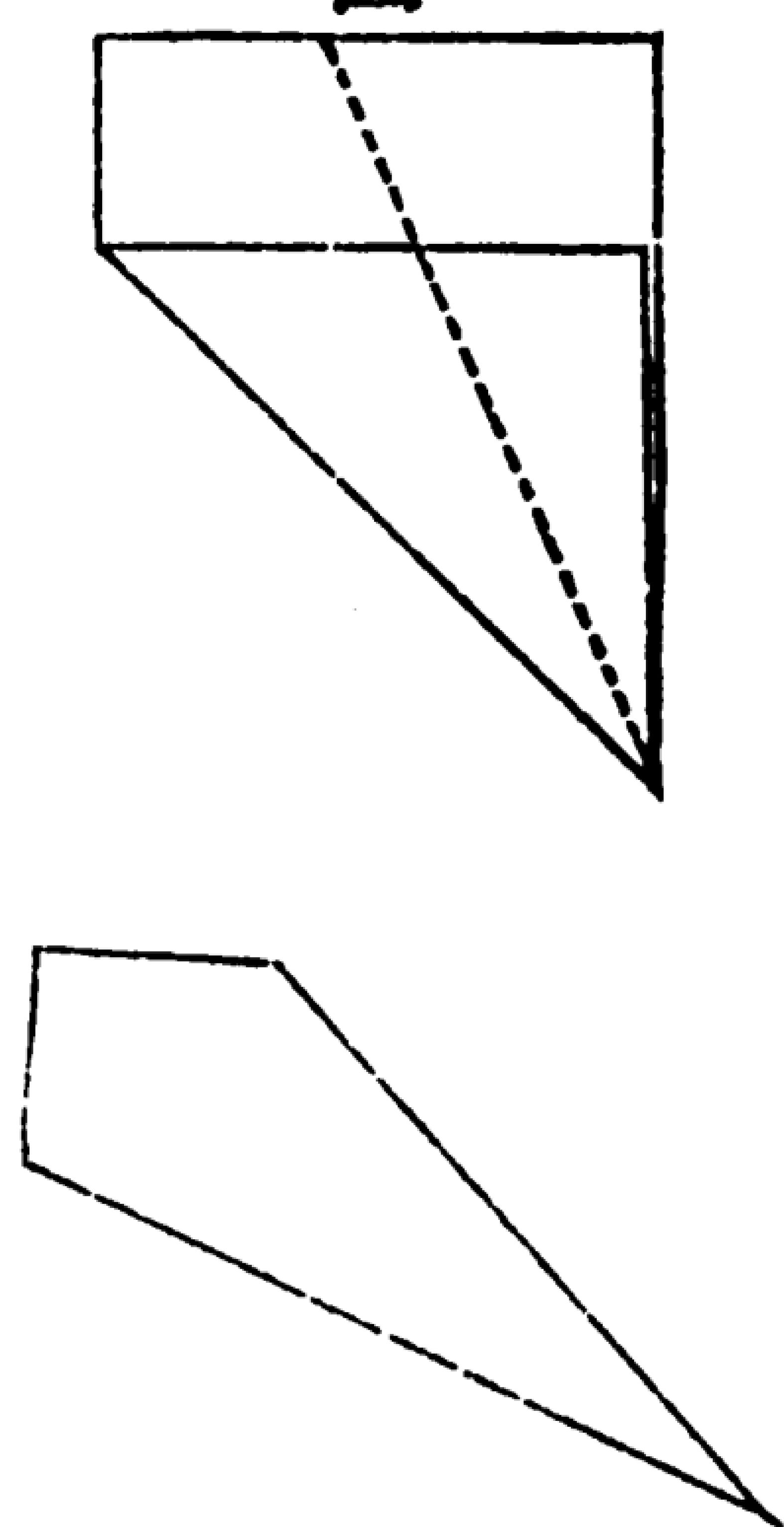
桃の弓葦の矢包

これは節分の夜の祝に用うる包方なり。進物に斯く包みて用うるなり。



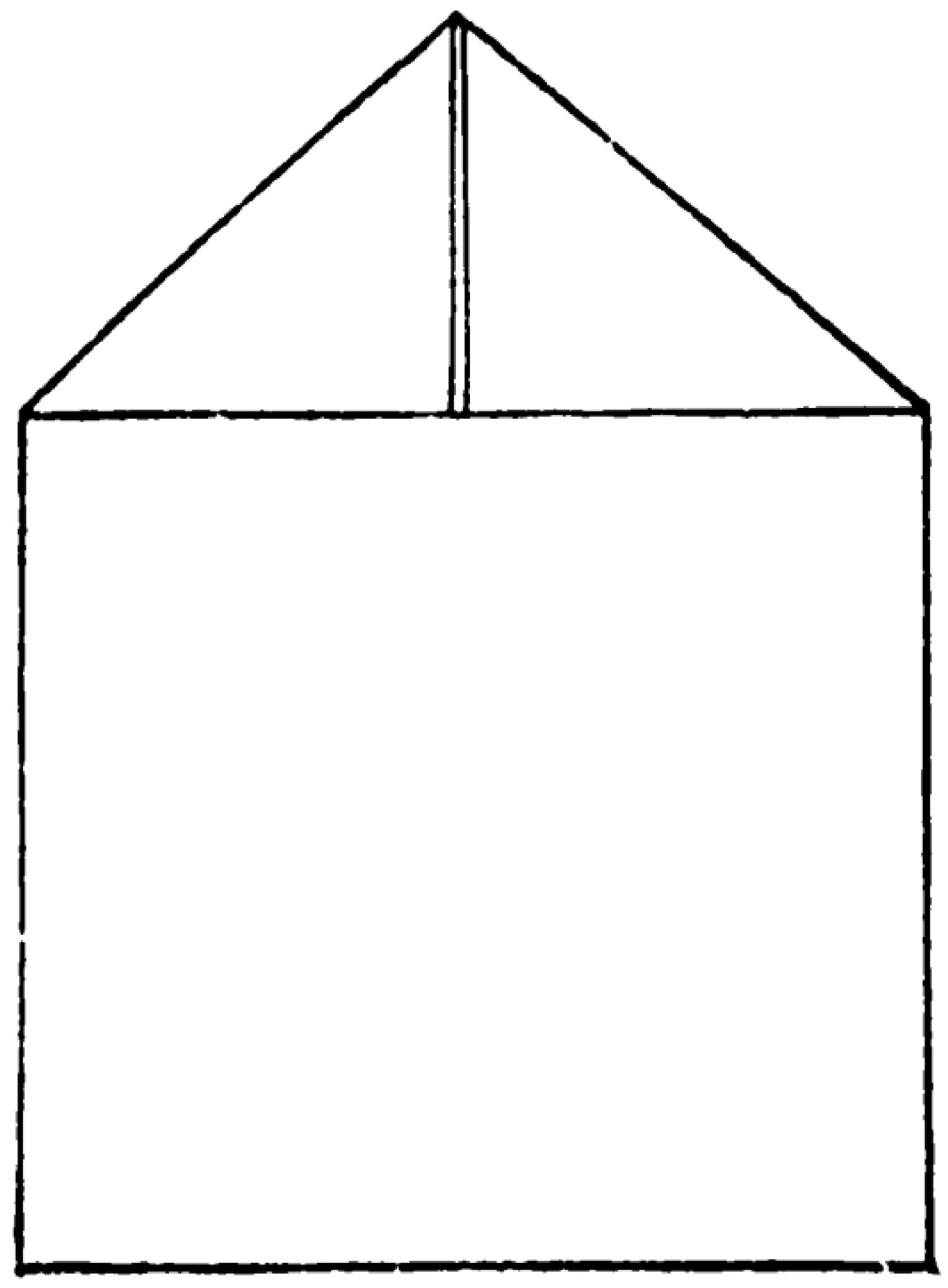
包方は、裏曲の法にて紙取をなし、先づ形紙を造る。

裏曲の圖

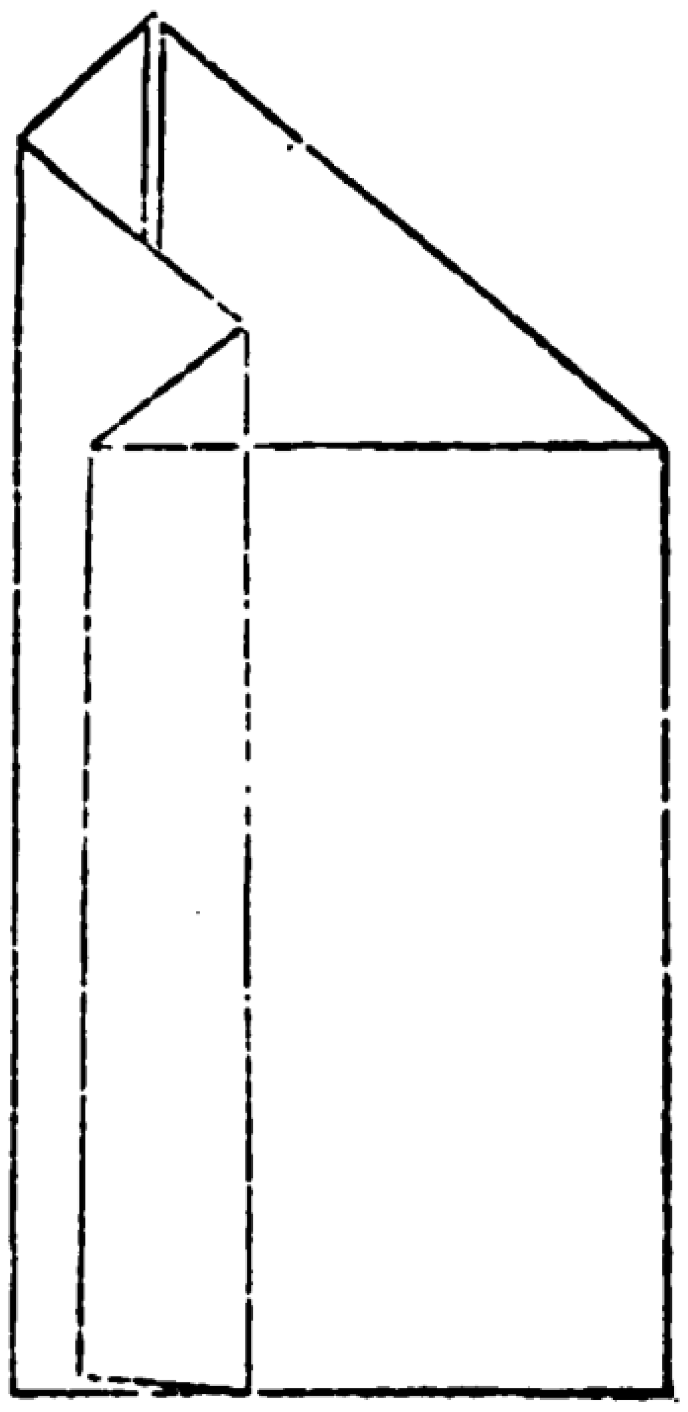


第二圖の如く、上方兩角を眞中の方へ折りこみて、

第一圖

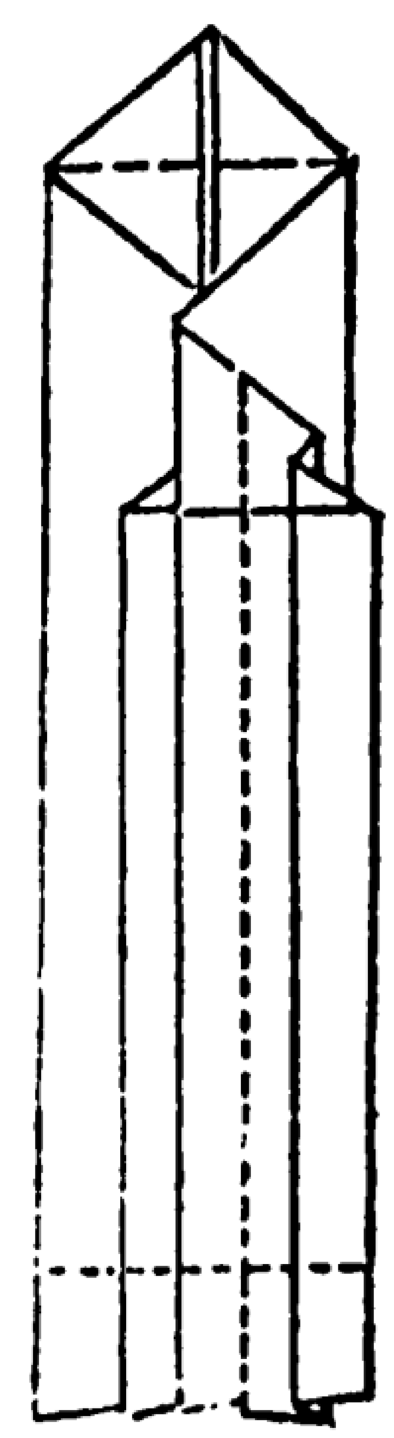


第二圖



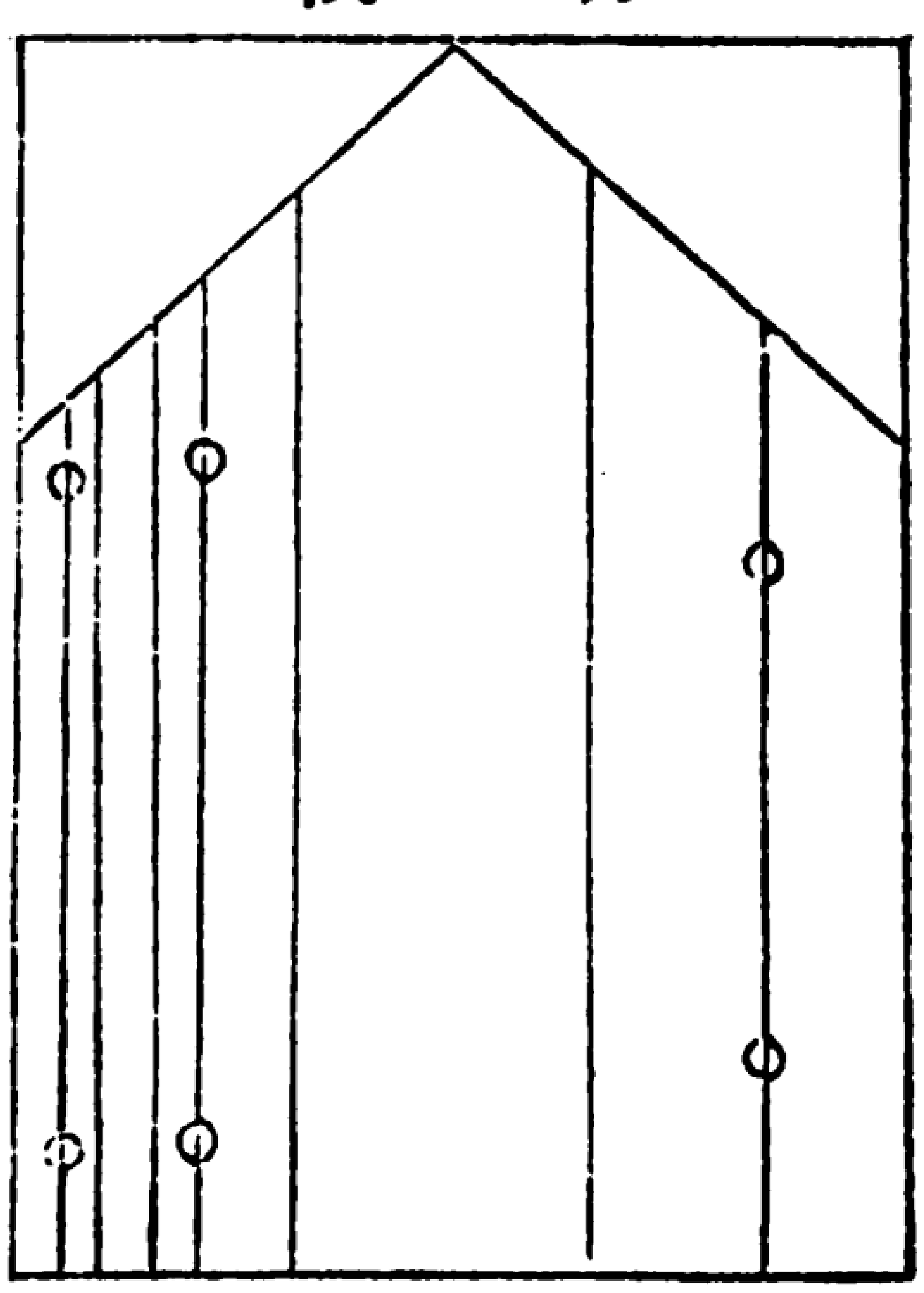
次に左の方を右へ一つ折り、又左へ一つ折り反す。（第二圖參照）次に右の方を左へ一つ折り、又右の方へ一つ折返、又左へ一ッ折り、之を開き伸して、又其次を左へ一ッ折り、又右へ一ッ折る。（第三圖參照）

第三圖

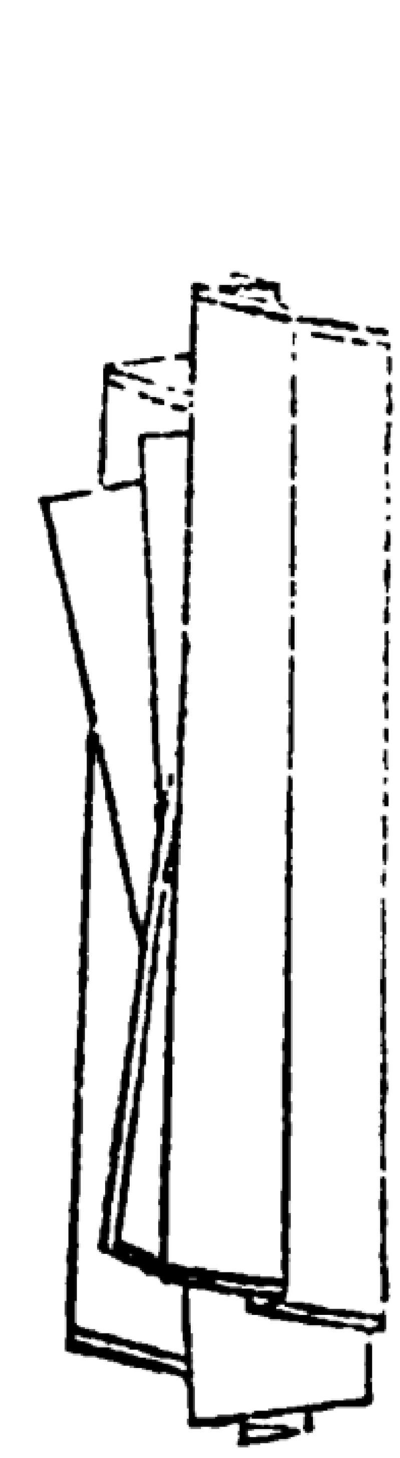


斯くして第三圖の縱の點線（即ち始め左へ折りて又開き伸したる處）の處を左へ線の通りに折りなして、さて墨にて、折目〳〵に線を引くべし。斯くして開きたるが即ち形紙の圖なり（○印を付けたる線は裏より折りたるなり）

形紙



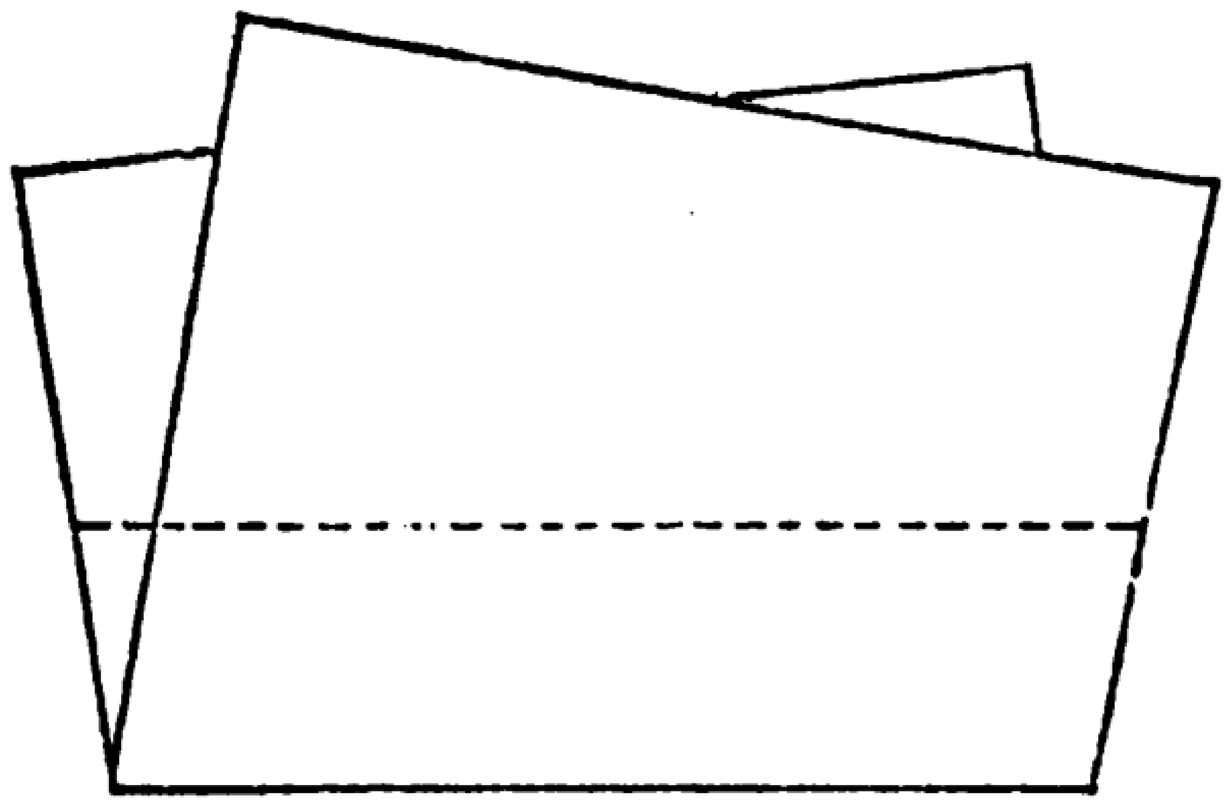
さて、形紙に合せての折りかたは、形紙を造りたる時の如く折れぞよし。斯く折りて後、第三圖に示せる上下の横の點線の處を見計ひ、共に裏へ折り反せぞ、之にて折り上りとなる、



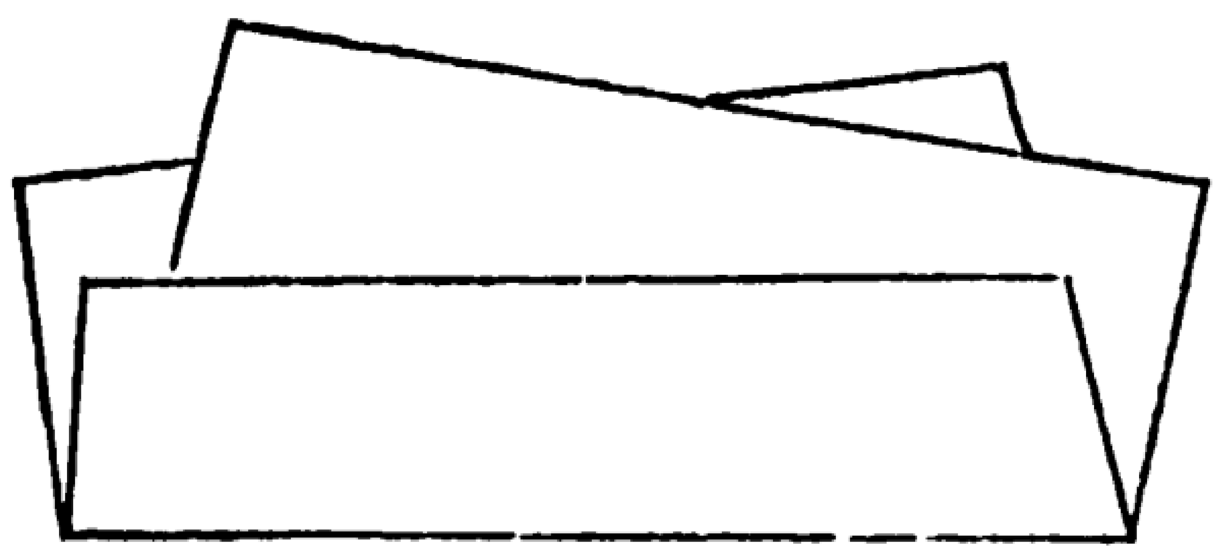
はぬさきに、小袖類の寸尺をかきて贈るに、鯨尺包まずして箱に

けて贈る事あり。其時の包方なり。
組み入るゝこともあるなり。
取、前に仝じ。第一圖の如く折りたるを、點線の處
手前の方より向へ一ッ折りて、第二圖の如くなし、
を裏反して第三圖の如くし。其點線にて示せる線に
向きて折り試むべし。但(一)と(四)との線は凹みたる
線にて、(二)と(三)とは凸みたる線と
る。一應斯く折りなしたる
き、又元の如く開き置き

第一圖

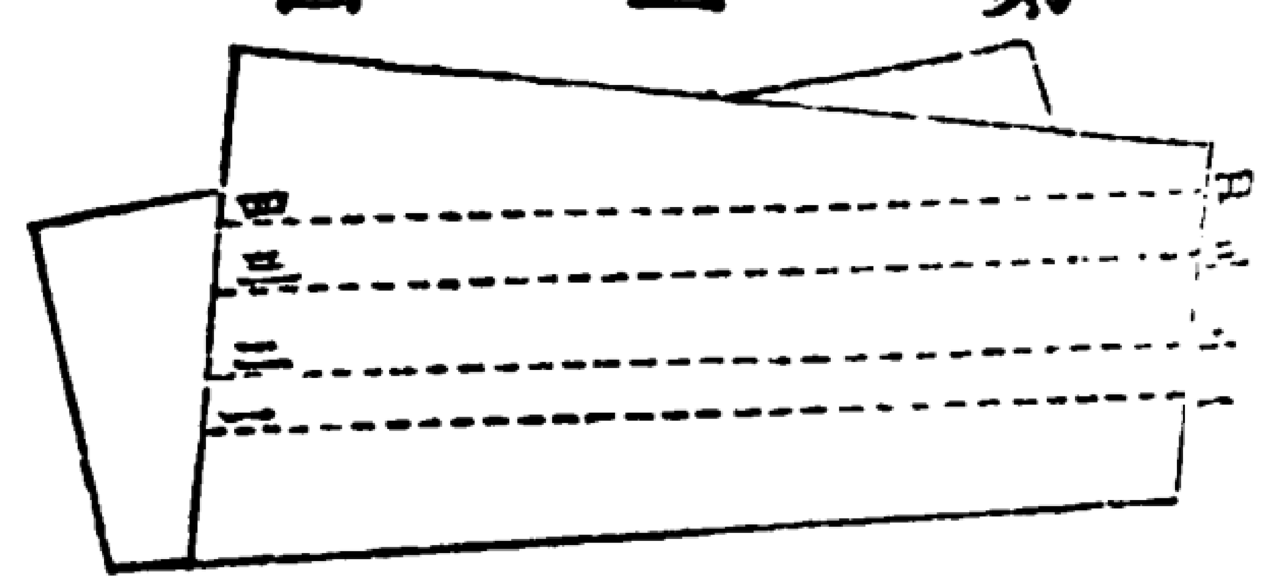


第二圖

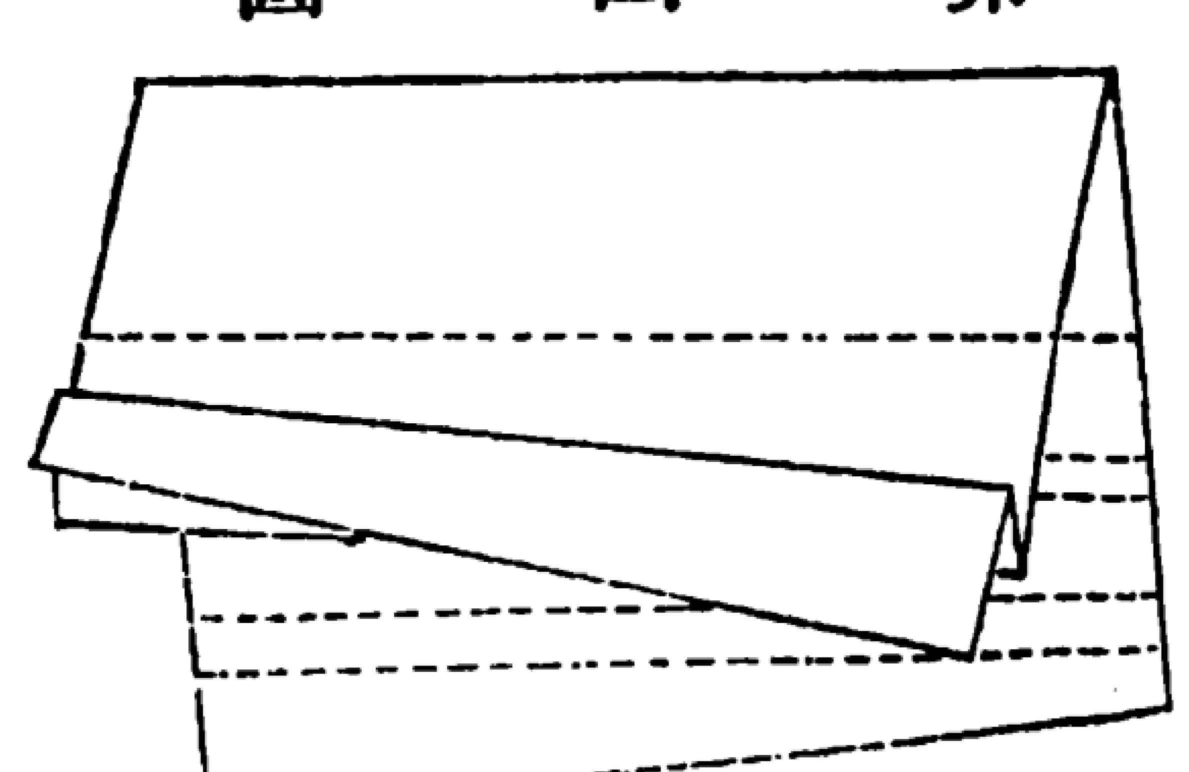


る點線の處を上に向けて折り置き、又線を開き置きたる下の方を、折目の通りに折りなす時は

第三圖



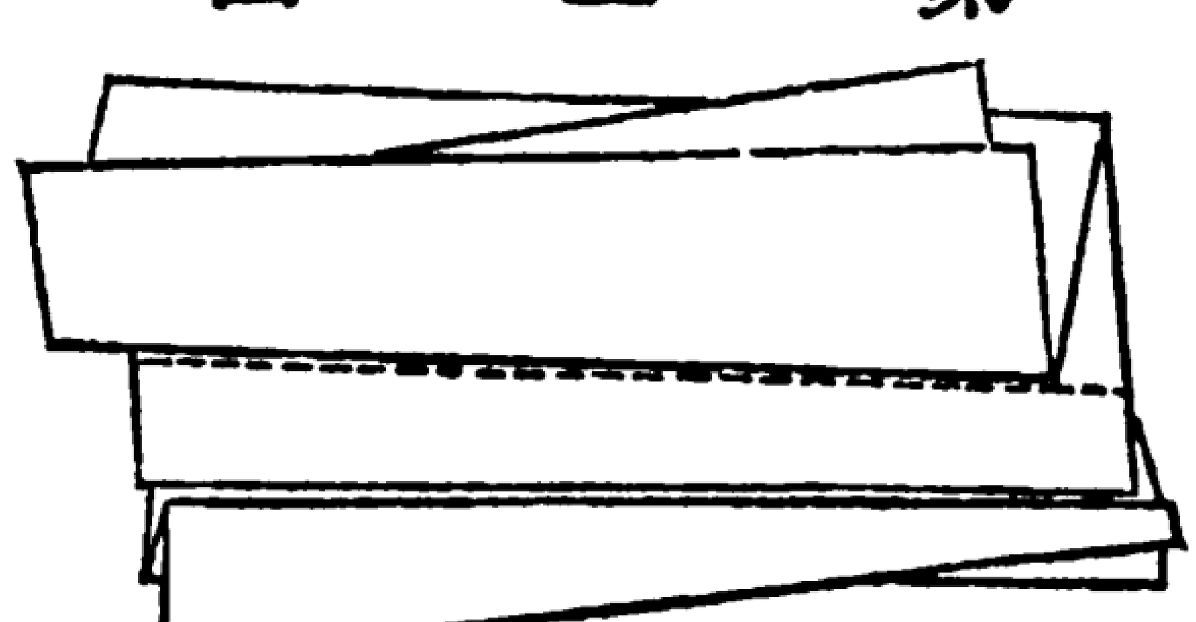
第四圖



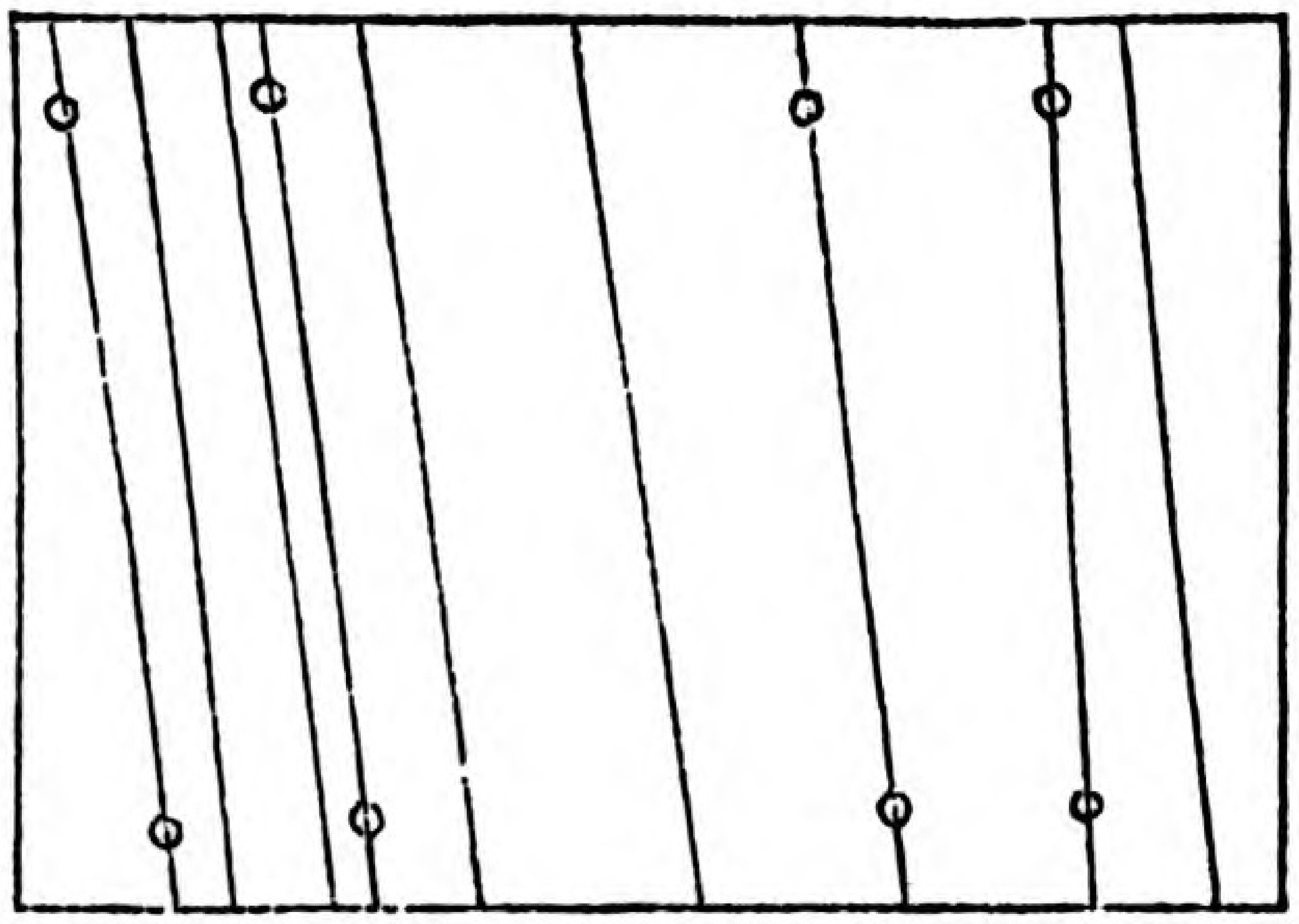
第五圖となる、而して此の第五圖の點線にて示せる處より、下部を上方に向けて折り上ぐれぞ、即ち鯨尺包なり。

さて斯く折りて、墨にて折目〳〵に線を引き、開きたるが形紙なり。(〇印を付けたる線は裏より折りたる線なり。)まことに折る時は、此の形紙に合せて其折り目通りに折れぞよし。

第五圖



形紙



茶の湯

茶禮初學

孤峰菴碌仙齋不羨

關　葦雄

亭主は此時勝手口にて相伴の名に違はず、午飯を

食すべし。(但し客に進めたる品々を食し
し。此時間二十分間を度とす。又衆客は
々飯を食し、酒も適宜に呑、佳境に入を
酔するを不許。去迚又偏屈ならざる様
との間寂寞ならざる様、互に禮義を持合
し。末座は此間に椀盛の空椀を取集め
て入よき處、多くは末座の向抔に並列し置
繼、銚子、德利の類も準之)則ち二十分
したらむ、亭主は吸物を脇取盆に載、客
べ、勝手口を明て待出、上客の前に進み
も御相伴仕候へ共、誠に不加減にて
り憎く可有御座抔と云ながら、吸物を上
べし。客方は、十分の御鹽梅、宜敷結構
したる旨を叮寧に申述べし。主人は是を聽
吸物を順々に末客迄取廻すべし、客は又
美酒にて大酩酊仕候と云様に、客は
折の程を賞賛し、亭主は自分を鄙下して

末座の邊に至り　明盃へ枚盃の空枚を並へ　持入
又出て、燒物鉢、銚子徳利の類も、明き物を持入べし。次に八寸(但し杉の木地折曲足の無き物也。是に其時々の品二種、或は三種取交盛付るもの也)を青竹の箸を添へ、銚子の潤酒を改め持、是も上客の前に進み、先一献繼、吸物椀の蓋を假借して八寸の品々を取分進むべし。二客以下同斷。末座に至り終らぞ、上客は亭主へ對し、御盃御持出の上一献頂戴可仕と曾敬して申すべし。其處で主は、だう仕りまして、御持合の御盃を戴き可申と答辭すべし。上客は、然らぞ御免を蒙可と申、末座に留盃盃臺を假て、盃の口付の露を能切、臺に載て、亭主へ、今日は段々難有、御料理と申、主人公の御駐意大に感佩仕、先一献召上り可被下と云て盃を進むべし。此酌は二客取方よし。八寸の取肴も、懷紙を出し、少し筋違に折、是に取肴を載せて參らすべし。又主は此盃を舉て上客

へ返盃すへし　二客以下も同様に取迴の儀式有へし、末座に至り右相濟候はゞ、上客の盃を亭主へ進、衆客に代り、是に御納盃可被降、隨て御湯を戴き度と所望すべし。次に亭主は此盃を請て一献飲、然らぞ任仰御納盃と仕御湯を參らせ可申と言ふて八寸の片端へ盃臺を載、左手に持、右手に銚子を持入べし。(但し此間客方にては吸物椀の及盃を末座取扱、辨宜の場所に片付置べし)次に主は、香物鉢を、脇取盆に載せ、箸を添、湯桶に湯を入、湯の兒も入べし。湯の兒匙を添、此二個を載持出、上客の前に往、香物に箸を載、向を直し進むべし。湯桶も湯の兒匙を中に入、取手を向へ直し、上客の前に進め、明盆には吸物椀を載て持下り、一時勝手口を切締べし。上客は香物を次禮して取廻すべし。引續湯も殘飯に掛て、湯の兒匙にて掬ひ取て飯椀に入るべし。又別に湯を汁椀へ少し繼置べし。次第々々に末座に廻りたら

ざるの二なり。
此二條を以て論難せんには、著者が數十年の盡力を以て琢磨せる寶玉の光輝を損するに
至らん。然りと雖、此二條に就て論難するの力を有する者、恐らくは今世上に非ざるべし
又此二條に就て彌々研究練磨せんと欲せる著者が意向を知る者も非ざるべし。論者は此
二條に就て論難するの力を、幸にして有する事を得たり。論者は此二條を論難するの力
を有すると共に、著者が彌々研究練磨せんと欲せる意向をも知る事を得たるなり。
斯の如く、類聚婚禮式は、氏が所論を滿足せしめたる著述に非ずと雖も、併も前條に掲
載せる如き引用書よりなれる著述なれど、禮節學生、又婚禮法式に與からん者は、參考
書として必ず座右に置くべき書籍なるを信ず。
類聚婚禮式の批評は是にて筆を止めん。猶本書に次で類聚丁年式、同産所式、同祝
あり。皆本書の組織に類似せる物なれど、或は本書に超越せる物もあらんか。

故實禮節の書

是、氏が禮節家として古今に其比類なきことを明證する記錄にして、又論者をして其明
下に伏從せしめたる意見を、四十年來鍛練せる禮節家の權威を以て筆錄せられたる所の
書籍なり。實に是、二千年來の禮節の淵源を探りて、寛かに現今流用すべき、又千歳の

格傳授を以てす、諸格傳授は、伊勢貞丈翁の編述する所にして、
第一 間居の格　第二 物持樣の格　第三 左右順逆の格　第四 足染の格　第五 進退の格　第六 下に置て渡す物の格　第七 下に置て手に

して、更に一道を開かれたる理由を筆錄せられたる所の好書籍なり。卷首に擧ぐるに、禮格傳授を以てす、禮格傳授は、伊勢貞丈翁の編述する所にして、

第一蹲居の格　第二物持樣の格　第三左右順逆の格　第四足膝の格　第五進み待ちの格　第六下に置て渡す物の格　第七下に置ず手に渡す物の格　第八兩人にて物を舁出る格　第九次第の格　第十衣類の格　第十一兵具の格　第十二馬具の格　第十三頭尾ある物の格　第十四長短の格　第十五包物の格　第十六卷物の格　第十七耳ある物の格　第十八前後ある物の格　第十九前後なき物の格　第廿たばねたる物の格　第廿一あみたる物の格　第廿二魚類の格　第廿三鳥類の格　第廿四折疊たる物の格　第廿五柄ある物の格　第廿六文字彫たる物の格　第廿七紛樣ある物の格　第廿八物を重ぬる物の格　第廿九紐ある物の格　第卅さちめある物の格　第卅一足ある物の格　第卅二色ある物の格　第卅三我物人の物の格　第卅四表裏ある物の格　第卅五箱物の格　第卅六袋物の格　第卅七荒卷の格　第卅八桶物の格　第卅九盥物の格　第四十躰川の傳

四十條に別ちて、寶曆十一年辛巳正月十一日、貞丈翁が清書せる所の秘藏書なり。この書を卷首に擧げられたるを以て、猶、世間無學無識の輩が專ら信用する所の小笠原氏流の比類に非ざる由を知り。又小笠原流の流名を包持して、現今實用的と自稱して敎授する無名禮節の遠く及ばざる事を知る。禮格傳授掲載の條々を陳述せんと欲すれど、未だ禮節を學ばざる者、又小笠原、及無名禮節家の解しがたき事實なれば今此處に言はず。次に男禮百三十九條を記されたり。其目次の內殊に故實禮節の主眼とも見るべき物を擧ぐぞれ左の如し。

○故實禮節　男禮目次　第一個匃禮　第二跪禮　第三立禮　第四肅拜　第五拔地之拜　第六稽首　第七跪拜　第八揖　第九致敬　第十勁座
第十一拜賀　第十二拜揖　第十三拜舞　第十四平伏　第十五答拜　第十六列拜　第十七磬折　第十八膝行　第十九膝退　第二十柏手　第廿
一路頭禮　第廿二禮法　第廿三雜禮　第廿四進退大要　第廿五起居大要　等なり。以下女禮之部畧す。

次に、包記、結記あり。以上列擧せる廿五條の解說と、包記、結記に就て聊か言はんと欲する處あれども、敎授上の掟に憚かる處あれば言はず。如何に故實禮節の主眼の存する所を、右の廿五條に定めたるかは、暫らく之を讀者の判斷に任さん。

又卷尾に附するに年中儀式を以てす。

年中儀式は、明治廿五年前三年間、禮治會の設けありし時、會員と共に撰定したる所の儀式書なり。

且此年中儀式を附せるに當りて、氏は云へり。

未だ全き無疵の書にあらざれども、いたづらにしみのすみかとなさんも遺憾なれば擧げたり。看官讀みて疵あらば無遠慮に添削してさし給へ、認直して再び公に訴んとほりするなり。

かくいはれたる言語は、氏がすべての著述に附て、我自說にのみ拘泥せず、弘く諸說を求め、其良說に付て考究して、以て門下生を訓導せられたる一證とすべきなり。

年中儀式緒言に曰く

禮禁亂之所由生猶防止水之所自來也故以舊防爲無所用而壞之者必有水敗以舊禮爲無所用而去之者必有亂患と禮にこれあり我朝古來特に亂義を惡んしたるば茲に以あるなり維新以降時勢一變舊禮既に去たれて新禮未た興らす我輩切に恐る亂患の此隙に乘せんことを
夫れ禮の本は敬に在り俎豆玉帛は以て敬を表はす所のものたり內に敬あり外に俎豆玉帛ありて而後禮儀始て全し今我大祭日及祝節は國家

漫然呼て旗日となすのみ

試に維新以前を回想せよ年始の諸儀式極て鄭重にして祝賀の情甚だ盛なりしは昔を俟たず上巳には桃花以て床の間を裝ひ蓬餅あり白酒あり如之少女雛祭の周旋進退は婉娩の容儀觀るべきものありしにあらずや又端午には菖蒲艾を以て軒端を飾り旗幟を翻し鎧兜を建て列れ兒童柏餅を手にして竹馬を馳るが如き勇武の氣象溢すへきものありしにあらずや其他七夕亥猪等一年中の行事は各其由來に應して一定し全國到る處都會となく邊鄙となく皆一樣の裝飾を施し一樣の酒食を設け一樣の歡樂を盡し國民一般同一儀式を行ひたりしなり

織女の祭るに足らざるは吾之を知る然れとも姉妹と倶に紙雛を弄ひたる歡樂は吾之を忘るゝこと能はざるなり亥子餅の喫ふに足らざるは吾之を知る然れとも一家擧て新爐を圍みたる歡樂は吾之を忘るゝこと能はざるなり其喫ふ所のもの貴きなり其祭る所のものの貴きにあらず之によりて得る所の歡樂貴きなり理論の外嬉戲の中自ら民德厚きに歸するものなり

然りと雖も五節は既に廢せられたり我黨徒らに之を愛むにあらずたゞ之に代るべき七大祭日二大祝節あるもその儀式なく國民依る所を知らず風俗の終に頽敗せむことを愛むなり

恭く惟ふに今の大祭日及祝節は其起因同しからずと雖も要するに我
天皇陛下の孝道を以て天下を治め給ふ　聖意に出たるものにして陰陽禍福を主とせる五節の類と日を同くして論すへきものにはあらざるなり

本會こゝに感する所あり遠くは古典を稽へ近くは時勢に徴し各大祭日及祝節に於て國民各家の儀式として施すべき裝飾の具設くべき酒食の料を撰定せり自らおもへらく俎豆玉帛略備れり以て敬を表はすへく又以て歡樂を盡すべしと乃ち之を大方同感の士に問ひ漸次全國に普及し之をして彼の年始に於ける屠蘇酒數の子上巳端午に於ける雛幟等の如き慣例とならしめんと欲す

此儀式果して一般の慣例となるに至らば其裝飾に對ひ其酒食に就くの間知らず識らず朝廷の　則に順ひ風化の萬一に補ひある豈たゞ五節節物の比ならんや嗚呼舊防は既に壞れたり新防を築て以て水患を斷つは誰が務めぞや十七條憲法曰百姓有禮國家自治と　これ本會の深く將來に期望する所なり

例言

例言に曰く、

一此書を年中儀式と名づく而して新年の儀式を載せざるものは新年には古來一般の慣例ありて今も大かた實行せらるゝを以てなり又元始祭は其時日猶新年の儀式を行へる際にありて此御祭事に對する儀式も自然に行はるゝによりて共に之を略せり

一此圖書式の三方は足打其他の臺に代るも可なり瓶子一對を一臺に非はするも可なり其口包又花包の包方等も適宜に對酌して可なり且の都べての料紙は其質を撰はず唯潔白なるものを要す

一此儀式大祭日の内食物を定めざるものは之を定むるの要なきによる猶彼の七夕重陽に一定の物なきがごとし但重陽に菊酒を用ゐるものありしが如く各自隨意に之を設け又此に一定せし食物に更に他の品を加ふる（例へば紀元節の若菜新甞祭の筍の㴑に魚介等を加ふる類）は固より妨げなし

一此儀式の床飾及饗膳は各祭祀の由來に適當なるものにして殊に都鄙ともに得易き物を撰へり其掛物の書畫の如きは上巳端午雛幟と同く其時節毎に大小精粗人々の望に應じ製造販賣する者あるに至らん事を期す但各祭祀の由來はこの頃歳時行事朝野年中行事及祝日諸本等の書類りに印行せられて之を詳悉せるにより彼れに讓りて此に省けり

一此書は會員有住齊氏之を創草し他の諸員毎月一回之を討論し毎祭祝日に於て之を實行する所にして實に明治廿四年紀元節より起案し共五年

孝明天皇祭に至て終結せしものなり

又其目次をあぐれど、

明治會議決年中儀式

○新年式○孝明天皇祭（一月三十日）○紀元節（二月十一日）○春秋皇靈祭○神武天皇祭（四月三日）○神甞祭（十月十七日）○天長節（十一月三日）○新甞祭（十一月廿三日）

又卷末に曰く、

右年中儀式脱稿せしによりて以後は人事生涯の慶賀に關する出產（着帶）喰初、髮置、誕生祝、袴着、元服、袖留、鐵そき、深そき、納、婚禮、さしみの祝、年賀、尙歯會等の古式を蒐集ゐたる起草に對し會員一同毎月之を討議し時勢に適する作法を稱綴し漸次又發兌する目途なり云々

實に故實禮節書のあるありて、本邦神代以來古式の禮節淵源を知る事を得。又自今何

嬬袋産所式、嬬袋下帯式、嬬袋服之書もまた故實禮節書の参考として共に備ふべき
り。

處の代々に要用せらるべき禮節の書をたつる事を得たるなり。類聚産所式、類聚丁年式、類聚祝之書もまた故實禮節書の參考として共に傳ふべき物なり。如此禮節上に盡力せられたる餘力を以て、猶編述せられたる源氏物語考證圖繪も、又其比類を有せざる所の好著述なること、論者が常に敬服してやまざる處なり。

女德のをしへ(十七)

三輪田眞佐子

第八私欲　をさ〳〵人として欲なきものはあらじ。寧ろ欲あればこそ、人は日月と共に進歩し、世は文明になん進代するなれ。思ひね、人の生命を保全せんとするも欲なり。財産を所有せんとするも欲なるは、何人も知ることながら、更に進みて子孫を養育し、家名を揚げんとするも、欲なくは能はざるべし。他人と交際して滿足を施さんとするも、欲なくば能はざるべし。猶深く考ふれば、一切の道德も、欲なからんか、實行すること難かるべし。蓋し人をして、絕えて欲心なきものと假定せしめんか、その反動や、所謂自暴自棄に流れんは、さながら死人と同樣たるべし。彼の浮世の汚塵を遁れんとて、世に隱るゝものすら、つら〳〵その心底を探ぐらば、多少の欲心なきにあらず。すなはち隱

遁して幽邃なる生涯を送らんとするは、既に欲の一種ぞかし。されど、人に露ばかりも欲なきを望むは、死せよと願ふに異ならず。

されど、如何なる欲も、人には必要なるか、否なり。今、人欲を分類せど、おのづから二種となるべし。一は徳を行ひ、世を益せんとする欲心なり。これを公欲と言ふ。一は害を施し、人を苦しむべき欲心なり。これを私欲と言ふ。されど、公欲は、つとめて奨勵し、私欲は必ず撲滅せざるべからず。然るに、世人往々この區別をなさずして、欲とだに言はゞ、悉く道徳に害ありと思ふは甚しき誤なり。むかし、梁の惠王、孟子に國を治むる道を糾しければ、孟子答へけらく、王何ぞ必ずしも利を言はん、唯仁義あるのみと。蓋しその利とは私欲を指し、仁義とは公欲と稱するものならんか。

凡そ私欲を退く所以のものは、唯我が一身の利害を慮り、他人の徳失を顧ざるを惡めなこそ。公欲とて、強ち慈善事業の如き社會一般に對するものには限らず、一家族に於てすら、妻が夫と偕老の契を結び、歡を共にし憂を分たんとするは公欲なり。亦主婦が舅姑の安否を問はず、子孫の養育さへ思はずして、獨り美服を纒ひ、珍味を貪る如きは私欲に屬するものなり。故に、苟も私欲を去らざらんか、一家の平和團欒は得んとするも望むべからず。たとへど、前妻の子と後妻の兒と並び立つ家庭には、必ず風波の起り易

さは、専ら主婦に私欲あるため、公平を存たざるに由ることあるが如し。わきて女子は、境遇上見聞狹きを以て、おのづから公共心乏しきが如し。そは女子が關係する學校、若しくは協會などに於て、大方の女子は、自己の便宜を標準にして事項を議り、公衆の利害を參酌せざるは、掩ふべからざる定證とかや。されど、史を繙かば、女子にも私欲なき尊きものあり。そは誰か、大婆公の如きはその一人ならんかし。そもそも大婆公は、今川義元の臣なる河村善左衛門に嫁しけるが、寡婦となりしより徳川家康に召されて、二代將軍秀忠公の乳母となりけり。その子嘗て、山中源左衛門に黨せし故を以て、流罪の刑を受けたりしが、大婆公は忠誠を以て秀忠公を鞠育し奉ること、既に幾星霜を經にけり。秀忠公そを殊勝に感じ、さて大婆公病に罹り死に垂んとするとき、秀忠公その子の罪を免して以て子を思ふ親の心を地下に安せしめ、そが多年の勤勞に報はむやと、ひそかにその意を諭しけれむれもひきや、大婆公は襟を正して曰ひけるやう、法は天下の公道なり、などか私情を以てこれを破るべき、一朝私を以て公を破らば、天下これより法を信せざるべし、希くは、君、よく法を守り、政をつとめんこそ、老婆本意なれと、述べけり。あはれ丈夫も及ぶべからざるその言を聞て、秀忠公も涙にむせびむかりなりしとぞ。實に、後世、女子の私欲を懷かざるための模範にこそ。

本文は女子高等師範學校より寄贈せられたるにて、今更の說ならねども、能く正道を說きてたれば、特に之を本欄に收む。

兄弟姉妹に對する心得

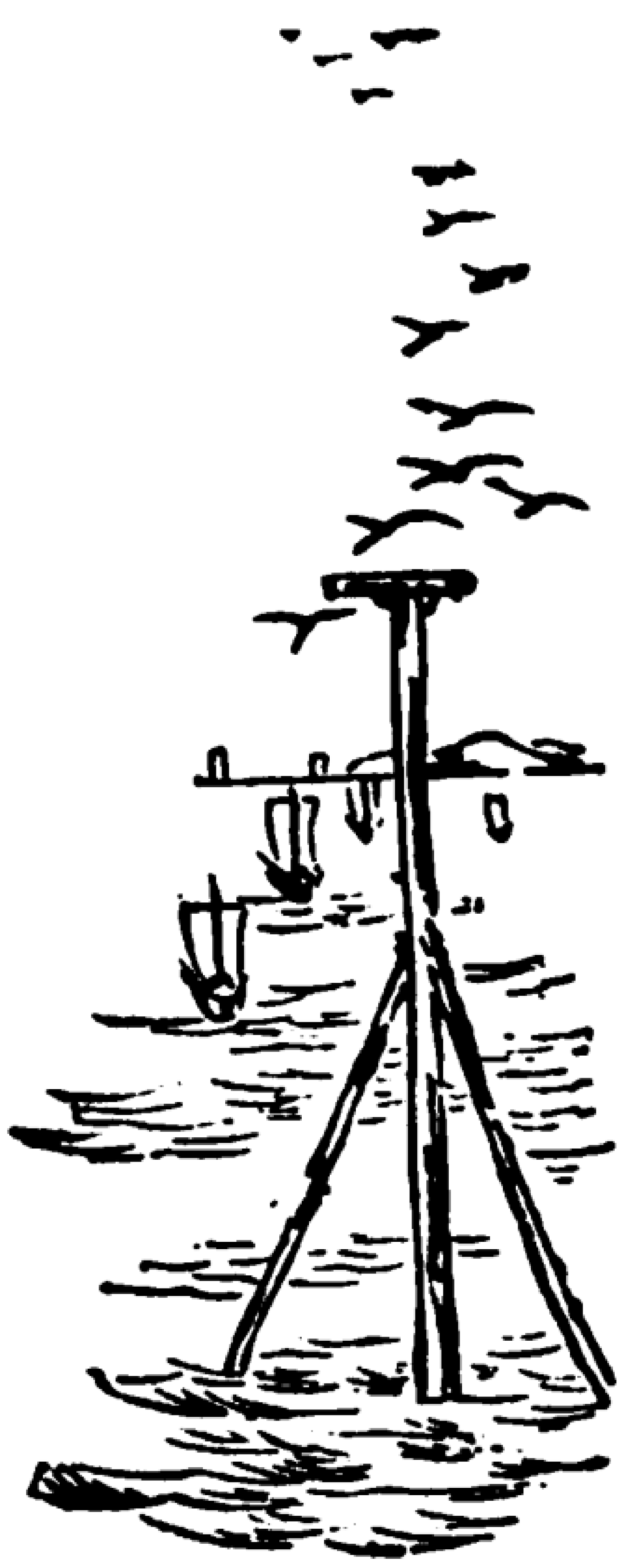
隈部よしを子

兄弟姉妹はおなじ父母より出で、おなじ家にて人となりたるものにて、血族の親之より切なるはなし。之を樹木にたとへば、幹は父母の如く、連枝は兄弟姉妹の如くにて、互に放つべからざる關係を保てり、兄姉、父母の傍にあれば、弟妹その膝にあり。弟妹、父母の背にあれば、兄姉はその手に携へられて、共に遊び、共に食ひ、共に起きて共に寢ね、同じ慈愛に浴して人となるものなれば、その親しみの深きこと、父母を措きては他にその比なし。此の親愛なる中にもまた、兄姉は弟妹よりも先に生れて、時としては父母に代りて弟妹を見扱ふものなれば、弟妹は兄姉を敬し、兄姉はまた弟妹をあはれびいつくしびて導かざるべからず。かくて、艱難あらば相扶け、幸福あらば相分ち、心を一にして力を合せて家運の增長をはかる、これ自然の道理にして、これをこれ悌友を盡すといふ。兄姉に悌に弟妹に友なるは、これ人倫の大綱の一にして、人のまさに從ひ守らざるべからざるものなり、されば、畏くも、兄弟に友にの聖勅をもかたじけなうせり。誰人も幼き頃は、兄弟姉妹相親しまざるはなけれども、成長して他の關係いできぬれば、或

はその親みの心うすらぎ、甚しきに至りては利欲に心を奪れて、相爭ひ相軋るもあるは、これ人にして人に非ず、あさましき限になん。

毛利元就朝臣その子等を召し、矢をたとへにしていましめていはく、此の一筋の矢と一束の矢と、これを折るにその難易いかにと皆一筋の方易きをいふ。朝臣儼然として曰く、まことにさなり。單獨の力にはこれに抗すること易くして、合成の力には難し、爾等之を忘るゝこと勿れ。凡そ兄弟の不和は皆慾より起る、慾を捨てゝ義に從はゞ、何の不和かこれあらんと。此の敎訓まことに當れりといふべし。兄弟姉妹、こゝろを合せちからをともにして一家の幸福をはかる、これ即ち孝道なり。利欲に心まどひて、互に爭ひきしるは、不孝の限にて、道德の罪人なり、嗚呼悌友の道、一日も忘れて可ならんや。







千代能姫

鹽井ふく子

げに千代はものかは萬代までも世に語りつがまほしき姫小松、千代能と聞ゆるは、結城左七郎が女なり。又或る説には陸奥の大守三浦泰盛の女とあり、又一説には金澤越後守顯時の女なりとなり。何れをそれと定めがたけれど、おのれは本朝女鑑の説に據り、しばらく結城が女として語りつがむ。さて左七郎は、鎌倉の武士にて、劒太刀はく矢の猛き道はもとより、文の道にも淺からず、鎌倉殿の用ゐも能く、所領あまた賜はりて、威勢のほどもめでたく世にときめきぬ。その父のみのみ寶として耻かしからぬ千代能姫は、げに能あり、才あり、よくたらちねの庭のをしへを守りて、學問の道をも、たちぬひ、茶の湯、糸竹の業、又武藝をもあさからず志し、心ざせやさしう、志正しく、容顔また世になくうるはしかりければ、よの人々妻にせむと、媒もて云ひ入るゝ方の多かりけるを、兎かく過すほどに、陸奥の國の住人會津の太郎信親なるもの、鎌倉に敵し、大勢を催ほして、會津の城に楯籠ると聞ゑしに、鎌倉にてもおどろき、左七郎を大將にして急ぎ勢をむ向けさせられぬ。結城乃ち馬を馳せて向ひせむること一月餘なりけるが、みちのくのあだちのまゆみ、なか／＼につよく、ためむとしてためられず、遂にうち負けて、敵の手に生擒れ、牢に入れられ、やがては切られしと聞ゑぬるに、勝敗心もとなくいもねず思ひに伏したる姫は、聞より泣き悲しむことかぎりなく、あはれ口惜しや、我れ男子たらむには敵陣に飛び入りあだのやつばら如何にこはくともためもまくりもして、恨をはらし、父もろともに死なんものを、女と生

れしおさましさよと、つく〳〵と身をかこちつけるか

にとへ女たりともいかでか父が殺され、恥しめらるゝを他處に聞くべき。いでよき謀こそあれ、僞りはかりし、敵を恥かしめ呉れむ、叶はねど、我が命、もとより父にうけたる玉の緒、絕つも父ゆゑ、父がためには火水もさけずとはやり立つ心をしづめ〳〵て、乳母を近づけ、のう乳母、父上牢にゐはし、やがては敵の手にかゝり給はむとすと聞きぬ、女ながらも武士の子、他處に過さんも恥かし、さらで、妾遊女にさまを替へ、牢の奉行をたむかり、如何にもして父を伴なひかへらむとこそ思ふなれ、此の事母上に聞ゑなむ我が身をあやぶみたまひて、放ち給ふまじければ、御身にのみ語るなり。のう乳母、火に入るも水に入るも妾故には日來いとはぬそちと知りて、賴むはたゞ共に我を助けて、父を救て出せよと矢竹心くじくべくもあらぬに、乳母もさらでと共にてま〳〵云ひ合せ、母にはふかくつゝみて、乳母と二人、館を出で、むつの國に至りぬ。

さて如何にして……ず宿のあるじは美くしき女のやどりけるをよろこび、これならぬにはこりて、そちこちの人に語りぬるに、人も之を聞き、之を見傳へ〳〵て、はては牢の奉行淺香兵庫の耳に入り、あさましくも、そのやすみ子、見まくほしうし、已が身のわたとも知らず、やがて宿の主人を呼び寄せて、密にその女を呼び入れむことを賴みけるに、宿の主人は一も二もなく心得、急ぎかへりて千代能に事のよしを語り志むらく御越しも候らへかしと言葉を添へてしひけるに、姫はかねて巧みしまた天の助とれもふ心の色をつゝしみ、さあらぬさまことと答へけるは、誠に不束の身、貴き人のあたりに出んも恥かし、如何はせんとあるを、乳母傍よりかひぞひのさまして、折角の主人の仰せなれども言葉をそふるに宿主はひとり急ぎて、言葉をつくして強ひ伴ひつゝ、其夜は酒宴に更しぬ、千代能はおやまちなきやう、牢のあたりを見れきつゝ、且つさとられじと心をこめて

人々をもてなしつゝ、奉行に取り分けて酒をすゝめ強ひけるに奉行をはじめ人々醉ひふし、音もせざるに、姫は密に起きてあたりを伺ひつゝ惡次と云ふ牢奉行があたりに立ちよりて、あな醉ひ給ひてか、湯をまゐらせんかなど、たはぶれよれば、前後も知らぬに、喜びつゝ、わが帶につけたる鍵をそつと取り、牢のとぼそに立ちより、二重、三重固くかけたりし錠をそのまゝひき放し、父がわたりへつとより、高手に結びし繩を引き切り、父上千代にて候とばかり暫時がほどに疲れし手を取り、乳母と共に引き出で、やう〳〵忍び出でゝ七郎が郎黨土田兵衞と云ふものゝ並びの里にすみけるを尋ねて、しばらく影をかくしつゝ、夜半に紛れて忍び〳〵に古里にかへりぬ。遂に父を助けて、恥をきよめたり。となり。あはれ矢竹心の一すぢばかり強きものはあらじな。

後越後の守金澤某に嫁し、夫を失ひ遂にかざりをおろして尼となり、偏に法の道に歸依せ　。

又一説には足利讃岐の守貞氏の後妻となり、弘安八十一月平の貞時、長崎賴綱の讒言により三浦泰盛、子宗景その族類みな難にかゝりぬるに、父外家の睦りしに、北條のゆかりを以て、咎は得ざりしかど快々として月日を送りけるが、遂に果敢なき露と消失せしに、千代能、今はうき世を秋風のつく〴〵とにしみて、遂に世をすて、家を出で美濃の國に至り松見寺の老尼につき尼となり、名を如大禪師無著尼呼び、諸尼の爲めに賤婢となり、薪をとり、水を汲勞をかへりみず、暇あるときは禪床に坐して、世をとりけるが、そののち八月十五日、月あきらかにし雲なきに、如大、谷に下り水を汲みけるに、桶の底けて水みなつきければ、忽然として大に悟り、和歌詠じて曰く、

とにかくにたくみし桶の底ぬけて
水たまらねば月もやどらず

世の人此の歌を傳へて口號となせりとぞ、後上杉氏

一諸堂田……都の非……
寺と名づけて如大を請じ第一代となせりとぞ。時の人又百年和尚と呼びなせしとか、佛の道はとにもかくにもせよ、とにかくやさしき孝女なりけり。

安良賣

山本正周

難波部の安良賣といへるは、筑前の人、宗形秋足の妻なり。年十六にて、秋足に嫁し、舅姑に事へて孝に、夫に事へては貞なりき。父母死して後は、其の墓に至りし、哀を盡し、夫死して後、年なほ、若かりけれど、之を聘せんとするもの多かりしかど、安良賣は、貞女二夫に見えずとの古訓を守りて、堅く動かざりきといふ。されど、郡官より、此の事を上に白しゝに、詔して、租を免じたまへり。

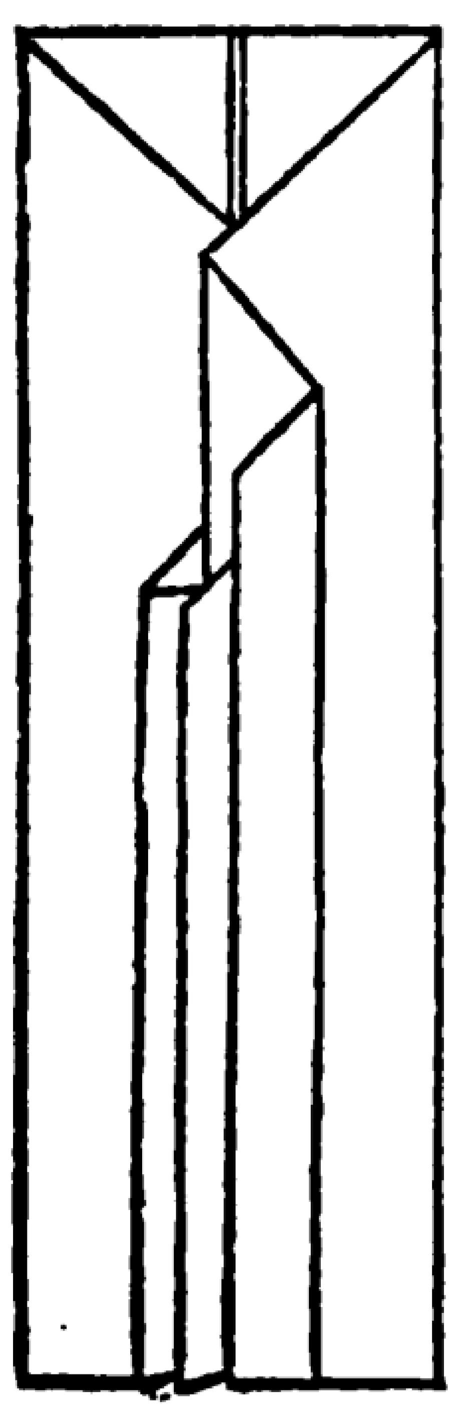


包の記

有住齊教授
門人 なみ子 鎌子 筆記

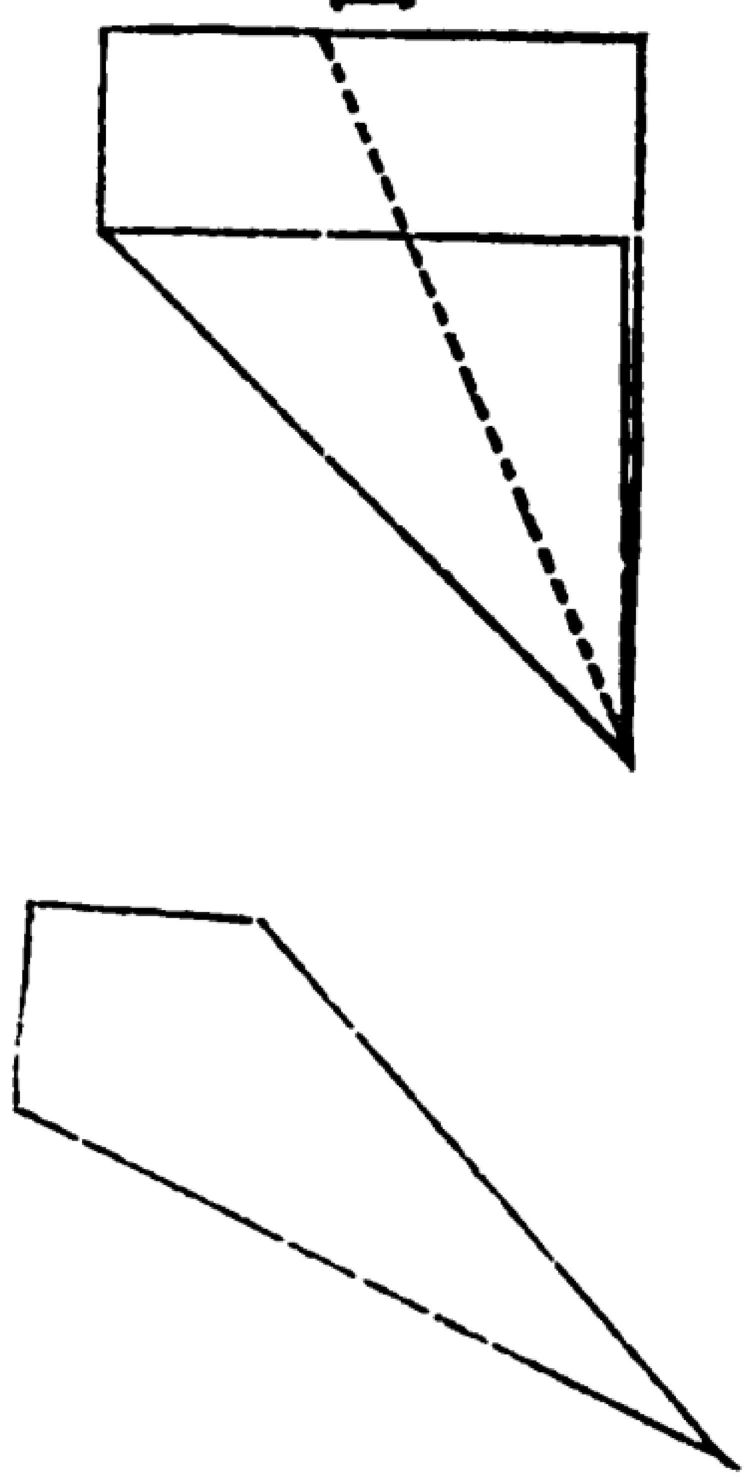
桃の弓葦の矢包

これは節分の夜の祝に用うる包方なり。進物に斯く包みて用うるなり。



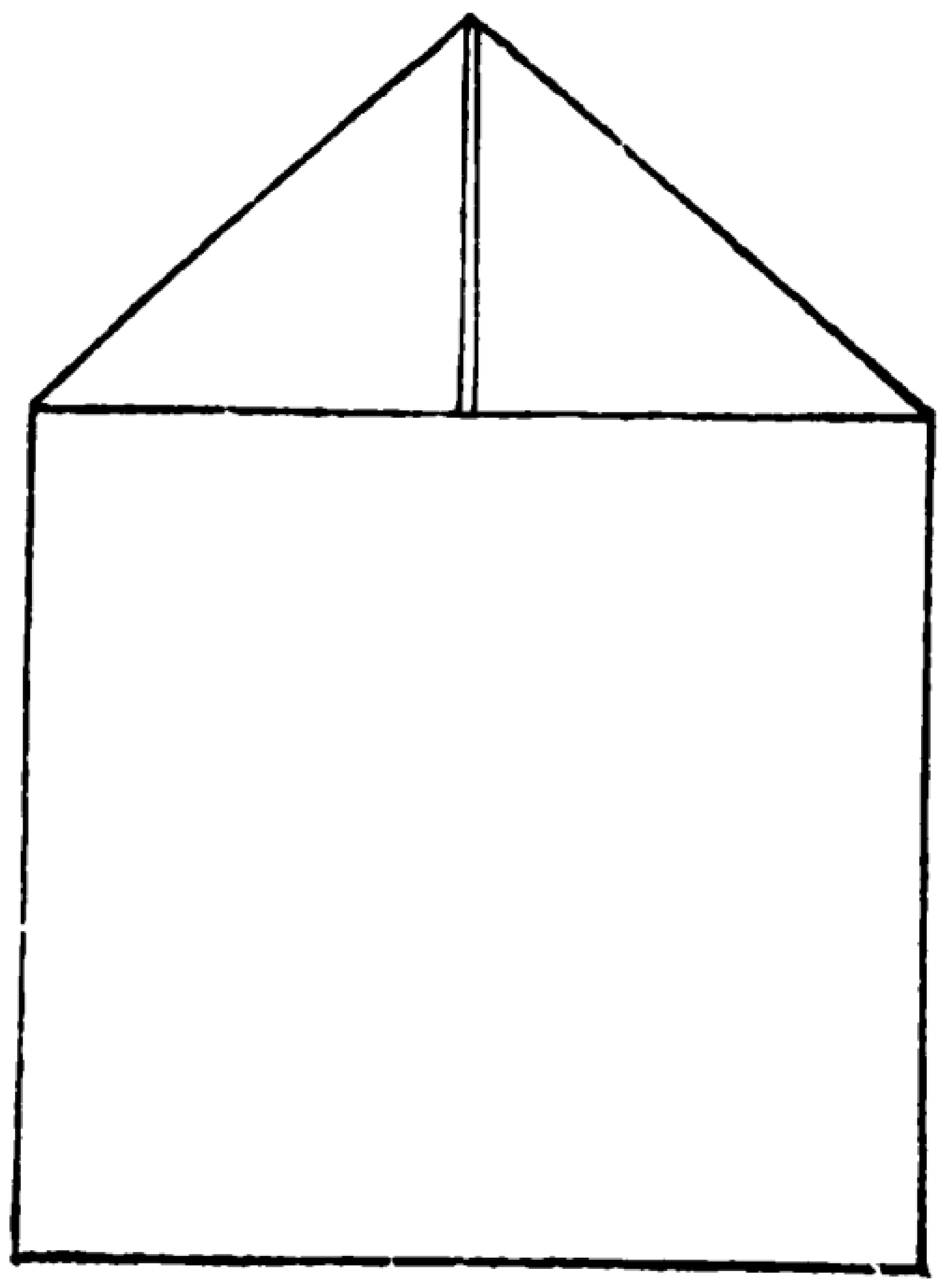
包方は、裏曲の法にて紙取をなし、先づ形紙を造る。

裏曲の圖



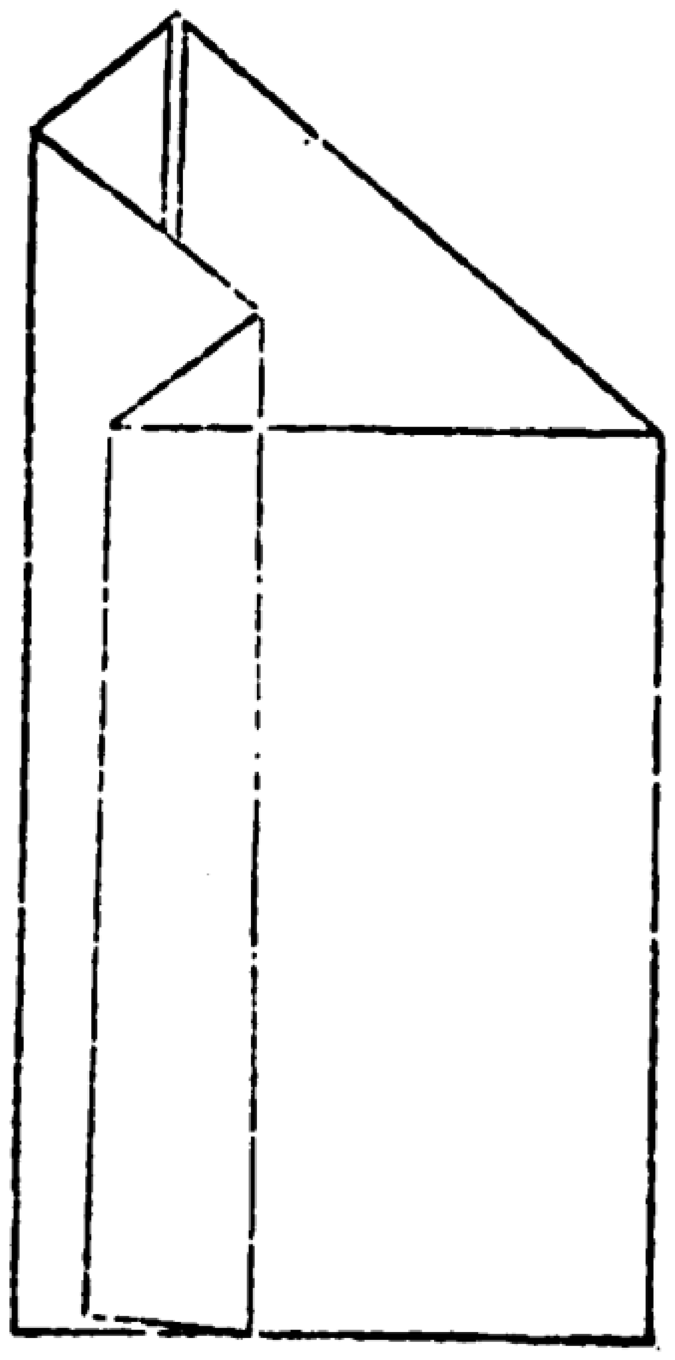
第一圖の如く、上方兩角を眞中の方へ折りてみて、

第一圖



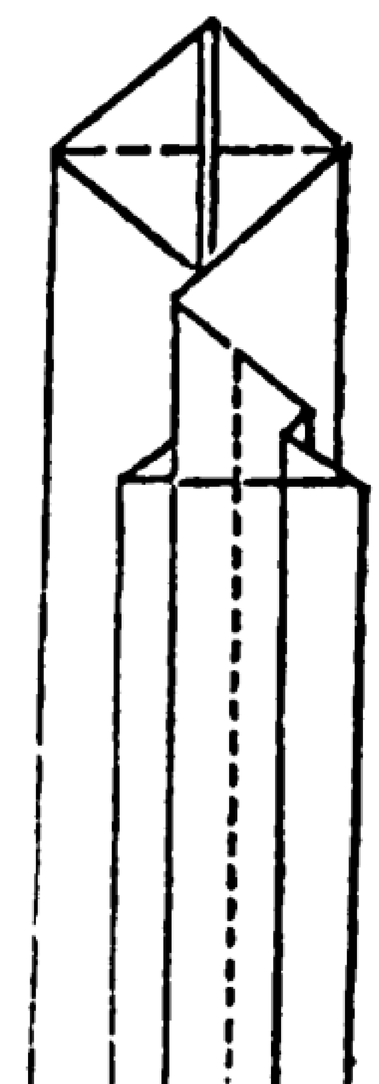
次に左の方を右へ一つ折り、又左へ一つ折り反す。（第二圖參照）

第二圖



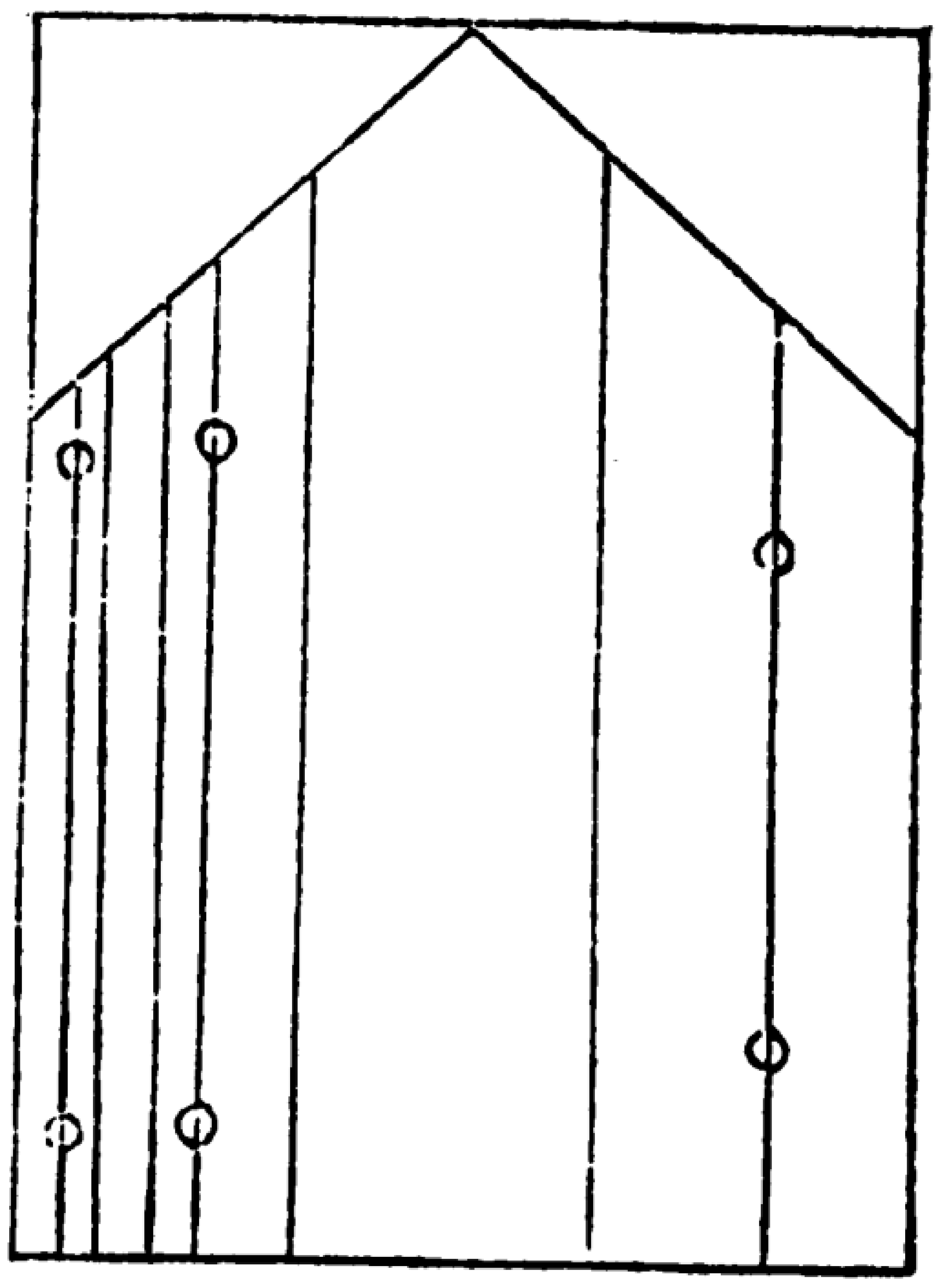
次に右の方を左へ一つ折り、又右の方へ一つ折返し、又左へ一ッ折り、之を開き伸して、又其次を左へ一ッ折り、又右へ一ッ折る。（第三圖參照）

第三圖



斯くして第三圖の縦の點線（即ち始め左へ折りて又開き伸したる處）の處をも左へ線の通りに折りなして、さて墨にて、折目〳〵に線を引くべし。斯くして開きたるが即ち形紙の圖なり（〇印を付けたる線は裏より折りたるなり）

形紙



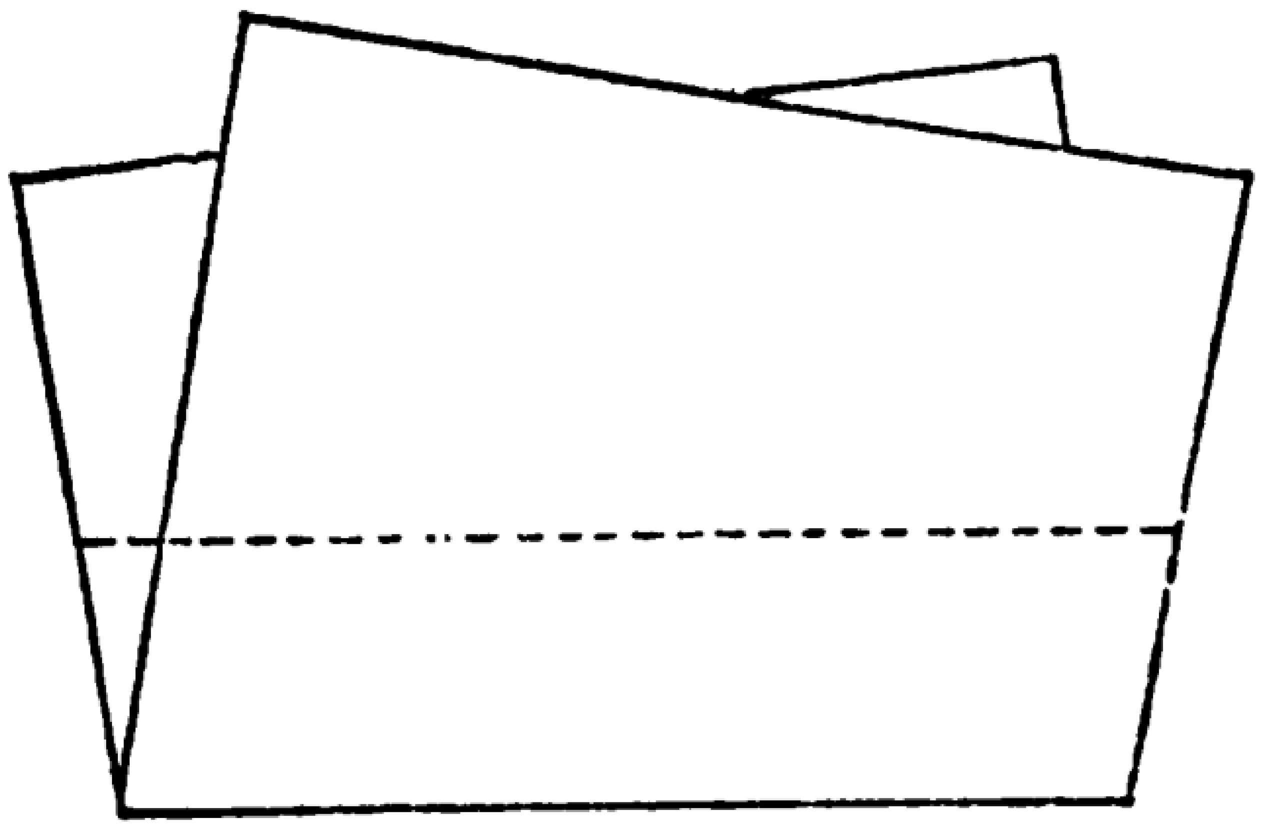
さて、形紙に合せての折りかたは、形紙を造りたる時の如く折ればよし。斯く折りて後、第三圖に示せる上下の横の點線の處を見計ひ、共に裏へ折り反せば、之にて折り上りとなる、



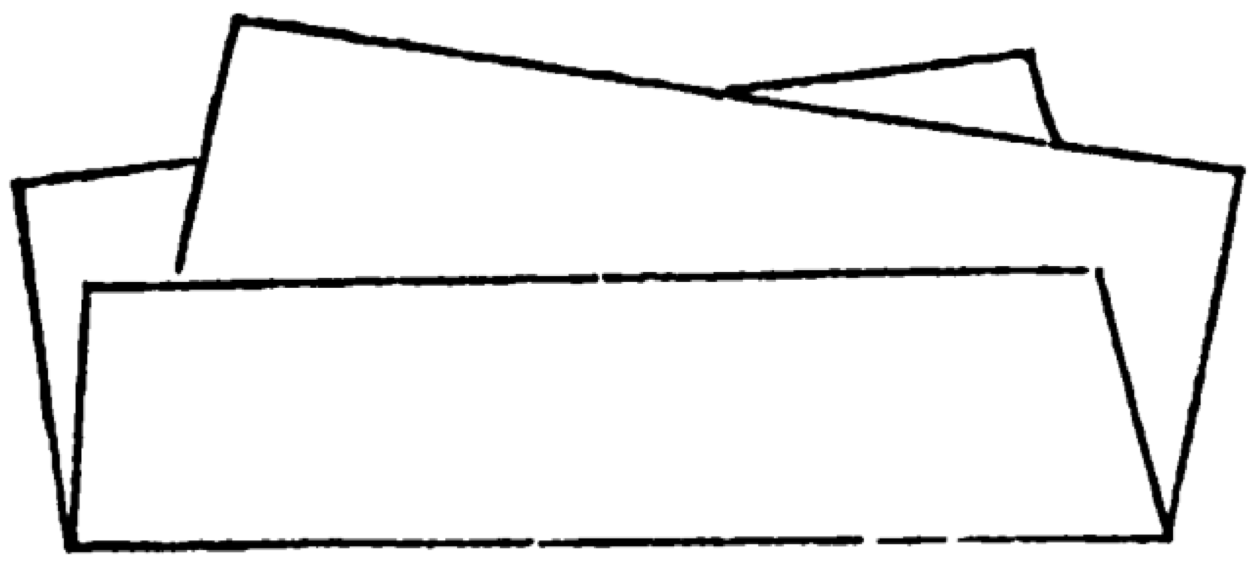
はぬさきに、小袖類の寸尺をかきて贈るに、鯨尺つけて贈る事あり。其時の包方なり。包まずして箱に組み入るゝこともあるなり。

紙取、前に仝じ。第一圖の如く折りたるを、點線の處を手前の方より向へ一ッ折りて、第二圖の如くなし、之を裏反して第三圖の如くし。其點線にて示せる線に付きて折り試むべし。但(一)と(四)との線は凹みたる線にて、(二)と(三)とは凸みたる線とす。一應斯く折りなしたるを、又元の如く開き置き

第一圖

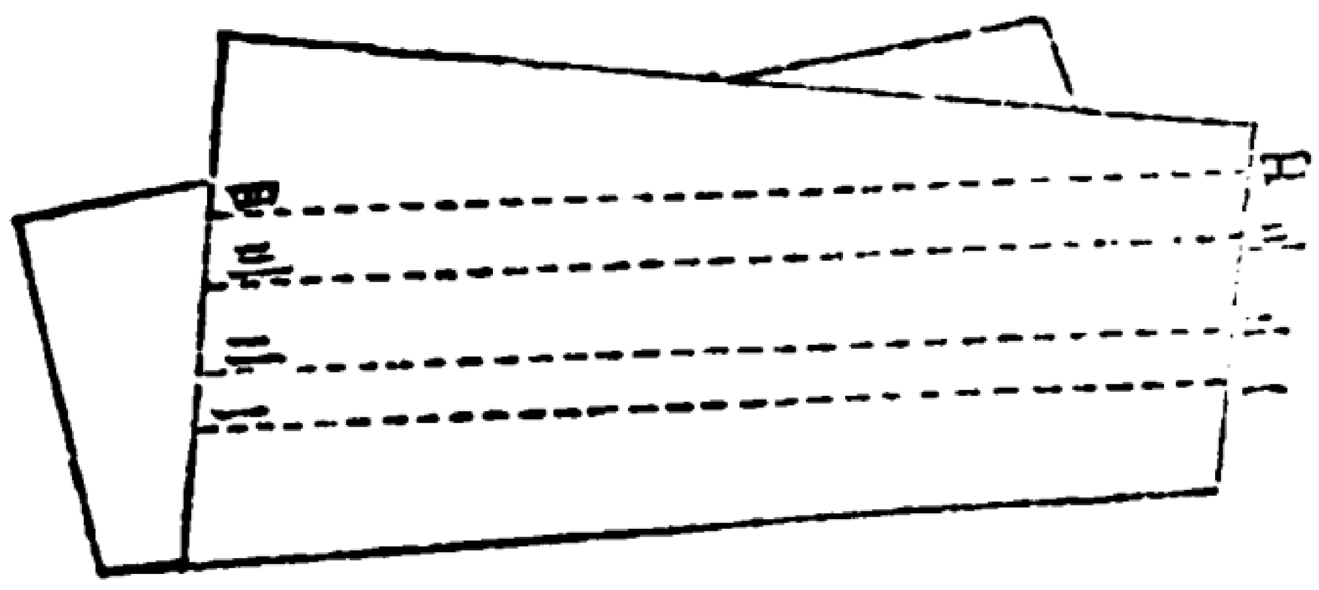


第二圖

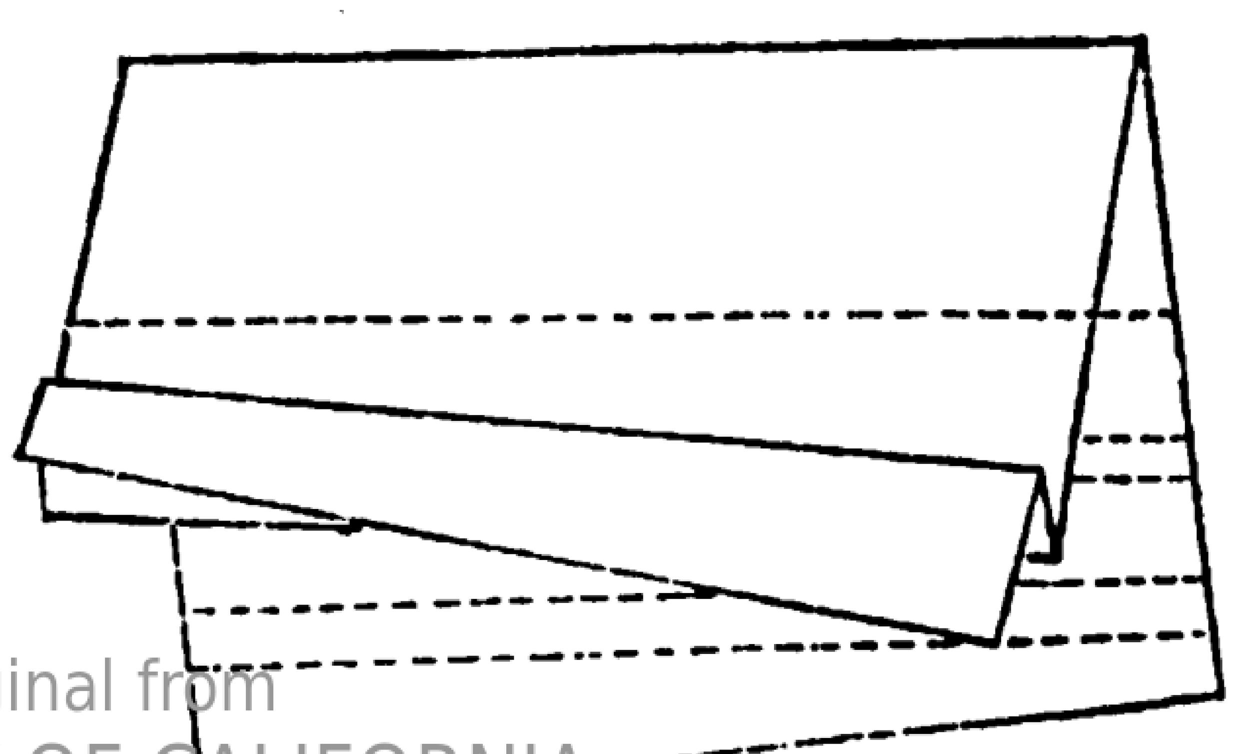


る點線の處を上に向けて折り置き、又線を開き置きたる下の方を、折目の通りに折りなす時は第五圖となる、而して此の第五圖の點線にて示せる處より、下部を上方に向けて折り上ぐれど、即ち鯨尺包なり。さて斯く折りて、墨にて折目〱に線を引き、開きたるが形紙なり。(〇印を付け
る線は裏より折
りたる線なり。
まことに折る時
は、此の形紙に
合せて其折り目
通りに折れぞよし。

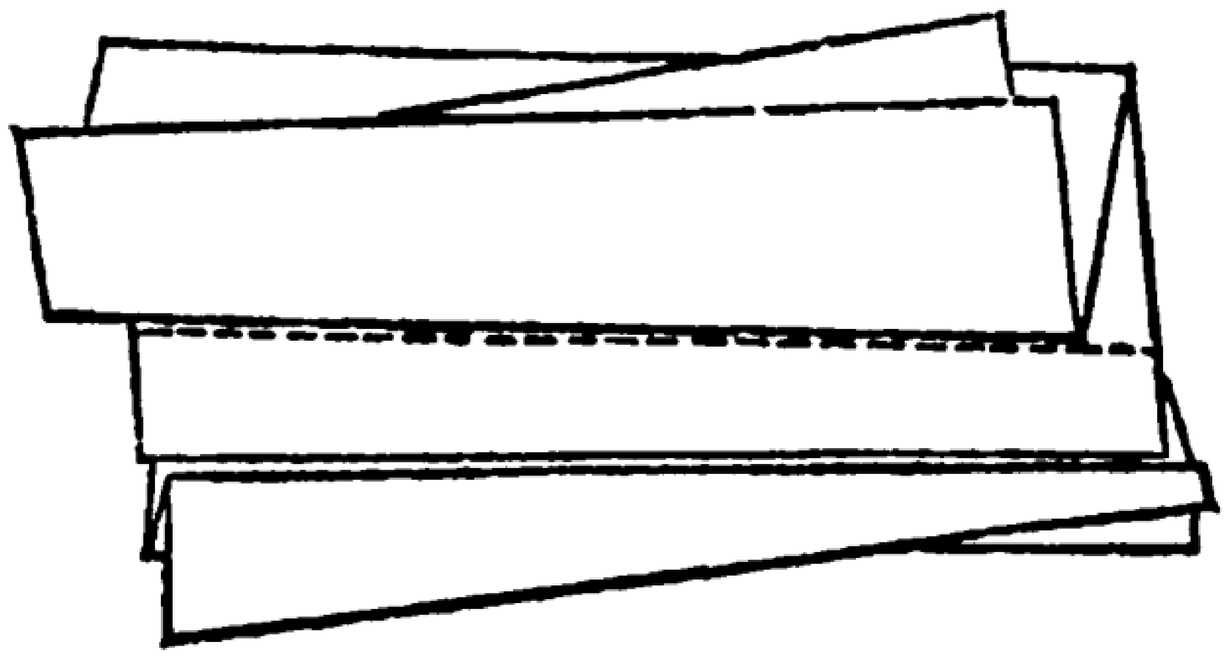
第三圖



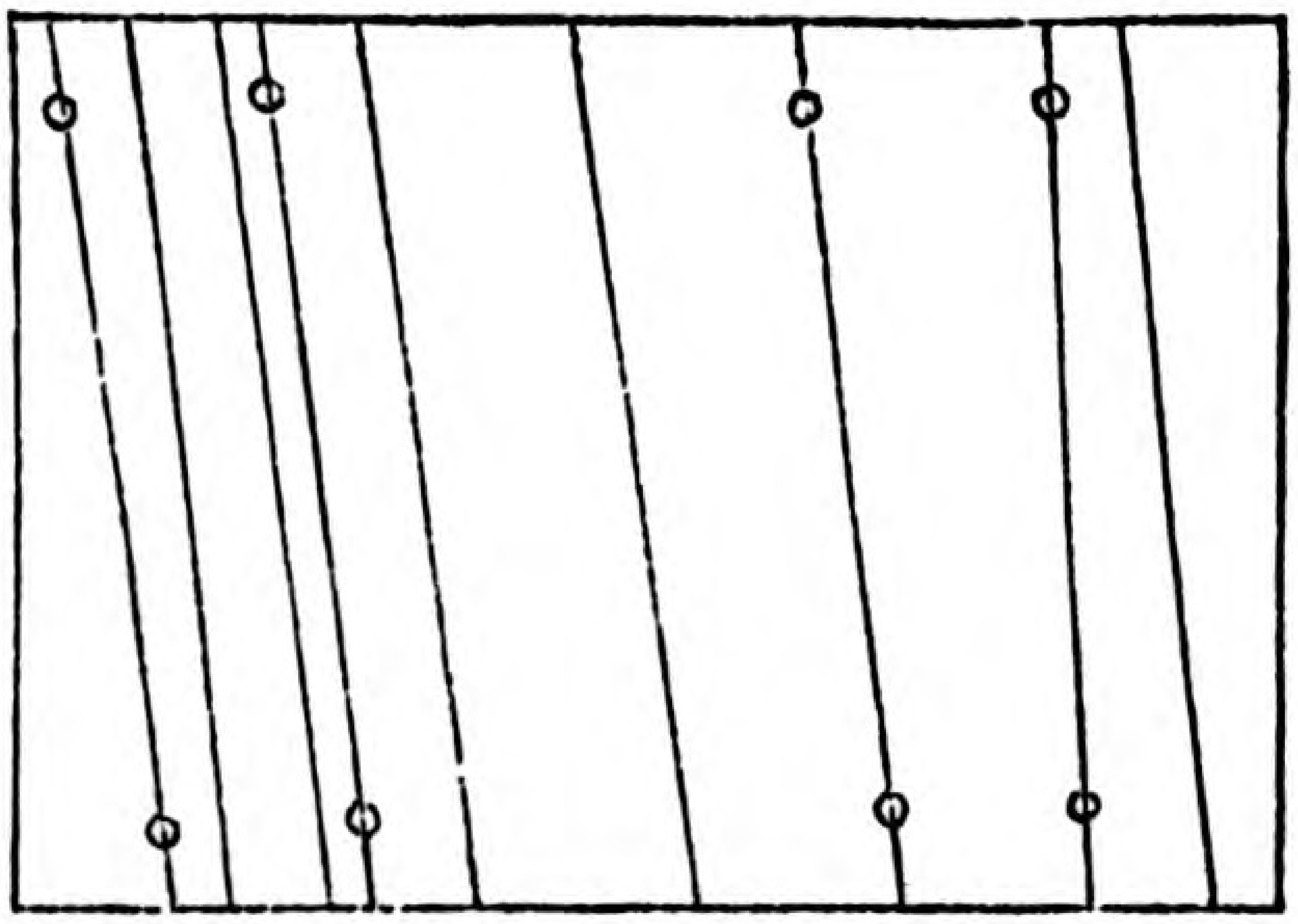
第四圖



第五圖



形紙



茶の湯

茶禮初學

孤峰菴傣仙齋不美
關葦雄

亭主は此時勝手口にて相伴の名に違はず、午飯を食すべし。（但し客に進めたる品々を食し試むべし。此時間二十分間を度とす。又衆客は此間に寛々飯を食し、酒も適宜に呑、佳境に入を許し、熟酔するを不許。去迚又偏屈ならざる様、客と亭主との間寂寞ならざる様、互に禮義を持合様にすべし。末座は此間に椀盛の空椀を取集め、亭主の取て入よき處、多くは末座の向杯に並列し置べし。飯継、銚子、徳利の類も準之）則ち二十分時を經過したらむ、亭主は吸物を脇取盆に載、客の數程並べ、勝手口を明て待出、上客の前に進み、偖は私も御相伴仕候へ共、誠に不加減にて、嘸食上り憎く可有御座抔と云ながら、吸物を上客へ進むべし。客方は、十分の御鹽梅、宜敷結搆に頂戴致したる旨を叮寧に申述べし。主人は是を聴ながら、吸物を順々に末客迄取廻すべし、客は又、御酒も美酒にて大酩酊仕候と云様に、客は亭主の骨折の程を賞賛し、亭主は自分を鄙下して挨拶し、

末座の邊に至り、明盃へ椀盛の空椀を並べ、持入又出て、燒物鉢、銚子德利の類も、明き物を持入べし。次に八寸(但し杉の木地折出足の無き物也。是に其時々の品二種、或は三種取交盛付るもの也)を靑竹の箸を添へ、銚子の潤酒を改め持、是も上客の前に進み、先一献繼、吸物椀の蓋を假借して八寸の品々を取分進むべし。二客以下同斷。末座に至り終らば、上客は亭主へ對し、御盃御持出の上一献頂戴可仕と尊敬して申すべし。其處で主は、だら仕りまして、御持合の御盃を戴き可申と答辭すべし。上客は、然らば御免を蒙可と申、末座に留盃盃臺を假て、「盃の口付の露を能切、臺に載て、亭主へ、今日は段々難有、御料理と申、主人公の御註意大に感佩仕、先一献召上り可被下と云て盃を進むべし。此酌は二客取方よし。八寸の取肴も、懷紙を出し、少し筋違に折、是に取肴を載せて參らすべし。又主は此盃を舉て上客へ返盃すべし。二客以下も同樣に取遣の儀式有べし、末座に至り右相濟候はゝ、上客の盃を亭主へ進、衆客に代り、是に一御納盃可被降、隨て御湯を戴き度と所望すべし。次に亭主は此盃を請て一献飮、然らば任仰御納盃と仕御湯を參らせ可申と言ふて八寸の片端へ盃臺を載、左手に持、右手に銚子を持入べし。(但し此間客方にては吸物椀及盃を末座取扱、辨宜の場所に片付置べし

に主は、香物鉢を、脇取盆に載せ、箸を添、湯桶に湯を入、湯の兒も入べし。湯の兒匙を添、此一個を載持出、上客の前に往、香物に箸を載、向を直し進むべし。湯桶も湯の兒匙を中に入、取手を向へ直し、上客の前に進め、明盃には吸物椀を載て持下り、一時勝手口を切締べし。上客は香物を次禮して取廻すべし。引續湯も殘飯に掛て「湯の兒匙にて掬ひ取て飯椀に入るべし。又別に湯を汁椀へ少し繼置べし。次第々々に末座に廻りた

ば、例の如く香物鉢、湯桶を辨宜の處に片付置べし。扨客方は湯漬に香物を添て食すべし。食し終らば、汁椀に取置たる湯にて箸及飯椀の中を見苦敷無之樣洗ひ、其湯をも飲盡すべし。次に懷紙を出し。紙を揉み柔らかになし、第一に箸先をふき、飯椀汁椀共に實の方を拭ふべし。是は敢て清潔にするに不及、露氣のなき樣にふき取べし。折敷の中も、露或は汚物あらば拭ひ取べし。椀の蓋も露計拭ふてよし。扨椀の蓋は仰向て組合すべし。向付も同樣、中を奇麗に拭ふものなり。次に折敷の中、椀と向付と位置能樣に並べ、箸は縁に不掛、折敷の中へ落し置べし。亭主方にては此間十分間斗過て脇取盆を持出、勝手口を明け、先香物鉢、及湯桶を盆に載持入べし。又出て上客の膳を請取、持入べし。此時上客は折敷を些少向の方へ出し、身体も膝行し、向へ出て膳を持上、主へ渡し、恭き旨を云て一禮し、主も是を受て、持ながら挨拶をなし、持入。二客以下同樣の品振舞をなすべし末座迄引終り、一應勝手口を締切べし。

女禮

有住常子

兩側列座膳出しやう

これは左右は客人の並居たまふ時、人數によりて、一行に持出で、共に進む樣なり。

まづ二人並びて、膳を持て、右座の人は、右の方の膝頭をうかして、右に膝をひねりて、左座の人は左の方の膝頭をうかして、左に膝をひねりて、共に立て進みゆくべし。

さて兩人すゝみ出で、御前に至りて、右座の人は、立止りて、左足を右足の爪先に横につけて、右にむかひ左座の人は、立止りて、右足を左足の爪先に横につけて、左にむかひて、程よく進みて、ふみそろへて、左

足を半足右足より引きて、左膝より跪きて、右膝を引ながら左膝を引ながら、右左の爪先をおろして居りて膳を下に靜におきて、膳の足をそつとおして、進むべし。左右ともに同じ事なり。さて進みをはらぞ、左右の手を膝頭に引て、右膝をおしながら、爪立ち、左膝をもおしながら爪立て、左右ともに、下座の方の膝即右の人は右の膝、左の人は左の膝を下座とす。をうかめて、其方へとひらきて、下座にむかひて、共にたちて、退くなり。

右膝頭を二三寸うかして、爪先にて工合をなしつゝ左膝頭をずらして右にひらくべし。何人にても同じやうにてよろしきなり。左も右もはやきおそき事なく起居すべく心がくる事肝要なり。

同　膳さくるやう

御前同じやうに、進み出で、右左とも向きなほりて、御前の膳より三尺ほどおきて跪きて、左右の手を、前へすゝめて、程を見斗ひ、膝を右左と進めて平に居りて、膳の足へ手をかけて、すこし引よせて持よき位にして持ちて右膝を引て爪立て、左膝を引て爪立て、さきの如く下座にひらきて退くなり。

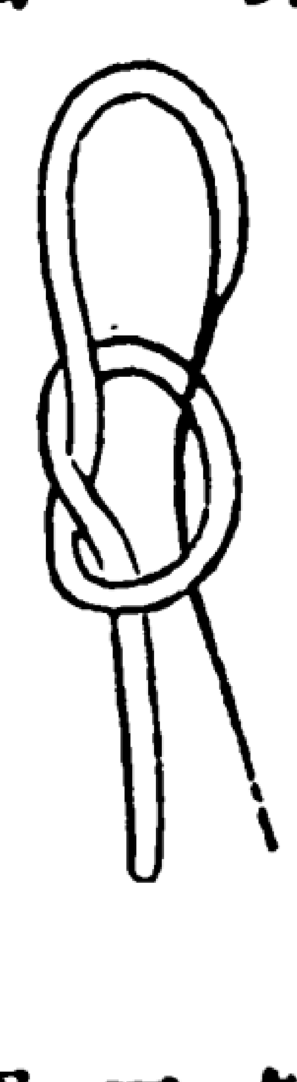
新撰結物百種

百草庵一無

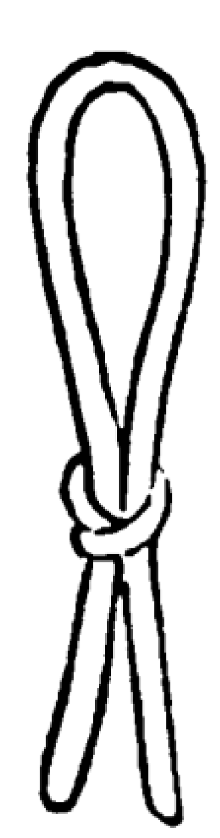
片結14　右　是は輪にならぬ物を、かく結びて片結とも、又片わなとも云ふなり。

（石井泰次郎云ふ　こは片結、一名思結とて、右左と二種にわかちて、結記に出たる結方の右片結なり。）

第一圖



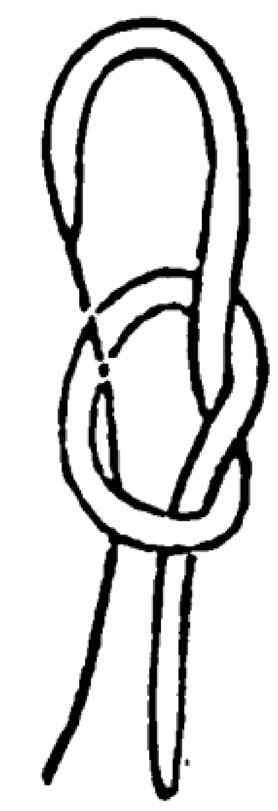
第二圖



結び上り

片結15　左　（同記に云ふ、左かた結なり）

第一圖



第二圖

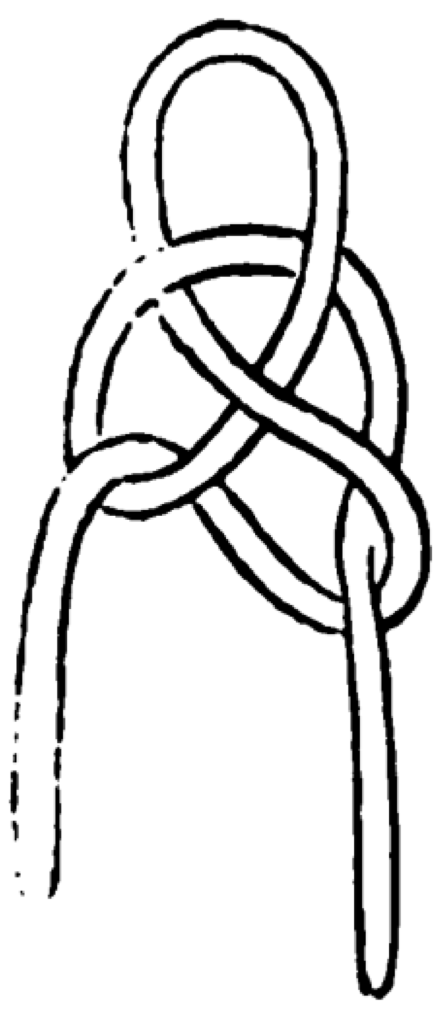


結び上り

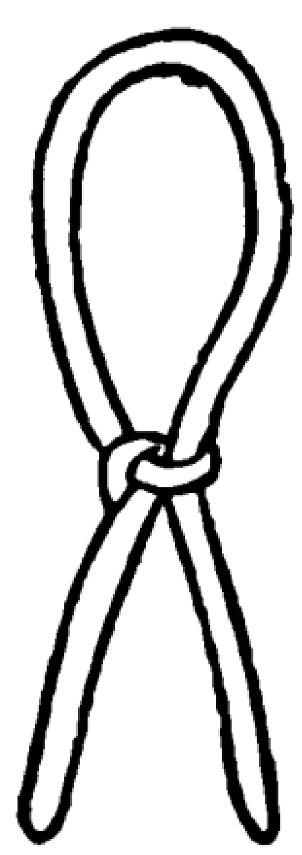
鳥首16

（石井泰次郎云ふ　是も結記に出たる物、同記に是は鷹の餌袋につくる結び也、結やうの末かたは替れども、結びたる形は諸むすびに同じ様に見ゆ。されども、よく較べ見れどたがふ也鳥の首、一名からすがしら、又鳥の目とも云ふ。と見えたり）

第一圖



第二圖



結び上り

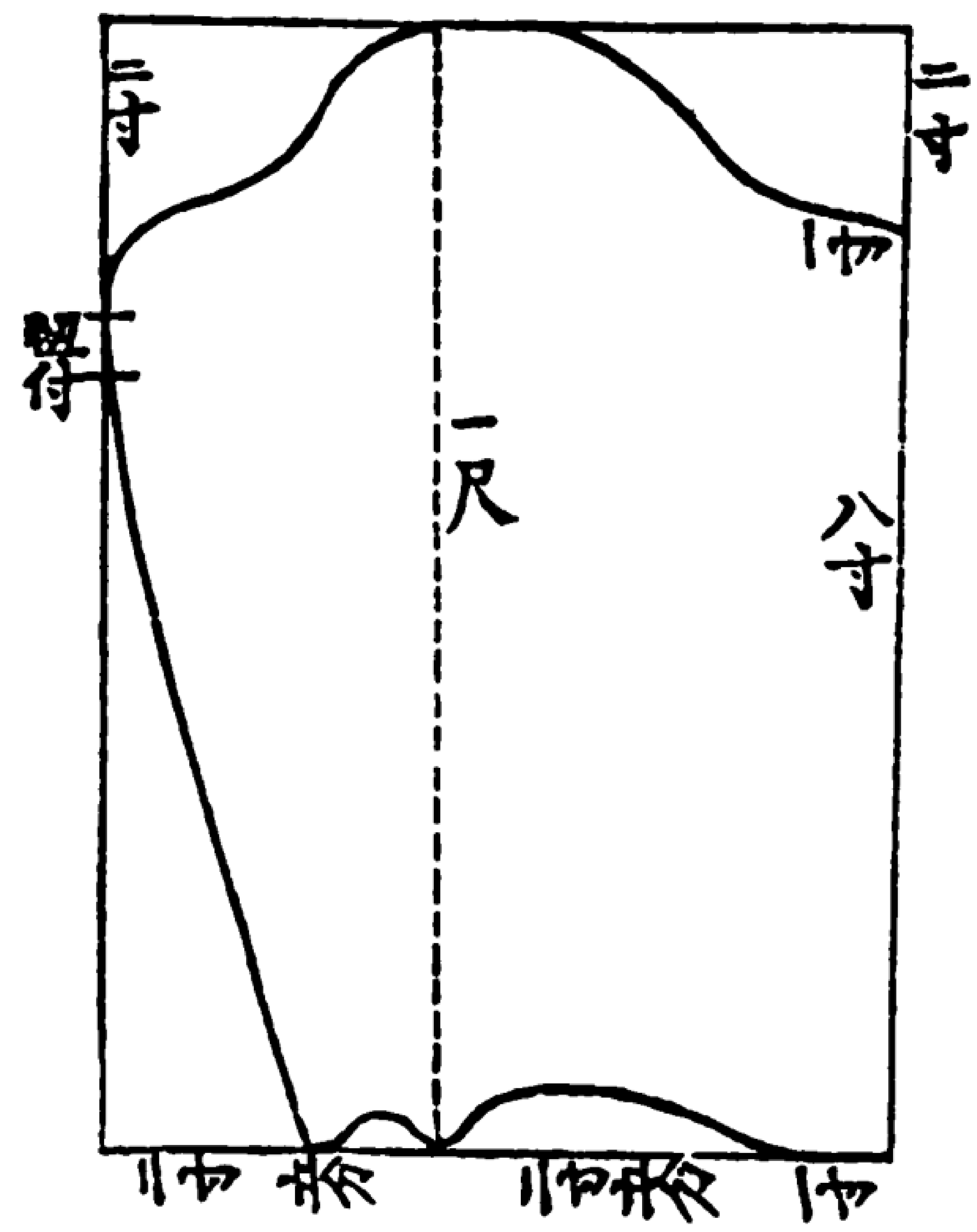
たちぬひ

西山たい子

（九十八）脚袢仕立方

脚袢は、表はめくら縞、裏は淺黄木綿にて、裏表とも、木綿巾二尺の布を二つに疊み、即ち一尺のたけなるもの、裏表にて、四枚をよくそろへて、裁板の上にれき裁刀にて、左圖の如く向布を裁ち、そのかきとりたる布の大なるものより圖の如き襠布をとるべし、但し左右同じものを仕立て上げぬやう裁つ時より注意し、もし一尺づゝはなしある布を用ゆる時などは、両方とも中表にして裁ちぬふ時に、その布の表裏を違へぬやう心を用ゆべし。不注意のものは、或は衣服、シャツの袖、足袋、脚袢等左右よく同じものをつくるが多し。よく〳〵注意すべし。

向ふ布



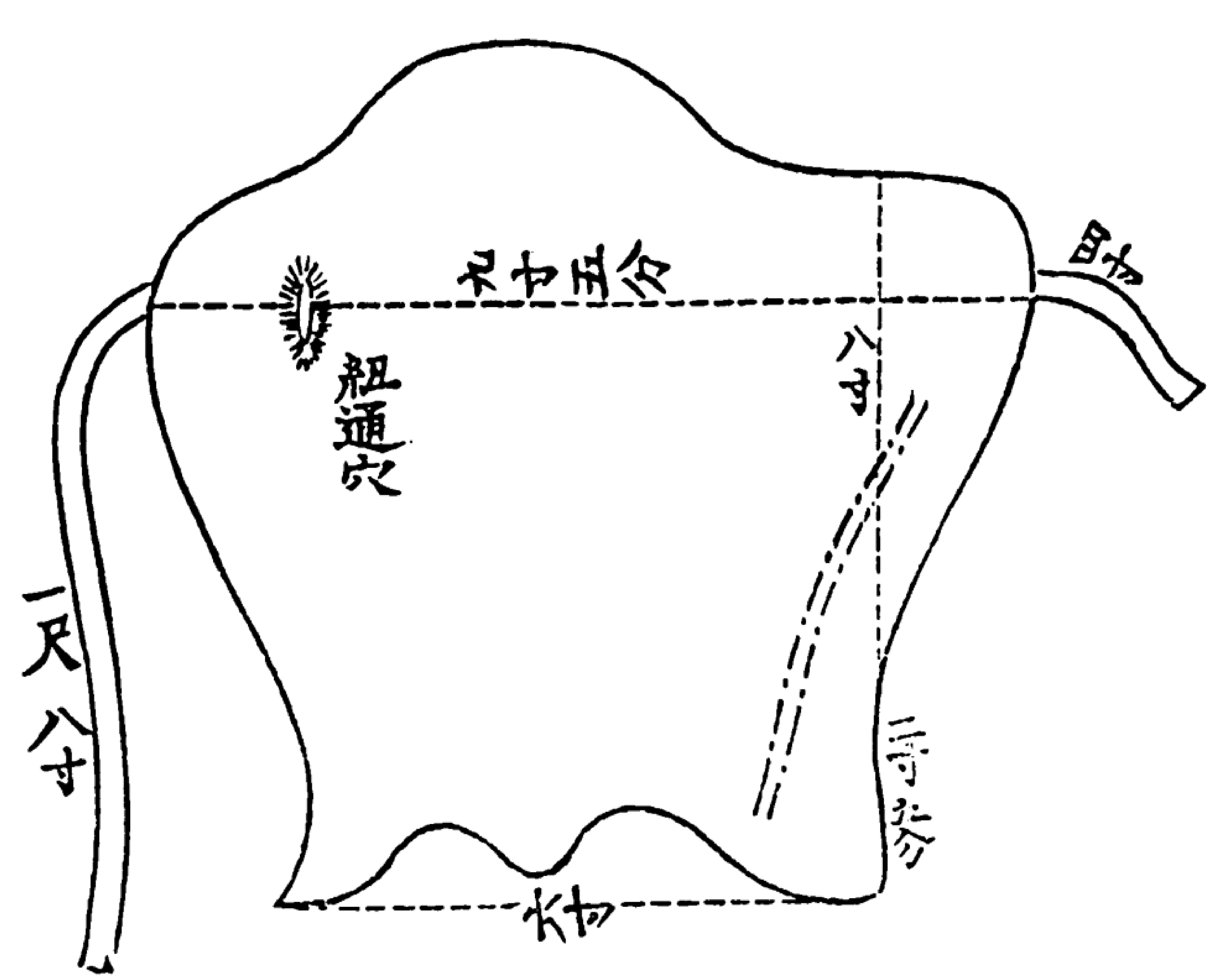


其他表と同じ布にて、長さ一尺八寸、巾一寸二三分の

とを要す。

裁ち終らば、まづ紐を四つともくけ置き、さて襠の布を裏表ともとり、兩方とも布の表を中にしてよく合せ、みじかき方の紐をとりて、紐付としるしある所にはさみ、眞直なる方をわけおき、ぐるりとふちをぬひ、ひきかへして伏せぬひをなし、そのぬはぬ方を向ふ布の眞直ぐなる方の上にはさみ、また長き紐を圖の紐つけとしるしある所にはさみ、横の方を少しばかりわけおきて、周圍をぐるりとぬひ、わけおきし所より引きかへして絎け、伏せ縫ひをなし、向ふ布の紐付より二寸五分ばかりはなしたる所に、紐通しの空を縦にわけ、シヤツのボタン通しの穴の如くかゞり。又向ふ布の紐付より一寸五分ばかり下、裏がはへこはぜを五つ六つばかりとぢつけ、こはぜ通しの紐を、襠の方を表側につけるべし。左右とも同じ縫ひ方なり。但し同じものゝ出來ぬやうに注意すべし。

脚絆仕立上りの圖



だいどころ

冬の部

椀盛

石焼豆腐、鶏卵、そぼろ、柚子○鴨のたゝきに、ゑんじよ、せり、柚子○風呂ふき大根、柚子、味噌○鴨、ゑんじよ、塩松茸、みつば○むすびきすに、うど、のり○海老のくづしに、塩松茸、みつ葉、柚子○鴨の薄切に、松露に、大根○鱈の切身に、青こんぶ○鮟鱇に、豆腐、赤味噌、口山椒○白魚、貝はしら、うど。

焼物

甘鯛てり焼に、くはゐ、せんべい○鯛の塩焼に、唐煮の蜜柑○あはせさよりに、きぬまき蕪○魴鮄の塩焼、きんかん甘煮○ぶりの味噌漬焼に蒸長芋○小鳥を骨共たゝきて、山椒醤油つけ焼○甘鯛の焼塩に、天王寺かぶのまぎ焼○蒸かれひ色附焼、唐煮の蜜柑○さわらのてり焼、すり生姜○石かれひの白焼に、すり山葵醤油。

膾

かれひ作り身、獨活のせん、山葵酢○なまこ、生姜さいの目、塩梅酢○さより、みつ葉、すりわさび○鯛つくり身に、うど、き酢○なまこ小口きり、紅葉おろし、二杯酢○いかはそづくりに、生姜酢○赤貝、うど、青

季、き醤油○ばらのほそづくりに、大根短冊、からし、酢味噌○よさり細づくり、うどせん、甘酢○きすつくり身、生のり、防風、鹽梅酢○蒸鳥の肉をさきて、山葵酢○むき蛤に、大根、せん、からし、酢味噌○さむき海老、わさび酢。



秀歌集（三十三）

鹽井正男

○

君ゆゑになれる姿と思ふより
　かゝみのかげもいとはれぬかな

○これは、後徳大寺左大臣實定の林下集にあり。○

り。○なれる姿。かく痩せ衰へたる姿といふことをいへるなり。○かゝみのかげ。鏡に見ゆる我が痩せ衰へし貌といふことなり。○いとはれぬかな。○われは、我が痩せ衰へたるかげも、いやには思はれぬワイといふことなり。

○一首の意は、我が此の痩せ衰へたる姿は、君を思ひこがれ、君が爲めにかく痩せ衰へしなりと思へ故に、鏡に見ゆる此の痩せ衰へし我がかげも、我れはいやには思はれぬワイいふことにて、つねならぞ、嫌ふべき我が衰貌も、君を思ひに痩せてと思へぞ、なかくにいやには思はれぬとは、君が爲めには命ふ惜しからのじ詞にもまさりて、いと切に、いと面白くよまれたるものかな。

○

何となくかくかく手習ひのすさびにも
　思ふ思ひぞ先づは見えける

○れなじ人の仝じ集にあり。○すさび。慰みのしわざといふことなり。○一首の意は、何となく慰みに書きちらす手習のしわざの中にも、思ひ慕ふ心情が、先づ第一にあらはる、ワイといふことにて、一首の意は明かなり、よく切なる心情のならひを描き出たり。

○

くまもなきをりしも人を思ひ出でゝ
　心と月をやつしつるかな

○これは、西行法師の歌にて、山家集にあり。○くまもなき、隈なき月かげにてくらき、所なく月のはれたるけしきなり。○人を思ひ出でて。なつかしき人を思ひ出づるなり。○心と。我が心よりといふ意なり。○月をやつしけるかな。やつすとは、かゝる時は、姿を悪しき方にかへる意にて、されぞ、月をやつすとは、隈なく晴れたる月影を曇らすをいへるなり。○一首の意は、月の隈なく晴れたる折りから、なつかしき人の事を思ひ出でゝ、頻り戀ひしさに、涙もうかび來り、われと、我が心より、晴れたる月かげを曇らしたワイナアーといふ意にて、月の隈なきに反て、人の思ひ出でられたるけしきなり。詞のわかりやすくすなはなるは、いつも此の法師の得たる所にて、かつ、感情のこぼれていとあはれなり。

○

いとゞしくなぐさめがたき夕ぐれに
　秋どればゆる風ぞ吹くなる

○これは、後拾遺集なる秋歌の部にありて、源道済のよめるなり。○いとゞしく。いとも甚しくといふ意。○なぐさめがたき。いとものさびしくて心の慰めかねたることなり。○秋どればゆる。秋なりと思ひ知る冷やかなる風の吹く意なり。
○一首の意は、甚だものさびしくて慰めがたき夕ぐれに、秋なりと思ひ知る冷やかなる風が吹くといふことにて、さびしき夕ぐれに、秋風の冷やかに

さびしく吹き[illegible]身にしみて[illegible]
りのまゝをうち出でたるが中に限りなくてばれてい
とあはれなり。

○

おなじくぞ雪つもるらむと思へども
　君ふる里はまづぞとはるゝ

○これも、全集なる冬歌の部にあり。入道前太政大臣道長が、雪ふれるあした大納言公任の許に遣はしたる歌なり。○おなじくぞ。何處も全樣にといふとなり。○君ふる里。君の住む所といふを、君の年ふる里といふ詞より、君ふる里といひ、さて、雪のふるにむかへ、わやなしいへり。

○一首の意は、何處の里も全樣に雪の降りつもれるならむと思へども、君の住む里は、殊に戀ひしくていづくはあれ、此の雪に先づ第一に問ふ心になるといふとにて、君ふる里のふるといふ詞づかひは殊更一首の趣向も、誠に才吟面白しといふべし。

源氏物語講義（十[illegible]）

下田義天類講義
山川鵜一筆記

かぎりあれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方同じ烟にも上りなむと泣きこがれ給ひて、御送の女房の車に、慕ひ乘り給ひて、をたぎといふ所に、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけむ。空しき御骸をみる〳〵、猶おはするものと思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今はなき人と、ひたぶるに思ひなりなむと、さかしうのたまひつれど、車より墮ちぬべう惑ひ給へば、さは思ひつかじと、人々もて煩ひ聞ゆ。

これより里亭の狀を敍ずるなり。

○かぎりあれば例のさほふにをさめ奉るを、御息所の御遺骸は、其より一日二日こそは手當ゐして留めおきつれ。段々狀變りゆく死人を止めおくて

とは限りあることとなれど、定りたる作法によりて葬送し奉るをなり。この葬送は火葬なり。

○母北の方　御息所の母君、即按察使中納言の北の方なり。

○おなじ烟にものぼりなむと泣きこがれ　御息所の母君は、御愁傷のあまりに、御息所の火葬の烟にまじりて共々に消えゆきたいといひて泣きこがれ給ふ由なり。同じけぶりにものぼりなむとは御息所を火葬にするその烟と同じ烟になりて空に立登りたい　即吾も御息所と一緒に死んで同じ黄泉へ行きたいとなり。こがれといふ語は烟といへる縁によりて引出したるものなり。活きある書様といふべし

○御おくりの女房の車に慕ひのりたまひて、　親として吾が子の野邊送りするなどのことはあるまじき事なれども、子を思ふ暗に引されて、強ひても見送りせむとして、御見送の女房の車に慕ひ乗たまひしなり。子を思ふ心の暗に迷ひいでゝ行く親心、寫し得てあはれの狀見るが如き心地す。女房とは新釋に房はつぼねなり。部屋なり。轉りては只女をいふとあり。こゝは二條の里亭にて召使ふ女中なり。

○をたぎといふ所に　京都の洛外に在る愛宕の火葬場即鳥部野なり。垣武天皇の平安京に奠都したまひし時、こゝを諸人の火葬場と定められたること、延暦遷都記に見えたり。をたぎは今のあたごなり。あたごはをたぎといふ語の連聲の都合によりてかくいひかへられたるものなり。

○いといかめしうそのさはふしたるに　葬送の儀式を嚴重にしたる所なり。野邊送りのため白き旗を建て白き幕を引廻しなどして、式場には薪など積み重ねて、葬儀萬端のこる方なく用意したる所になり。

○おはしつきたる心地いかなかりかはありけむ　母君鳥部野につきたる時の實況を穿たずして、唯地文とり推測り去る所、例の讀者の想像に讓らむとする作者慣用の筆法なり。

○空しき御からをみる〳〵、猶おはするものと思ふがいとかひなければ　女房たちが母君愁傷の状をみて思ふ心をかけるなり。されど、こゝは、母君か出棺前に云ひし語をとり出して叙列したるなり。母君は御息所の空しき御遺骸を、現在目の前に見て居りながら、其でもやはり死んだとは思はれぬ、猶生きておはするものと思ふが、吾ながらいひがひがなければなり。

○灰になり給はむと見奉りて、今はなき人とひたふるに思ひなりなむと　御遺骸を見て居ては、猶眞に死んだものとは思ひきられぬ故、火葬にして、茶毘一片の烟と化し去り給ふを見奉りて、これこそ愈亡き人とひたすら思ひあきらめやう、遺骸を見てをる限りは、死んだとは思はれぬ。せめては火葬場になりとも行きて、燼灰となり終るのを見たならば、それであきらめがつかうと仰せられたりとなり。空しき御からを云々よりてゝまでは、出棺前に北の方の言はれた詞を、女房等の追想に上せてこゝに現し書けるなり。

○さかしうのたまひつれど、車よりおちぬべう惑ひたまへど　出棺前にはかやうに道理らしく仰せられたる故、畢竟あきらめをつける手段にもならむかと思ひ、その詞に任せて、御同車はしたれど、しかさかしく宣ひしには似ず。嘆の切なるあまりに、身をもがきての御愁傷にて、車よりころがりおちさうに泣き惑ひ給へばなり。

○さは思ひつかしと、人々もて煩ひきこゆ　介抱の女中たちはあのやうに、道理をつけて御言ひなされたが、大方かくあらむと思つたことよといひて、人々は持餘して居たとなり。思ひつかしのつは過去の助動詞。かしは決定の助辭なり。

以上を一括して申せば、死骸を家に留めおくことは、限りあることとなれば、定れる法式によりて收め奉らむとするを、御息所

の母君北の方は、吾も御息所と共に同じ烟となりて消ねてゆきたいと泣きこがれ給ひて、御見送の女中乘の車にしたひ乘りたまひて、野邊の送りを致された。さて、愛宕といふ所の火葬場の嚴重に葬儀の用意したる所に御出なされたその時の北の方の御心中は、果して如何でわつたらう。讀者宜しく推量せよ。さて北の方はこのごと〳〵しきわたりの光景に前後を忘却して、最前出棺の時には、御息所の御遺骸を目前に見つゝありては、やはり猶この世に生存して在するものと思ふが、ホンに言ひがひなきことゝなれど、寧火葬場に行きて、茶毘一片の烟となりたまふを見奉りて、今こそ亡き人となりたれど、ひたすら思ひきらむと、最らしく仰せられたれど、唯今式場に臨みたまひては、愁傷のあまり身をもがきて、車より落ちさうに惑ひたまへど、左樣わらむと思つたことよと、女房たちは持てわつかひかねて御座つたといへるなり。

六句歌體辨略解

藤井行麿

世に所謂、旋頭歌、混本歌の名つたはれども、其考證れもひ得たる人わらざりしが、吾が師大國翁、六句歌躰辨といふ書を著して、ねもごろにいはれたる解説は、動くまじき考なり。故こゝに、其中よりいさゝかづゝ證歌をとり出て、初學びの人にしらしめんとす。

旋頭歌

萬葉十六

澁溪乃、二上山爾、鷲曾子產跡云、指羽爾毛、君之御爲爾、鷲曾子產跡云。

萬葉八

橋立、倉橋川、河靜菅、余苅、笠裳不編、川靜菅。

仝禁止躰

住江乃、出見乃濱乃、芝那苅曾禰、處女等賀、赤裳乃裾乃、濡旦行見舞。

古今十九

君がさす、三笠の山の、もみぢの色、神無月、時雨の雨の、染るなりけり。

春されど、野邊にまづ咲く、見れど飽かぬ、花まひなしに、たゞなのるべき、花の名なれや。

混本歌

日本紀

伊夜彦乃、神能布本、今日良毛加、鹿乃伏良武、皮服着而、角附奈我良。

風俗譜

常陸爾波、田乎祉作禮、阿太心、加奴止也君可、山乎越、雨夜來坐留。

神樂歌

榊葉の、香をかぐはしみ、とめくれど、八十氏人ぞ、圓居せりける、まとゐせりける。

これらみな混本の躰格なり。

また小長歌格調證歌

古事記　倭建命の國しのひの歌

大和は、國のまほらぞ、たゝなづく、靑垣山こもれる、やまとしうるはし。

日本紀十四

道に逢、尾代の古、天爾祉、不聞あらめ、國にはきこゑてな。

吉備臣尾代が五百蝦夷どもの反逆せしを追打射ころしたる時の歌なり。

右にあげたる格調の如く、其姿とり〴〵なるが、旋頭といふは、末句を、上の初句または三句目のかしらへ旋らす躰の歌をいふなり。また混本といふ躰は、末句を本へかへし、いづれの句にもあれ、混へてとゝのふるをいふは、前に出せる證歌の如し。小長歌と名づけて出されしは、旋頭にあらず、混本にあらず、別格なれど、聯句のれはく長きを、假に大長歌と見て、短を小長歌と名づけてさとされたるなりけり。

明治卅一年十月十八日病床に臥ながらしるす



士從心得草（續）

諏訪忠元　寄贈

御明君六波羅より鎌倉竹三郎君御養育御差圖の御文章（此文章は子をそだつるの大事にして大入用也子孫の安否爰にあり容易に見る事なかれ）の給はく、幼少の者利發に候とて、立木の儘に育候得ば、成人の後氣儘我儘者になり、多くは親の申事も聞ぬものにて候、後々國を治る事は扨置、我身も立申さぬやふになり申候、一体幼少の者は何事も質直なるものに候まゝ、いかやふに窮屈に育候ても、最初よりの仕付次第にて、外より存る程に大儀にもなきものに候。是を柱木にたとへ候得ば、始め二葉にてかいわり候節、人のそだちと同じ事故、随分養育いたし、最はや一二年も立、枝葉多くなり候節、添木を致し、直になり候様に結び立、其内悪敷枝はかり取、年々右の通りに手入いたし候得ば、後直になり、能木となり申候。人も其通りに御座候、四五歳よりそへ木を付置候て、悪敷枝は我儘に育たぬやふにいたし候得ば、後には直になり、能人となり申候。幼少の時はそだちさへすればよきと心得、我儘にいたし置、年頃になり、急に異見いたし候ても、我儘の悪敷枝ばかり去げり、本心の本木はうせ候ことゆへなほり不申候。是には今以存置候事有之候、總領出生の節、年若にて子供珍敷、そだちさへすれば能と心得、氣のつまり候事はいたさせず、氣隨に育てゝ成人のうへ急に色々と申聞候得共、兎角幼少の時、行義作法ゆるやかに捨置候まゝ、親をうやまふ事を存せす、心易く思ひ、後は親子あらそひのやふになりて、毎度申ても聞いれず、却て親を恨る様になり行申候。夫にこり候儘、外の子供は、幼少より我前にて行義作法能者をつけ置、若少しにても不行義我儘の事は我等ゑかくし不申、遂

々申聞候様に申付置候、又是はかやうには致さぬもの
ぞと、一々申聞候故、影日向なく直質にそだち申候、第一親をこわく存候得ぞ、愼みよく、幼少のときより親へ孝行いたし候事を覺へ申候。其上小身ものと遠ひ、召仕ひ候者の申事を承り候様に申事専一に候、親のある内は愼み候ふも、親のいぬ時になり我儘いたし、國郡を失ひ候者、古へより多くこれあり、兎角幼少の者には、召仕ひの者の申事を能きけと、常々御申きかせ可被成候唯人は人を鏡として、身を正敷いたし候より外はなく候（此身を正敗するより外なく候といふこさなし、さしろべし肝心のことなり）我儘にては願望叶ひ候事決してなきことに候。第一我儘なれど親を思はぬものに候、唯幼少より物事自由ならざる事を能々心得候様にいたし度事に候とあり。御明君の思召を見るべし。わりがたき事に候。天下の御子と成ても、我儘自由は決なり不申、況や百姓町人の分際として、子供のいふ通りにしてやりたいとは出愛に相違なし。急度いましめ給へ。くどくはいわぬ、考へられよ。餘り入用の事故、長けれども爰にしるす目をむき出してよく見給へ。十丈の松の木も、一寸の時をよく養ひ得て、千年の青き緑をあらはし。五尺の人も、一尺の時より能養ひ得て、百年の壽を保つ事をしるべし。

（以下續く）

筺底楮餘（五）

紫光

○人若心意の作用の中に就きて、最神聖なるものは何ぞと問はゞ、余は「同情」なりと答ふることを躊躇せざるべし。げにや同情なるものはうらく〵と霞みわたれて、櫻花こまやかに匂ふ春の日のごとく、長閑に大空一點のくもりなき中秋の月の光に似て、清くそのれおやかなるは、天使の笑にもたとへつべく、その微妙なるは天女の樂にもよそへつべし。

人が深き憂にしづめる時、重きれもひにとぢられた

時、社會の荒浪にたゞよはされて、その舵撓を失ひたる時、來をおもひ往を思ひて、情緒萬端なる時、これをなぐさめ之を勵まし、飲に渇せるものには之に慰安の水をあたへ、路に迷へるものには之に希望の光を與ふ。是同情の涙ある人にして始めてこの間の消息を解しうべし。彼の白眼冷血にして他の困憊を嘲笑し、他の窮厄を意とせざるものは、ともに語るに足らざるものなり。

由來女は涙もろきものなりといふ。またきはめて情に動されやすしといふ。涙もろし、故に自他をとはずして憂戚に涙をそゝぐ。情に動され易し、故に自他の隔なく喜悦に忭躍す。女子の心は實につよくはられたる琴瑟の絃のごとぎが微風のそよと觸るゝにも猶戛たる響あるなり。されど、また彼の神聖なる同情性は、女子の最多く具有せるものなることを誇りうべきなり。物語をよみてその善者さかえて惡人ほろびぬるに到り、最著くそのよろこびを芳類に上すものは實に女子なるにあらずや。劇場に於て、その主人公が無辜にくるしめられて天道是乎非乎を嘆ずる時、最多くそのハンカチーフをうるほすものは、また女子にあらずや。是蓋その強き同情性よりいづ。然れども、この同情の性なるもの、もとその性情のもろくして他に動され易きよりいでたる者なるを以て、其の點に於ては欠點を生ずることをまぬかれず。即いさゝかの事にも、きはめて感じやすく、爲に偏見を生じ、ゆくりなき風波をひきおこすことなどある、これ皆この性情よりいでたるあしき方なり。されど、女子たるもの家の主婦として、その夫の、社會に立交らひて疲れたるをなぐさめ、その奴婢の、家のつとめにいそしみたるをねぎらふなどには、きはめてこの貴き同情性の發作を熾ならしむべく、舅姑に接してその起居に候し、他人に對して相應酬するがごとき際にありては、よくその情によわき心を制して、偏見に陥らぬやうに心すべきなり。

以上の言之を約すれど、女子の涙もろく、情に動され

き性情は、二方面の發作をなすべし。即一は貴き同情の性にして、一は卑しむべき偏見の性なり。故によせずは、女子と小人はなど〻のそしりを招くべけれ、卑しむべき方をばよくしづめて、貴き方をばますすかゞやかしむべしとなり。

歌は性情の發路なりといふ。されど、その人のよみづる歌を以て、その人の性情をうかゞひ得むこと、た難からざるべし。かゝる理を以て論じいでたるなむか、隣女唔言といへるものに左の一節あり。

不仁の歌

詞花集　　道命法師

たまさかにわが待ちわたる鶯の
初音をあやな人やきくらむ

鶯のはつねを深く賞したるは風流なれど、己が好む所をぞ人にも及ぼさむと思はむこそまことの風雅ならめ、法師の歌にしては猶更に思はしからず、不仁の心なり。

新千載集　　野宮左大臣

此の里にしばしかたらへ時鳥
外の初音は今日ならずとも

此の歌を賓陰卿は不仁の歌なりと評し給へり。詞花集の歌は不仁の心猶ふかし。

拾遺集

すぎぬるを恨ははてし郭公
鳴ゆく方に人も待らむ

後拾遺集

身をつめば入もをしまじ秋の月
山のあなたの人も待つらむ

是等は仁恕の道にかなひたるにや。

あながち道德を以て詩歌の美を律すべきものにもあらねど、是等はおもしろき見方とやいふべからむ。

○女子はきはめてよくおのが心をもてかくすものなりといふ人あり。げにもいにしへ紫式部も然いへり。されど、これ果してよかるべき事なるか、これがたゞし

こりきたる私心を抑制する意ならむよし。されど若、綿裏針を藏するがごとく、うちにはきたなきこゝろを有しつゝ、表のみさまよきかぎりぞとするにあらで、いと忌むべきことゝなり。またこれが所謂、にほひやかにゆかしき所あらする意ならむもいとよし。されど、このもてかくすといへることは、多くは若やかなるほどのことにて、年ふるまゝにやう／＼下ぞめの色のあらはれいで、いつかはそのほころびのいで來なむものぞ。吾人はそのわざともてかくしたる一時のめでたさよりは、その心のすぐなるまゝにて、猶めでたくゆかしくかはらぬ色あらむこそねがはしけれ。

謝小娥傳

赤松　景福　譯

本傳は本唐の代の李公佐といひし人の作れるものにて、謝小娥といふ婦人の事なり。此婦人世に奇らしう貞烈の行あるを以て、李公佐はこを顯さん爲書きしものとぞ。おのれ若かりし時一讀して感せしことあり。今思出のまゝ、その要略を譯することゝなしぬ。素より淫がはしき小説とは異なれど、殊に面白きやうもあらず。又この譯文に辭を飾れることもせざれど、大方質直なるものと見てよ。

小娥姓は謝氏といひて、豫章といふ地の商家の女なり。八歲の時早母に離れ、後歷陽なる段居貞といふ人の妻となる。此段居貞は俠客にて、時の大家と交際せるものなり。小娥の里方も家產豊にして、いつも居貞と共に商業の爲四方に往來せり。小娥年若き時、實父夫と共に旅にありて、强盜に遇ひ、金帛を盜み取れしのみならず、數多の家僕等と同じう江水に溺れて死けり。その時小娥も從ひて負傷して水に漂ひけるが、他船に救はれ辛うじて陸に上り、こゝかしこに流落ひ乞食して、上元縣の妙果寺なる尼淨悟の室に到りて、そこに身を寄たり。さて父の殺されし時、ある夜夢に父來ん

て、

殺レ我者車中猴門東草。

と小娥に告げけり。數日ありて又夢にその夫來りて、

殺レ我者禾中走一日夫

と、小娥に告げたり。小娥此語を解する由なければ、平生此語を書き付て、廣く知者に尋ねけれど、年久しう誰も知ることなくて過ぎぬ。しかるに、元和八年の春、李公佐といふ官吏ありて、建業といふ所に舟泊して、瓦官寺に遊びし折、齊物といふ僧の學問好ありて、李氏に語りけるやう、寡婦小娥といふものは、此寺に來るごとに十二字の謎語(即ち父と夫との夢告、十二字とは殺我者の三字を省きて云也)を示して、說明してよといへども、某は何とも得解せずとて、遂にその十二字を紙にかきて李子に示しければ、李氏はその語を考へながら、寺童を遣りて小娥を呼寄せてその緣由を問ふ。小娥はしばし淚に咽びしが、答ていふやう、我父及夫二人、ともに賊に殺されき。その後夢に、父は、殺我者車中猴門東草と云ひ。夫は、殺我者禾中走一日夫と告げゝるを、此年頃誰に尋ぬれども分らで過ぎぬる事を答へければ、李氏曰く、然れども吾汝が爲に解て聞すべし。車の字の上下の一を除けば申の字となる。故に車中猴とは申(十二支の申は猴なり)なり。門東草の三字を取合すれば蘭の字となる。是にて汝が父を殺しゝものは申蘭なり。次に禾中走とは田(禾は田に植る故に禾中は田の事と判じたり。禾中[illegible]國にてアハとよめど稻なども云)の中を通過る形にて、田の字の中竪を上下に拔出せば、これも亦申の字なり。一日夫の三字を取合すれば春の字となる。是にて汝が夫を殺しゝものは申春なりと說明しければ、小娥これを聞きて驚き悲み、拜謝して、即ち、申蘭、申春の四字を衣の中に認めて、此二人を殺して我父と夫との仇を復さむと誓ひて、右のことを敎へし李氏の姓名官族を懇に問て淚を拭ひつゝ去りぬ。

(次號完)

鎌倉時代第一の貞婦

白松園主人

平安の朝、女德いみじうおとろへて、貴族社會の閨門は、麻糸の亂れ繁かりしかど、我國古來の女德は、全く地に墜ちぬれども、顧みる者だになかりけり。されども、交通機關の開けざる時なりければ、洛陽の奢侈は、未だ地方民間に傳播するに至らず。是に於て、女子道德の光輝は、屢々民間よりきらめき出でぬ。殊に武家の世となるに及び、頼朝武人を戒飭して、つとめて堂上驕奢の風に、染まざらんことを謀りしかど、武士道の盛んなるに伴ひ、花やかなりし平安の女子風俗も、おのづから一變して、おろそかなるさまとなりぬ。そが中にも、當時を代表して、鎌倉第一の貞婦ともいひつべき者は、實に源義經の妾靜なりとす。されど靜のことにつきては、神史小説など、くさ〴〵に物して、おもしろうかきなしたるもの、おほかれども、當時の事實尤も正確なるは、吾妻鏡なれど、要するに之の書について、敷衍せしにすぎざるべし。則ち全書に義經沒落して、大物浦大和吉野等をさまよひ、從ひ人に過ぎざりし時も、隨ひしこと見えたり。その吉野を出で、、關東に囚はれし時に於て、最も其節の高きを見る。全書文治二年四月八日の條に、

二品並御台處御參鶴岡宮以次被召出靜女於廻廊是依可令施舞曲也此事去比被仰處申病痾由不參於身不屑者雖不能左右爲豫州妾忽出掲焉砌之處頗耻辱之由日來内々雖澁申之彼既下名仁也云々

袈裟もまことの道を破れり、常磐は固より、貞婦を以て論ずべからず、朝には花の露にそぼちて、後朝の歌に他事もなく、夕には一夫に物憂くして愛を兩夫に賣。身は九重の雲に入りて、更衣上臈と時めけども、の實は月卿雲客の遊び女なるに、たとひ、白拍子の賤しき昔にはありとも、よく女子の本分と、身の

位置とを辨へて、其夫を思ふの切なること、此くの如し。嗚呼靜は、普通の婦女子よりは、嶄然たる志操を、有する者なりけり、全書全じき條に、

近日只有二別緒之愁一更無二舞曲之業一臨レ座猶固辭然而貴命及二再三一之間怱廻二白雪之袖一發二黄竹之歌一云々

固辭再三、その強ひて迫らるゝにおよび、止むことを得ず、起ちて舞ふ。その心根の哀れなる、忍ぶに餘りあり。全條に、

靜先吟二出歌一云

吉野山峯の白雪ふみ分けて
入りにし人の跡ぞ戀しき

袖をかへして舞ひ、聲を發して歌ふといへども、憂愁悲哀、須臾もおもひは判官を離れず、豈、敢て、人を慰むるに遑あらんや。二品、物の哀れを知らず、飽くまで恥辱を與へんとす、いでや却つて二品を辱かしめ、且つはわが眞情を訴へんと、露の命は消ゆぬとも、萬代かけて變らざる由を神前に盟ふ。あはれ堂々たる將軍の前にて、毅然としてひるまぬ、その節操の高く潔きことは、猶吉野山踏み分けにし白雪にもおとらざるべし。

次歌二別物曲一之後又吟二和歌一云

靜やまづ靜のをだまきくりかへし
昔を今になすよしもがな

誠是社壇之壯觀梁塵殆可レ動上下皆催二感興一二品仰云於二八幡宮寶前一施レ藝之時尤可レ祝二關東萬歲一之處不レ憚レ所二聞食一慕二反逆義經一歌二別曲一奇怪云々

豫め、その怒りに觸るゝを知ると雖ども、兄弟相鬩ぐの淺間しきをなげき諫む。かゝることは烈丈夫も猶憚ることとなるを、纎弱の一婦女子として、死を決しておそるゝことなし。吾妻鏡の記者が、誠是社壇之壯觀梁塵殆可レ動といひつるも、以あるなり。是をも[illegible]遂に彼の嫉妬深き政子をすら、感激せしめて、左の言を出さしむるに至る。

君爲ニ流人一坐ニ豆州一給之比於レ吾雖レ有ニ芳契一北條殿怖ニ時宜一潜被レ引ニ籠之一而猶和ニ順君一迷ニ暗夜一凌ニ深雪一到ニ君之所一亦出ニ石橋戰場一給之時獨殘ニ留伊豆山一不レ知ニ君存亡一日夜消レ魂論ニ其愁一者如ニ今靜之心一忘ニ豫州多年之好一不ニ戀慕一者非ニ貞女之姿一寄ニ形レ外之風情一謝ニ動レ中之露膽一尤可レ謂ニ幽玄一枉可ニ賞翫給一云々

頼朝の女大姫が、木曾義高を戀ひて、病に臥しぬるをりから、いかに同情の涙に朽ちけん、屢々人をして、靜母子をいたはりしこと、仝書に見えたり。思ふに靜が操行に感じて、いよ丶その貞節の心を、かたくせしなるべし。仝五月十四日の條に、

左衞門尉祐經梶原三郎景茂千葉平次常秀八田太郎朝重藤判官代邦通等面々相ニ具下若等一向ニ靜旅宿一抗レ酒催レ宴郢曲盡レ妙云々景茂傾ニ數盃一極ニ一醉一此間通ニ艶言於靜一靜頗落涙云豫州者鎌倉殿御連枝吾者彼妾也爲ニ御家人身一爭存ニ普通女一哉豫州不ニ牢籠一者對ニ面于和殿一不レ可レ有事也況於ニ今儀一哉云々

女郎花の露にもなやむ、かよわき身の、柳眉をわけ
その無禮を咎むることの、雄々しさは、彼の白菊の
の上に、霜をれけらん心地して、げに心ゆくかぎり
りや。時に芳紀十八、髮髮雲の如く、皮膚雪の如し。後
ち義經の戰死すと聞き、尼となりて行ひ澄ましけり
ぞ。嗚呼終始一貫、節を守りて威武にも屈せず、利
にも惑はず、凜乎として鬚眉男子をさへ、瞠若せし
しもの、前後類稀なり。方今都わたりの、婦女子た
を見るに、綺羅を裝ふことは、敢て平安の朝にも劣
ざんめれど、節の高き、此の靜と等しきもの幾人か
る。

（完）

時雨集

白松園主人

ゆめのまに、秋もふかうなりぬるかな。野邊の秋草、
べの紅葉、衣擣つ夜半、蟲鳴くゆふべ、賓雁の聲、

加の音、皆断腸のおもひを添へぬ。孤燈挑げ盡して、眼られぬまゝに、世になき人の、のこしおきたりし歌文どもを、せめてもの心やりに、くちずさみながら、ひとつふたつ、かき集めぬ。

神無月二十日の時雨ふる夜

江戸河畔の寓居にて

（亡兄作）

○あづまの名馬

東國名　名馬　徒に　羨まれてぞ牽かれゆく
及へずも惜しや物足らぬ　身こそつらけれ武士の
後れ先づ世の中に　朽惜しさよと打かこつ
こが心を思ひ汲み　朝夕すうる玉櫛笥
益の色こそさめにけれ　中には今も有明の
光りさやかに輝きて　價のまゝの十といふ
數にも足りてありぬべし　進らせんとて出しける
女の面をうち守り　かき集めても藻汐草
足はぬがちの辛き世を　許多うちすぎいざり火の
細りゆきつゝ諸共に　消ねも果てなん今はにも

うるまの島に住む海士の　知らぬ顔せしつれなさよ
いはるゝ言もうべなれど　參る昔に父よりぞ
櫛笥の底の奥深く　納めしまゝをたびにける
その折柄のいましめを　さかしらだちて今さらに
いはまほしとにわらね共　物乏しきにね堪へずて
努はかなくな取り出そ　せこが此世の大事とも
思はんふしを待つけて　花あり實ある代にせよ
かく誠の言をしも　守りつゝ來て今ぞ開く
花の都の馬ぞろへ　晴なる場にいとをしの
我夫すぐれてよかれよと　思ふはなべての妻心
折も折とて駒のころ　思ふわたりに船よする
これぞかねての誠に　合ふべかりける今こそは
花咲きそむる初春の　勇める駒の足掻とく
成出給ふ時ならし　されぞぞ始めて取出づる
心の奥はみよし野の　吉野の山と諸共に
今もゆかしと稱へけり　今も床しと稱へけり
わな嬉しやも我夫が　今日の出途の逸物を

人も見よかし御侍　多かる中に乘すゑて
功名あげて歸りませ　さらむと祝ふ聲につれ
つま音高く勇みゆく　骨逞ましき背にあつる
轡の調べも異なりて　鬣ふりたてふりしばる
駒の嘶はやがてこの　主の榮えとなりにけり

（附けていふ右は山内猪右門一豐が妻の事蹟を詠じたるなり）

（未完）

箱根の關（上）

此君樓主

こは今を去ること百五十年の昔、德川氏の政權を握りし寬延年間にありし實事談なり。その心して看たまへ。

相州箱根は海道第一の要衝なれど、德川氏は此處に關所を設けて、小田原の城主大久保氏に管理せしめ、往來の人々を取調べて、通行を許否せしが、中にも女は關所通行手形の掟もありて、この關門を過ぎんこと、なかなかに難かりき。（箱根關令は寬永十三年に發令し、後、慶安元年同通行女手形の制を定め、次て寬文元年同令の改正あり、これ等のことは後更に題を改めていふことあらん。）こゝに江戸靑山に、不破兵左衛門と云へる浪人あり。妻には先つ年死別れ、今年十一になる女の子と、九歲になる男の子と親子三人詫しく暮せしが、一年巳みがたき用事ありて、播州地へ旅だつことの起りぬ。さらでだに江戸には親戚とてもなく、又貯とてもなき身の、我兒等を預けて行かんことも難けれど、二人の子も共に連れて行かんと心は定めつれど、偖てむづかしきは女の子なり。子供とは云へ、嚴しき箱根の關を通らんに、女は最と煩はしきものなれど、男の子の樣にして關所の目を忍ばんと、愛らしき烏羽玉の髮剃り落し、坊主頭として、親子三人箱根の關所に至り、男ばかりと役人を欺きければ、何の仔細もなく通行を許されぬ。兵左衛門は胸撫でおろしことなりぬと竊かに悦び、疑はれぬ間に少しも早く

違さかゆへと二人の子供をせおひたてゝ行手を急ぎし程もなく、後の方より駈け來りし一人の馬方、兵左衛門を呼止めて、さて下拙は先程れ子樣逹を馬に乘せたる馬方なるが、今日關所を事なうれ通りわりしは何よりも目出たけれど、當座の御祝儀こそ得たけれと云ふに、兵左衛門は、身共は多寡の知れたる痩浪人、貯とても無けれしむと斷れども、馬方はなか／＼に聞入れず、猶さま／＼に乞ひ求むるにぞ、臑に疵持つ兵左衛門、殊更子供を連れたる旅なれど、終に鳥目十四文を取出して與へしに、馬方はそれと見て手にだに取らず冷笑ひ、れ侍樣は何と心得給ふにや、人の命は錢金にては買はれぬものぞ、それを金に轉ぶ下拙なれど、物數云はずに纏りし金出して給はれ、若し否とならど先刻見屆けたりしれ子達一人は確に女、これ斯うと關所に訴へ出でん、さあらどれ身樣親子は關所破りの大罪人、忽ち召捕られた上にて傑に行はるゝは天下の定法なり、そこを思ふて、祝儀を給はれと云ふ下拙の云條聞入れて下さらど此の儘見遁さん、若し左もなくど訴へ出でんと、弱身につけこむ强請かたりに、兵左衛門は心に覺ねのあることとなれど、甚く驚きしが、とゞろく胸をれしゝづめ、さあらぬ体にて、何しに左樣なる不法な働くべきや、こは思ひもよらぬ疑念にて、近頃迷惑千萬なりと、宥めつ叱りつなしけれども、馬方はいつかな聞かず、いよ／＼聲高に罵り、斯くなる上は論より無益、直樣この子を關所に連れ行き證據を見せんと、女の子の手を取り伴ひ行かんと爲すにぞ、兵左衛門今は兎角する時ならずと、腰なる刀をすらりと引拔き、無禮極まる下衆下郎と刀の脊にてさん／＼に馬方を打ければ、馬方は終に其の場に倒れ伏しぬ。この間にそと兵左衛門は、傍に戰く二人の子供を引立てゝ行ての道をとり急ぎぬ。刀の脊打に堪へやらず一時其の場に倒れたる馬方は、暫くありて起上り、この腹癒さでれくべきかと、其の儘關所に馳せつけて訴へけ樣、先程子供兩人を召つれて通りし浪人体の侍、一

の子は女なるを男の姿に作りかへて御役々を欺き、れ關所を破りしなり、下拙儕に證據を見屆けたれど、この由御注進に及ぶなり、早々捕手を向け給はゞ下拙御案内申さんと、言葉せはしく云ひけるにぞ、關所の役人大いに驚き、こは以ての外の珍事かな、如何にも其方儕に見屆けしと訴へ出づるからは、それに相違あるまじ、早速捕手を遣すべしとて、やがて同心、足輕等大勢にて兵左衞門の跡を追ひぬ。

さて兵左衞門は馬方を懲し丶後、只管に道を急ぎて行くところに、後の方より駈け來りし姿も似たる尾羽打ちからせし浪人、これも子供一人を引連れたりしが、兵左衞門に聲をかけ、いかに不破殿とは貴殿にや、拙者も旅の者にて、只今關所を通りしが、折しも其の處へ馬方の訴へ出でし容子を傍より承はれど、貴殿の連れられし御子息の一人は女なるを男と僞り、關所を破り通りしとて詰合の役人殊の外に取騷がれ、只今捕手を差向けらる丶樣子なり、まことにこれ貴殿の身にとり一大事に候ぞ、若しや馬方の訴へ通りに相違なくぞ御難澁の程れ察し申す、武士は相身互ひとやら、こ

によらぞ、及ぞずながらもれ助け申さん、包まず仔細を語られよと、最も懇に云ひ聞かすに、兵左衞門さ

は馬方の訴へしかと打ち驚き、且つはこの人、斯く

に言ふもの丶、これとても善か惡かは知るに由なし

胸を痛めしが、今は火急の折なれぞと心を定め、慇懃

に禮を返し、段々の御厚情身に餘りて辱なし、斯くな

りし上は何をか包み申さん、いかにも關所通行の手段

を厭ひ、娘を男の体に作りて欺き通りしと、一伍一什

を物語りぬ。

兩縣令競義婚孤女（四）

湘玉女史譯

却說、賈昌の老婆は、老公が家に在りて、石小姐と

とを作興を見て、心下好生樂まざれども、奈何ともす

べきやうなく、他かするに由せて、只肚の中にて腌

香問居たりけるが、老公が旅立てより三日目に至り、老婆はや家主母の勢を使ひ起して、茶が遲きとか、飯が晏きなど、小小の不是を題目となし、先づ厨下の了頭に、已が法を守らせん爲め、巴掌をもて連けざまに幾個も打ちて道ふ、賤人よ、你は我が手の內で錢を出して買ひ討たる者なるに、如何なれど恁地に托大るか、那の小主母の勢頭を恃みて、却て用心て我に伏侍ず、家長が家に在りし日は、你を縱に容し置きたるも、如今は家長も旅に出去りたれど、是よりは老娘の規矩に隨ふべきなり、老娘を除きて外に你が伏侍くべきものなし、他は飯を喫んとならば、自ら出でゝ擔ぶべく、你們より一々献勸るに及ばし、餘計のことして肝心の老娘の差使に事を缺ぐは不埒ならずやと打ち罵りたり、又この熱鬧を乘着とし、當直の的を喚過し、兼て買公の派下置たる別に一分の肉菜を買ふ錢をも來れ、以來は買ふに及ばずと命じたり、當直の的は何と爭ふべきやうもなけれど、言はるまゝに依ひけり。されど月香はこの淡薄き食物をも甘んじて少しも意に介けざりけれど、去ぞしは何事もなく打過ぎけるが、養娘はある日洗臉水を擔はんとしたるに、些しく遲れたるため、水はいつしか涼了たるゆゑ、養娘は覺えず哼了たるに、那の婆娘これをきゝて特地と叫び出で來り、發作て道ふ、這の水は全體你の擔びたるものならず、別の人が擔び來りて湯に燒たるものなるを、你は胡亂に使ひたる上つぶやくとは何事ぞ、當初個の婆の家に在りたるときは、那個が湯を燒きて你に臉を洗はしめたるかと、さも憎さげに罵られて、養娘も耐嘴不住、直に幾句の言語を回して道ふやう、イヤ外の人に水を擔ひ湯を燒かしめんとするにあらず、われ又自ら水を擔ふことを會り、兩隻手は也火も燒くことを會れど、下次は我自ら擔ひて自ら燒き、厨下の姐々に力氣ねどよろしからんといへり。かの婆娘は、養娘か水を擔ぶことを會るとの言語によりて以前の事を提醒し、便ち罵り道ふ、小賤人、你先に幾桶の水を擔ひ得

の子は女なるを男の姿に作りかへて御役々を欺き、れ關所を破りしなり、下拙慥に證據を見屆けたれぞ、この由御注進に及ぶなり、早々捕手を向け給はゞ下拙御案内申さんと、言葉せはしく云ひけるにぞ、關所の役人大いに驚き、こは以ての外の珍事かな、如何にも其方慥に見屆けしと訴へ出づるからは、それに相違あるまじ、早速捕手を遣すべしとて、やがて同心、足輕等大勢にて兵左衛門の跡を追ひぬ。

さて兵左衛門は馬方を懲し丶後、只管に道を急ぎて行くところに、後の方より馳け來りし姿も似たる尾羽打ちからせし浪人、これも子供一人を引連れたりしが、兵左衛門に聲をかけ、いかに不破殿とは貴殿にや、拙者も旅の者にて、只今關所を通りしが、折しも其の處へ馬方の訴へ出でし容子を傍より承はれぞ、貴殿の連れられし御子息の一人は女なるを男と僞り、關所を破り通りしとて詰合の役人殊の外に取騷がれ、只今捕手を差向けらる丶様子なり、まことにこれ貴殿の身にとり一大事に候ぞ、若しや馬方の訴へ通りに相違なくぞ、
御難澁の程れ察し申す、武士は相身互ひとやら、こと
によらぞ、及ぼずながらもれ助け申さん、包まず仔細
を語られよと、最も懇に云ひ聞かすに、兵左衛門さて
は馬方の訴へしかと打ち驚き、且つはこの人、斯く
に言ふもの丶、これとても善か惡かは知るに由なしと
胸を痛めしが、今は火急の折なれぞと心を定め、慇懃
に禮を返し、段々の御厚情身に餘りて辱なし、斯くな
りし上は何をか包み申さん、いかにも關所通行の手
を厭ひ、娘を男の体に作りて欺き通りしと、一伍
を物語りぬ。

兩縣令競義婚孤女（四）

湘玉女史譯

却說、賈昌の老婆は、老公が家に在りて、石小姐と養
とを作興を見て、心下好生樂まざれども、奈何ともす
べきやうなく、他かするに由せて、只肚の中にて腌

暮悶居たりけるが、老公が旅立てより三日目に至り、老婆ははや家主母の勢を使ひ起して、茶が遲きとか、飯が晏きなど、小小の不是を題目となし、先づ厨下の丫頭に、已が法を守らせん爲め、巴掌をもて連けざまに幾個も打ちて道ふ、賤人よ、你は我が手の内で錢を出して買ひ討たる者なるに、如何なれば恁地に托大るか、那の小主母の勢頭を恃みて、却て用心て我に伏侍ず、家長が家に在りし日は、你を縱に容し置きたるも、如今は家長も旅に出去りたれば、是よりは老娘の規矩に随ふべきなり、老娘を除きて外に你が伏侍くべきものなし、他は飯を喫んとならば、自ら出で丶擠ぶべく、你們より一々献勸るに及ばし、餘計のことして肝心の老娘の差使に事を缺ぐは不埒ならずやと打ち罵りたり、又この熱鬧を乘着とし、當直の的を喚過し、兼て買公の派下置たる別に一分の肉菜を買ふ錢をももち來れ、以來は買ふに及ぞずと命じたり、當直の的は何と爭ふべきやうもなければ、言はるま丶に依ひけり。されど月香はこの淡海き食物をも甘んじて少しも意に介けざりけれど、去ぞしは何事もなく打過ぎけるが、養娘はある日洗臉水を擠はんとしたるに、些しく遲れたるため、水はいつしか涼了たるゆゑ、養娘は覺えず哼了たるに、那の婆娘これをきゝて特地と叫び出で來り、發作て道ふ、這の水は全體你の擠びたるものならず、別の人が擠び來りて湯に燒たるものなるを、你は胡亂に使ひたる上つぶやくとは何事ぞ、當初你が波の家に在りたるときは、那個が湯を燒きて你に臉を洗はしめたるかと、さも憎さげに罵られて、養娘も耐不住、直に幾句の言語を回して道ふやう、イヤ外の人に水を擠ひ湯を燒かしめんとするにあらず、われ又自ら水を擠ふことを會り、兩隻手は也火も燒くことを會れど、下次は我自ら擠ひて自ら燒き、厨下の姐々に力氣ねぞよろしからんといへり。かの婆娘は、養娘が水を擠ぶことを會るとの言語によりて以前の事を提醒し、便ち罵り道ふ、小賤人、你先に幾桶の水を擠び得

たるが、那の時外邊にありて己が身分は水杯を擯びし事なきやうなる振りして、家長に哭き訴へ、それが爲に老娘は連累られて、百般の嘔氣に遭ひたり。今日老婆はその帳兒の差引算用せん、今你は水も擯び、火も燒くと言へり、よりてこの兩件事は都て交して倆が身上に盥かん每日常用の水は都て倆之を擯ぶべし、逃駆れ抔したり、又は懶ることとは許さぬぞ、火も亦都て倆燒くべし、若し柴足らざれど、老娘計較ぶべし、斯くして倆は倆の心意を知れる家長の家に回るを等ち、其時再び啼々哭々て、他に委細を告げ訴へなどそれにて便了、他が老娘を赶出し去らんとするも、老娘は決して怕れざるなりと、當下月香は房の中に在り、買婆が自己的の丁頭の爲に發作たることをきゝて、慌忙しく歩み來り、買婆の前に進みて萬福を唱へ、罪を謝し、彼れも此れも彼がわしきなり、買婆怒り怪みたまふなどわびけれど、養娘も亦道ふ、いかにも是婢子が心得違ひにて、今更何とも申譯もなし、只小姐の面に免せられて、この儘ゆるし給はりたし、那の老婆は之を聽きて、愈々怒を加へて道ふ、什麽の小姐、小姐小姐たらむ我家には來ぬ筈なり。われは是百姓の家なれど小姐とは什麽なる品級を持ちたる人なるか曉らす、你やゝもすれば小姐の名を把り來りて、老娘を壓つけんとすれど、老娘が骨氣は輕きとて人の壓量はうけぬ的なり。今日こそ明白に說き聞かさん、之を說けど小姐抔とは言はさぬ。原來大錢を費して討めたる的なれど、老娘は是主母なるに、買婆など叫ばれた義理なるかと罵りければ、月香は之を聽き、話不投機と思ひ、兩眼に淚を含著みて巳か房にそかへりける、夫より那の婆娘は廚下のものに吩附て、石小姐と呼ぶを許さず、月香と名を呼ばしめ、又養娘には只廚下にありて、專ら水を擯び、火を燒くことのみ管らしめて、月香の房中にゆくを許さず。月香若し飯を喫べんとする時は、他れ自ら廚房に出で來りて取るべしと。其夜丁頭を呼び養娘の破窩をば自巳が房中に搬了ぜせたり。月香は一

個更深るまで養娘を待ちたれども來らざれど、只得なく自ら門を閉ぢて睡り、又幾日を過しけるに、那婆娘は月香を房より喚出し從き、其際に了頭をして月香の房門を鎖さしめけり。月香は房を沒了しにより、只得なく外面にありて盤旋き、夜間は養娘と共に一の鋪のうちに睡り、而して月香が起出れは、婆娘は月香に、わの東西を拏り來れ、この東西を拏り來れと追使ふより、月香は恰も短き簷の下にわるが如く、怎て頭を低げざるを得ん、只得なく、伏低伏小はれけり。那の婆娘は月香が已に隨順ふを見て、心の中暗かに喜び、驀地他の房門の鎖を開きて、他の房中の物品を殘らず搬了て空となし、凡そ丈夫が心にかけて一向寄せ來りたる好絹好段の、仕立たると仕立ざるとを問はず、自己が箱籠の中に遷し藏め、被窩までも取 起 て他に還さざりけれど、月香は暗に叫苦ことに思ひたれども、敢て口に出さゞりけり。忽一日賈公の許より書信來り、之に添へて又許多の東西を寄せて石小姐に與へ、其書中老婆に囑付て云ふやうよく石小姐を看待れ、遠からず我も回るとの文言なり。かの婆娘は先づ其東西を收 起 て思ふやう、われかく石家の兩個の了頭を、賤婢とまで作したれど、丈夫回り來らど必然斷鬧を引起すべきも、難道我之を懼れん、老公重ねて新に彼奴を 奉 承はんとするも、さはさせじ。那の老亡人、かの兩個の瘦馬どもを何かに結束るかは知り難し、他れ行に臨みて、君し他の言語を守らざれど、夫妻の緣を切らんと道ひたれど、他れ什麼なる不良の心を起さんか、那の月香は臉嘴好き上に年も已に長けたれど、倘他を留むるの意わらど大事なり。那時に至り爭風喫醋をするも手遲れなり、人は遠き 慮 なければ近き憂ありとかきけど、一度とて二度とて惡しきことに變りなし、索性他の兩個をど遠方に賣去てん、のち老亡人回り來り、一たびは怪しみて斷鬧を引起さんが、是も一場限りにて、罷了ならん、如何にして又他等を贖ひ回すことを得ん、實に是好計、好計正是。

眼孔淺時無二大量一　心田偏ナル處有二奸謀一

執心

蓬生屋女史

有名なる書師池野大雅堂はげに其號に耻ぢぬ風雅豪放の人にて、幼きより穎敏、五歳にしてよく字を成し、一日黄檗山にのぼり、千呆禪師に謁し、席上楷書を大書し、寺僧の大に驚歎する所となれりとぞ。畫才もまた幼きより大にすぐれ、殊に志を注ぐ甚だ深く、生産を思はず、たゞ日々丹精をこらして他に念なく、好みて名山に遊び如何なる險阻の山も登らざるなく、如何なるれどろの奥かも極めざるはなく、而して登る毎、到る毎、千景萬勝悉く之を筆端に發しぬ。又去む〳〵富士山に登り、登る毎其の道をかへ、其の景を畫き、遂に富士の圖一百を作り、其奇狀、變態、實に古今畫工の及ばざる所なりとぞ。又白山、立山に登る、之れによりて三岳道人の號あり、大雅名をなしたる後てそは、人みな其書を稱し、はては百年の今日に至り萬金を費して其書を求むる者あれど、何事も名に買ふ世の人心、萬犬之を傳へぬ先きは誰れ一人之を云ふものなく、そのはじめ漢畫を學ぶや、扇子數十本に描き、美濃、尾張、近江にさまよひて自ら之を沽らんとすれど、買ふ人一人もあらぬに、大に歎息して瀨田橋を渡る時、わが道行はれず、命なり、聊か龍王を祭らんとて、其扇を悉く潮に投ぜしとなり。さむかりなりしかど、其の道を廢さず、いよ〳〵熱心に丹精を凝らしぬ。一夜盜人大雅の家に入り物を奪うて去りけるに、大雅たまたま睡り覺め、之を見、忽ち盜を呼び返し、取り去るべきものは數品あり、たゞその靑氈敗紙は我家の珍とする所取るべからず、其の餘は何を取り去るも意に任せよとの言葉に、盜もいたく感じたりとなり。金錢、重器、一をも惜まねど、その道のものは敗れたる紙一つをも費さゞりし此の一事にても其の畫に熱心なりし推して知られつべし。ある時の事なり、大雅浪華に遊び

けるに、大和屋某なる人、之を迎へて、其の暖簾に、大和屋の三字を書んことを乞ひぬ。大雅、乃ち之をうけひき、忽ち筆を執りてまづ大和の二字を書きけるが、折りしも春やよひ、軒の雀の千代と呼ぶ音ものどかなり。大雅何思ひけむ、忽ち筆を投じ、物をも云はずつと起つて外へ出でたり。主人はたゞ厠にだも行きしと思ひ居しに、久しうしても見えず、あまりに、長けれど、いぶかしみて人をして之を見せしめしかど、其處には居らず、心當りを其處此處と尋ねまはりしかど何處へ行きけむ、影だも見えず如何せしことぞと思ひゐるに、數日を經て、大雅ふと歸りたり。主人如何にも不思議に思ひて、



之を問ひしに、はじめ筆を執りて大和の字を下したりしに芳野山の櫻花、まさに盛りならん、好機失ひて、あたら櫻わたに散らしてはと思ひしゆゑに、假に去りて彼處に遊びたり。幸に期に遲れず、願さま見ゐぬ。今こそ前約を果すべしとて、乃ち筆を執りて、屋の字を追書して去りたりとぞ。げにをかしき物語り、かやうに熱心にてこそ初て大雅堂其の名聲をなしたるなれ。

笠子笑談集

金津常十郎

穴爭ひ

儒道を學ぶものは皆々四角な穴をほりて住居とし、又神道を學ぶものはいづれも三角な穴をほりて住居とし、佛道を學ぶものは人々まんまるな穴をほりて住居とす。そこで儒道の者どうしが寄合ては、ともぐ\我穴の四角なのが天地の理で、外の穴は異端じやと笑ふ。神道どうしが集りては、天地人の三ッを以て三角こそ理の當然じや、其人といふは、天の浮橋のうへで、
杜の神が陰陽和合して、その陽と陰とは火と水との謂れで、人を訓して火水といふ。それから起りた皆人
と、互にやかましく、儒道は偏屈で、佛道はいつけ
じやのとそしりあひ。又佛道の者は、いやぐ\丸きが本道故、まづ天窓からまるめて、それから九き蓮花にのこるが大事と、一心不亂、其信心の中から、外の
までせわやきて、儒道や神道の穴は、只此世の假令
がりで、後世志らぬ皆哀れな衆じやと涕をこぼして
りあひ、どれもかも皆わが穴に吸ひこまれて、ちよ
とも外の穴はのぞいて見た事もないから、皆わが穴のみのひいきなり。それゆゑ、其道々の元祖だちが、
ついによろこびて、一首やられた、

道々にめでたく迷ふ十種香の
　釋迦も孔子もきやらぐ\わらひ

註に曰、人皆其敎の道具だての名や形に迷を起す、そこで互に名や形が差ふて居るゆゑ、自分自分が

方むかりの道具だてを本道と思ひて爭を起すなり。どの道も行きぬけてさへしまへば、人々同じ處へ出で對面することは知らず、其行きぬけもせぬ闇き穴蔵に居ながら爭をなすは、さりとは氣の毒なありさまなり。愚ても見たがよい何ゆゑ其道々の敎か差ふといへど、元より其道道の元祖だちが、皆自分の心任せに敎を拵れた物ゆゑ、人々思ひつきも違ふから、そこで其敎方が差ふはずのことなり。故に敎はどの道にても、偏よりたる物なれども、其偏よりたる道を行きぬけさせて、無垢の處へ出さそうと云元祖だちの工夫なり。此敎と云ものがないと、生知安行の人は格別、凡夫は其敎に從ひて居ねばならぬなり。其敎の道を行きぬけることのできぬ人々は、隨分どの道なりとも、大事に其道の敎を守りて、外の道と爭をせぬが肝要なり。世俗の人、其道を進みはせず中途にうろついて居るから、其中途の作り道を誠と思ふゆゑ、外の作り道を見れば、わが居る道に差ふ

から、皆外の道は僞にて、吾道は誠と思ふも尤なり又同じことにて、外の作り道に迷て居る衆生は、又く々吾道ぞから誠にて、外の道は僞と思ふなり。それゆゑ、人々爭が出來る筈のことなり。そんな迷の者どもの爭を、高より見て居らるゝ御人々は、さぞやをかしく思ひたまふべし。然れども、世上あまたの俗輩を、其道々の敎にはやりこませて、心から誠にさせて置かねば、世は治まらぬなり。いづれの敎も、惡をせよと云敎はなく、皆善に導くの手だてなり。

笠子笑談集大尾

後序

一日晴に乘じ、節を引て我友宮井白鶴子の庵を訪ふ、談終て主人一書を出して示す、取て是を見れば、笠子山人の談話を集て、主人又是に註をくはふ。つらつら是をよめど、頤垂て飴の如く、臍よれて糸の如し。我いまだ山人と相見らずといへども、けふ此書を味へば、其甘き事蜜のごとく、心中忽ち涼々たり。あゝ此人の

胸中、夫たれか是を探り得ん。此書たるや、一度見ればぞ眼爲に解け、二度聞けば耳爲に解け、三度是を服すればぞ體共に解けて終に形名のある處をしらず。故に渾沌忽ち蘇生して、倏外け、忽走る。あゝ得たり山人は夫何人ぞ。あゝそれ何人ぞや。

文政六年三月　鵬洲老人誌

梅の下風（十三）

白魚女史

雨降つて地固まり、風吹いて雲晴る。馮司が風雨のいためかたに流石心よき百姓たちもあまりと怒りてあらなみたちたる後は夕立のあとなく蟬のもろごゑかしかましきまで傳吉の莊屋となれるをよろこび、彼方にても野ら聲ふり立てうはさすれど、此方には涙ながら語る。なあ太平さん、お前は何と思ふ、己ら此度の庄屋さんはど己らあとてあとをも語らず、六十の耄老の涙にむせぶを、何だへ、安兵衛さん、お前また息子ぶく

と喧嘩さやしやれてか、そして莊屋どんが片れとしの仕置でもされてか、さう云ふ事はない筈やつはり聞く方の心がわるかんべとすく手をやめて太平のいらへぞ聞くより、安兵衛は目を見はり、醬油で煮染し如手拭で、顔中ぬぐひ、どうして〳〵太平さんまあ聞かつしれと又涙にちちなきさを、田舍者の聞く人も氣長く、ウン聞くよう、語らつしやれと、肥桶の上に腰ぶつさりとれろし、火の用心としるしある腰の袋より火打道具を出してかち〳〵と煙草に火をうつすを、安兵衛もまた人まね、こまぬ、酒屋の猫のごとく煙管に烟草をつけ、火をうつしもらひて、太平さんウン安兵衛さん、それからどうしたい、今の話しは、ウン今語るよ、聞かつしやれな、己らが所の不孝息子な、あの不孝めがな肝心の所また涙、こほん〳〵と咳にさへむせて、又十五分、それがなあ、太平どん不孝者奴が、どほん〳〵〳〵、不孝者が此頃はいたい孝行、今日も出



てくるに、己らをいたはりて、れらが仕事に出れど、はやく歸らしやれ、夜は腰をさすらう、腕揉うと、早く死ねよがしにした奴がうつて代はつての孝行れらうれしくて、勿體ないやうに覺ゑて、これも〳〵庄屋さんのおかげと、手を合せど聞く者もらちなく、共にむせびて、ほんとうによい庄屋、してどうして、庄屋のそれがれ蔭げかと本も末もしらぬ先きよりはや感涙。どうしてつて、マー聞かつしやれ、此の間あの不孝息、子いやもう今日では孝行息子が莊屋どんの處へ行つ、て已らが事をくそ叩くやうに云つたときゝなされ。そうすると、庄屋どんはナ、ナ、ナ、ナ、何ともいはずに涙にむせむつしやれてナ、ナ、己らあ、自分の事で、かう涙が出るだわけど、人の親の事惡く云つたつて、聞いたつて何でナ、涙が出るかい、それを莊屋どんは、つく〴〵と泣かつしやれてよ、己らが息子も、おやしく、何となく感じて、ゝ其のゝ、ナ、ナゼ泣くだへと、キ、キ、聞くとのう、に庭の鷄のひよつこに親がものを遣りをるを指して、あれあのやうに親は子を大切にして育て、昨日一羽ひよこが死んだら、そらもう親が悲しがつて〳〵、腹で暖ためて見たり、足でわこして見たりして、涙こそこぼさね悲しみ泣きに聲立てゝ其の日は一日箱より外に出なかつた、鳥でさへ子を思ふこゝろはさやうなり、まして人間、人間が子を思ふ親心はどがいだい、己らあ其の親に孝行することができなかつたがくやしい、口惜しい、鳥でさへ反哺の孝は知るものをとてい、い、い、かあい涙、わかみさんも泣かつしやれど己らが所の息子もか、か、感心して、内へ馳け歸へつて、父さん、誠に惡るかつたと平たくなつてのわ、わ、わ、わび言、ア、ア、れ前聞かつしやても、そむなに泣かつしやるではないか、己らが、其のはなしを、む、む、息子が語つた時の心はどうだい、勿体なくつて、勿体なくつて、目もつぶれるかと思ふたかりの涙も出で、止めどがなかつた、しても、庄屋さん御夫婦は、ほんとに有り難い、神様だつて、佛さか

だつてお釋迦さまだつて、日蓮さまだつて、孔子さま
だつて、あゝ息子を教へ、改心させることは出來さつ
しやるまいにと、うれし涙に田の面もしめるばかり。
己らにもいゝ教育になつた、ほんとに有りがたい、そ
れから己らもおふくろを大事にしよう。ほんにさつし
やれよ、どれ大きにひまどつた、早く鋤いて少しも息
子が手助けをしやうよ。己らもみいしみてはやく歸つ
て、おふくろが脊中でもさすらうよと、互みに分つ袂
のどけき春風、とことゞに鳴く烏ののどかげなる聲に
反哺の孝、よくさつしやれと、二人とも、思はず空をな
がめぬ。上の心に下從ふ、皆孝を尊び、善をよろこび、
民みな厚きに歸して、一人そしるものなく、皆傳吉を
よろこびはやしぬ。

立身出世をよろこぶは世の人の情、傳吉身を立て、父
祖の家を起し、地を取返し、庄屋にさへ押し強ひられ
ぬる、さぞかりはよろこぶらむと思ひの外、世はたゞ
叔父の不義を憎みて、其の人を憎まず、あはれ時のま
ちがひ、心に魔のさせしならむ。心あらたまらで、今
の役かへしてもとに据ゑましと思へど、妻女は心よく
中にも、幼きより母の心をよく知りたり。其の友を目
て其の人を知るとか、叔父御とて、かの伯母御を妻と
せらるゝ上は心もすきて見えぬ。決して心を改められ
ん人ならず、たゞ己が不義は悔やまで我が夫を恨み居
らるゝならむ、小人閑居して惡をなす、如何なる事を
かもすやもと、之も又なか/\に傳吉が村中に立てら
るゝをあやふき事と、心にもまなく思へど、折りふし
毎に口にも出しぬ。

春の夜の夢心地もあしからぬに、お專はつねよりも一
入かの事の心にかゝり、叔父夫婦が心の中思へど思ふ
ほどあさましう、おそろしう春の夜の手枕なれど、身
にしみ/\と冷え入りて、夜もすがらいもねず彼へ
枕を代へ、此方へ向き、展轉反側、心をわざとまろ
さむとすれど、まろぞす、はてはえ堪へで、夫を見ま
して、明日にも役を捨てさせむと思ひ、起きて樣子を

伺へば、傳吉は如何にもうまひ靜かなるに、女のさがしう、心耻かしくて、其のまゝ我とわが心を靜め、又臥して幾更、流石思ひねにふとまどろめば、父が母をうちたる時のおもかげ見えて悲しく、あはやと云ひざま押しとゞめて、父がかひなを泣く〳〵なづると思へば、お專〳〵と呼ぶ音答へんとするほどもあらず、又や父の聲、姿もあり〳〵屹度彼方をうち見やり、憎くや乞食尼め、巳れを此のさまになして、又孝子孝女を害せむとするか、何處まで毒手を振はんとする、憎くや一太刀をとて、立たぬ腰をもみつ〳〵して、お早母子を引き摑まんとするに、あはやと驚ろき聲たつれば、お專何としつる、何をうなされてぞと夫の呼ぶねにおどろけむ霞をわけてかへる雁の音おぼろなり。





栽菊　東久世通禧

靜かなる秋のものともみえぬまで
　うゑかざりたるむらきくの花

窓落葉　津輕承昭

ひえ鳥のこゑさわがしき山まどに
　絶えずおちばのおとをきくかな

海眺望　松浦詮

武藏のうみ海さちあれやあま小舟
　すぞのはまべに競ひよるみゆ

秋山路　前田利鬯

にしききて賤も家路にかへるなり
　紅葉かつちるあきのやまこえ

毎夜聞鹿　竹屋光昭

奥山のもみちもふかくそめつらん
よなよな鹿のこゑそきこゆる

暮秋虫　諏訪忠元

いとゝしく哀れぞふかく聞ゆなる
秋もすゑ野にすたくむしのね

池邊菊　宮地殿夫

池水のそこにも千代の色みせて
にはふきしねの白きくのはな

山路落葉　鎌田正夫

もみぢのちりてながるゝ谷川の
岩根つたひにゆくやまぢかな

紅葉隔水　千葉胤明

水鳥もかなたのきしにつどひけり
もみぢのかけや嬉しかるらん

籬菊　大口鯛二

朝月夜のこるまがきのきくみれば
またゝるばかり露ぞおきたる

夜落葉　岩崎勝従

窓ちかくはらはら音のきこゆるは
よかせにさわぐ木のはなりけり

月下野行　藤井行麿

虫のこゑ月もさやけき野邊ゆけば
我がこゝろさへ空にすみけり

擣衣　大畑弘國

とね川のあしまに月のかけふけて
かとりをとめがころも打なり

山家經年　三浦千春

わが山にゆきてはかへる雲をのみ
おくりむかへて幾世へぬらむ

初時雨　三輪義方

あさな〳〵うたてくもると思ひしは
早くしぐるゝ空にぞありける

青山延于の母　佐々豐水

たまがきの内田の刀自が心もちて

わを山をこそつくりたてけれ

天長節　仝

天皇の生まし丶日を日のみはた
たて丶ぞいはふ天の　すひと

今年より三十五年むかし長門國にことありて出陣せし時したがひゆきし舊臣堤喜三郎が身まかりけるころよめる歌　仝

うみをなす長門の國のながかれと
契りしものをいづちいにけむ

もろともに企救の濱邊の露の上に
まろねせしよぞ偲ばれにける

伊勢　赤松景福

いせのあまの舟はしらねど言葉の
海にぞいまも名はながれける

月　草野隆道

豐かなる御代の秋とてればぞらの
つきにもさはる雲やなからん

生徒　島宮太郎

たちならぶ文のはやしの小松こそ
やがても國のはしらなるらめ

落葉　光岡正彰

かぜをいたみ紅葉の錦ちりしきて
ふま丶く惜くれもはゆるかな

勅語奉讀式のむしろに列なりて　足立正枝

天皇のおほみことのりかしこみて
あふげよ今日の大みことのり

天橋立　木庭芳香

神のわざあとさへさやに見ゆる哉
かけわたしたる天のはしたて

旅行友　伊東祐賢

たびごろも袖ひきはへて行く道の
友こそことにしたしかりけれ

題世人　安齋篤敬

行末をれもへむぬるゝたもとかな
草木むかりのつゆにわらぬむ

杜紅葉　近衛貞子

木枯のさそふものとも見ぬかな
そめつくしたる杜のもみぢは

國旗　蜂須賀隨子

わが國のみはたにうつす朝日かげ
光いたらぬくまなかりけり

松間時雨　柳原愛子

松かげは落るしづくにむら志ぐれ
はれても笠はとられさりけり

落葉聲　小池道子

風絶しあしたのにはにふたつ三つ
ちりそめにけり軒のもみぢ葉

月照落葉　北島以登子

紅葉のちるかげ見ねてさゆる夜の
つきは枯木にかゝりけるかな

月夜に船てくかた　佐藤艶子

久かたのつきやみるらんすみ田川
わたしもやらてうかふ小舟は

烟草　日野西廣子

中々にことわざしげきをりにこそ
しひてたむこは吸まほしかれ

異郷月　諏訪晴子

こと國にゆきても月のさやけさは
わか日の本にかはらさりけり

曉紅葉　坂田泰子

あかつきの露のしたゝるもみぢはに
朝日のさすをまちわたるかな

野逕霜　常磐井文子

里ひとのかよふ野道のあさしもは
ひのいてぬまに消はてにけり

菊礎　服部磯子

御園生の菊のさかりになりぬらん
みかきのかぜも香に匂ひけり

紅葉深　安東菊子

山の名はうすひといへど秋ふかく
そめ盡したる木々のもみぢは

山家の歌の中に　海上壽子

わびしらに猿猴なくなり世の中の
うきことしらぬ山かげにして

秋田家　土岐幾子

山田もる賤かうき身はなれつゝも
秋としいへどさびしかるらむ

夕鹿　足立三尾子

さらぬだにかなしき秋の夕ぐれに
つまとふ鹿のこゑきこゆなり

有住齊(號柞園)翁みうせぬるをいたみて

翁のみまかり給ひし夜　小林眞子

限りあることよひ一夜をいかにして
つかへまつらんあはれ一夜を　石井泰次郎

み敎をまつのみどりこうちすてゝ
はゝその紅葉またきにぞある

皇國のためあれはも惜む人はもよ
人のためにをきみをしむらむ

世れしなべて菊の遊する秋にあひて
千代もといのりし翁うしなひぬ　十川あさ子

國のため千代もと祈るかひもなく
かへらぬみちに君いでましぬ

辞世の詠歌を見はべりて　中山櫻峯

言の葉はあとの千代まで殘るとも
ちりにし花ぞはかなかりける　娘　常子

かねてよりかくとはしれど今更に

[illegible]は今日の別れなりけり

孫　鍈　子

海山にうけしめぐみのはしをだに
返しもおへずけふのわかれ路

谷田陸軍中央幼年學校長、堀井東京陸軍地方幼年學校長の送別の宴に　下田義天類

立ちかはる時になりぬと、初雁にあとをゆづりて、燕のゆくをしみれど、育てこし雛をあともひ、その親とさきにもたゝず、その子等とあとにも捨てず、諸共につゞさ列ねて、たのしげに軒端はなれぬ、つゞくらのむれにもあらず、初雁の友ならなくに、年まねくはぐゝみたてし、武夫のますらたけをの、うなゐこのうなゐはなりを、中ぞらに見捨てたまひてその親とたのみし人の、二人まで袖うち列ね秋霧の立ちのまかひに、立ち別れゆくをし見れど、大君のまけのまに〳〵、ますらをはゆくとふものと、かねてより聞きてはあれど、早くより言ひてはあれど、しかすがにわれもひ迷はれ、世の常は眼にもとゞめぬ、つゞくらのむれをさへこそうらやまれけれ。

別るともつゞめなりせぞ花さかむ、春はふたひととひこむものを。

里の小山　　れきつとり

頃は夕暮のほどにてありき。例のわが舊知已なる小山にとのぼりゆきぬ。むかしを思ひ出でむとてなりけり。むかひは渺洋たる海原遠く見渡され、うしろは連延たる峯長くたゝなはれり。さゝやかなる吾が村里は即ちその間にはたがれるなり。波かゝる磯、鷗ねむる小島はこゝよりみさぐれぞ、すべて一眸の内にちゞめられて、さながら吾には心染みたる畫のなくなれるを再見出でたらむやうなり。宜なり。こゝをは常に歸省の樂の内の一つにかぞへれくことは。松の根の見覺ねある所にすわれぞ、石もこけも自しとねとなりて侍せり。眼を仰ぐれは、沖に横はれる雲の濃かりしは、何時の

ほどにかわらむ、れはろにたなびきて、空とればゆるわたりにも、白帆とみゆるが、二點三點ぞかり現はれたる、吾がむかしの友なりし人の父の船も雜るらし。やう〳〵傾きたる日陰の木の間よりもれて吾が肩を過ぎ、二きだぞかり前に彩りたるわかね、いはむ方なく艶なり。ふりかへれぞ、少しまぞゆき山の端には、帶の如く引きはへたる霞の山の中らを立きり薄れて、又あだし山に現れたる身もゆるぐ心地す。少し下りたる杣に音するものあり。配るともなく見やれぞ、ことでとく頭ふりつゝ、三步ぞかり先にくるものあり。萩の枯枝をくゞるを見れぞ雉の雌なり。見ざるまねしてなれどろきそ。をかしの物やとてこよかし。慣れもせよと念ずるをりしも、人ありとや知りけむ。少し傾けながら、羽たゝきわはだゝしく谷をへだてたるかなたの山に飜ひさがりぬ。手の物とられたらむやうなり。自失しながら目を轉ずれぞ、何時のまに何物のなしたる奇功ならむ。海原は橫に限りもなくよぞみ渡りて、水と空とはきは〳〵しきまで、一は濃く一は淡紫の色をなしたるに、夕陽を帶びたる白帆のきら〳〵として、水にもその影のほのみゑたる浦にこそ、花も紅葉もとだにぞいはまほしき。あはれ昔は、吾もこゝにてこそ人となりしか。里の故老が、われに、など故里を見捨てしぞといひてなじりけるはゆゑありけりな。吾はけに久しく他鄕にのみありけり。諸共に下り行く柴刈をとめの名を知らぬも吾からにこそ。

雜報



●大御いでまし　大元帥陛下には、去し十三日、都をたゝせ給ひ、新橋より、滊車にめさせ給ひて、大演習地へ、いでまさせ給へり。かくて、皇后宮陛下には、御ともにたゝせ給ひて、新橋まで、奉送し給へり。

●降誕　閑院宮載仁親王殿下の妃智惠子殿下は、去

し二日、王女を生ませ給ひ、御名をば、季子とつけ給へりとぞ。

●御患　小松若宮依仁親王殿下の御息所は、去し七日、腎臓病にかゝらせ給ひ、八日には、いよ／＼重らせ給ひて、御熱度も、四十二度にのぼらせ給ひしかど、大宮殿下をはじめ奉り、御親族までも、厚く、御看護せさせられ、御醫師には、ベルツ博士西鄕醫學士等、たゆまず看護し奉れりとぞ。

●孝貞　羽後の秋田市に、渡邊みね女といへる婦あり、今より、七八年さきに、夫は、にげうせて、行方も知れぬに、姑に孝養おこたりなく、又、幼兒二人をはぐゝみながら、家計をとゝのへ、女の手一つに今日をすぐすが、いとあはれなりとて、見るもの、聞くもの、感賞せざるはなしといふ。

●又　これも、いとよく似たり。伊豫の國、宇和島なる高滿寺村の人、菊地忠次が妻に、とよ女といへるがあり。去し明治廿三年、夫忠次に死に別れてよりは、

七十路に餘れる老姑を奉養し、二人の幼兒をおほした
てつゝ、わが手一つに、家を保つとぞ。これも近鄕、感
せさるはなしといふ。

●孝女　羽前の山形市に、寺庭やす女といへる少女あり。幼くて、父にわかれ、兄を隆賢といへるが、これは、衣食のために、今に十餘年が間、他鄕にあり
す女ひとり、起居もまゝならぬ老母を奉養しあけくれおこたらずといふ。されど、其の名、近隣にたかく、一市みな、子女をいましむるに「かの寺庭のやす女を見ずや」とて、をしへ草とすとぞ。感ずべき少女なり

●烈婦　こは、新領地臺灣にてのことなり。烈は
とより烈にして、婦たりとも、かゝる意氣なくてやはあるべき。さはあれども、國におきてあれど、如何な
かり堪ふまじき怨ありとも、みだりに人を殺すはよからず。今はたゞ、其の烈を稱するのみなり。臺南縣の土人に、李春といへる人あり。妻を潘招といへり。李春、或日、山に入りて、木こりてありけるを、生蕃

て、其の首を斬りてけり、藩招、家にありて、其の夜は、待ち明しつれど、歸り來ねど、翌日、近隣の人を伴なひ、山に分け入りて、さがし求めて、辛じて、其のなきがらを得たり。時に、生蕃、男二人、女一人、合せて、三人打ち連れて來たるを、藩招、まづ、鎌もて、其の女を斬り、やがて、殘れる二人をも、擊ちて、仇をむくい、さて、夫のなきがらを運び歸りて、之を葬り、墓前に、仇の首三を供へて、夫の靈を慰めきとぞ。貞烈感ずるにたへたり。

●孝子　陸中の國に、阿部忠平とて、今年十八歳なるがあり。篤疾の父、癈疾の母、兄、叔母をも、扶持奉養おろそかならぬ事、こゝに八年が間なり。縣知事きゝて、褒賞して、金五圓を賜へりとぞ。

●母子再會　當時、大阪、高津、四番丁に住める澤村いち女といへるは、今年六十三歳なり。もと、岡山縣、邑久郡、牛窓村の人にて、淸七といへる人の妻なり。昔は、足らぬ事もなくて、過しゝが、十四五年以前、夫淸七とゝもに、大阪にうつり住み、堂島の米相場をすまひて、少なからぬ損失をうけ、一度ならず二度まで、利なくして、資產、殆、空しくなれり。かくて、淸七はいたく憂ひて、遂には病にをかされ、八年以前、空しき人となりぬ。いち女、夫に後れて、せんすべもなく、人にやとはれて、洗濯などして、辛くも今日を過しけり。こゝに、二人いまだ、故鄕にありけるころ、子一人ありけり。名を健次といひしが、廿二三歳の頃、修學にとて、東京にのぼれり。かくて、淸七なくなりてよりは、學資を得んすべもなければ、知人をたよりて、英國の汽船、シナー、オブ、チャイナ號に、靴磨にやとはれ、日本、支那の近海を航しありてけるが、この間に、外國語にも通じたりければ、こたびは、香港にとゞまりて、英國商人、オヽガスチンといへる人にやとはれて、年ごろを過せり。さて、今は、資金も、よきほどに積みたれど、いでや、故鄕にかへりて、父母の安否を問はゞやとて、立かへり、か

の岡山の牛窓の里に到れど、我が家は、昔のすがたならず。父は、はやくみうせ、母はなほ後れ居て、大阪にありと聞けど、何處をそこととも、たしかならねど、消ゑなんどかゝり、心をおとしゝが、かくてあるべきにあらねどとて、再、大阪に到り、此處、彼處とさがしもとめしかど、遂に尋ねわてゝ、十七年がほどにて、始めて、再會し、母子ともに、夢心地してよろこびしといふ。親子の情、さもありけんかし。

●一家五夫婦　は、いと稀なり。まして、睦しく、今日を送るをや。北海道、根室に、成田伊三郎といへる人あり。祖父、父、弟二人と、合せて、一家五夫婦なり。常に、いと睦しくして、曾て、家に波風のたちしことなく、一夫婦毎に、各、受持を定めて、家業を勵めど、子孫のふゑ廣がるにつれて、資産も亦、増殖すといふ。諺に、笑ふ門には福來るともいへり。

●奇特　の人もありけり。かの陸中と羽後との國さかひに、仙岩峠といへるところあり。この頂に、二十年を經て、住める老夫婦あり。共に、年、八十歳に餘れども、身すこやかなること、壯者にをとらず。常に、こゝに居て、雪中、行旅の人を救ふを以て、こよなき樂とすといふ。かくて、これが爲に救はれて、命を助かりしもの、七十餘人の多きに及べりといふ。

●老教師　福井縣、織田村の小學校に、林詮といへる教師あり。今年六十餘歳なるが、明治の初より、教育に從事し、實踐躬行、幼童を導しかど、この一村は、兒童の氣風、他とことなりといふ。凡、教師は、かくあらまほしくこそ。

●生徒の鑑　仙臺市なる高等小學校の生徒に、森まつ女といへるがあり。課業を終へて、歸る途に、一人の乞食、嬰兒を捨てゝ去らんとするを見、何故ぞと問へるに、乞食、この嬰兒の母は、産みおとして間もなく、にげて行方を知らねど、せんすべもなくて、辛じて、乳飲器をあがなひ得つれど、こをさへ童子等の爲に、打ち碎かれぬれど、今は、養ふに道なくて、捨て

んと思ふなり」といふを、いとあはれがりて、直に、家にかへり、父母に乞ひて、乳飲器を購ひて、之を與へきとぞ。

●又　信州、北佐久郡、春日村の人、河井市次郎といへるは、男女三人の子を持てり。この三人、ともに、一里ばかりを隔てたる學校に通學するに、一日も欠席せしことなく、學業も、亦、成蹟優等にして、常に、級の首席を占むといふ。かくて、又、家にかへれど、三兄相携へて、山に入り、薪をこりて、家計を助くとぞ。いと感ずべし。

●おとにきく高師の濱　は、かくれもなき泉州の名所なり。この濱に、年ふる松の數多おひたてるを、前に、子爵稅所篤氏、堺縣の令たりしころ、士族授産の爲にとて、悉、きりたふさんとしけり。時に、大久保内務卿、(利通公)たま〳〵、こゝに遊びて、この事を聞き、こは心なきわざなり、とて、和歌一首を詠み出で、子爵に示せけるに、子爵も、亦、かへしよみて、遂に、この事やみにき。かくて、こたび、こゝの濱は、公園地となりたれど、この事を、松の千歳にのこさむやとて、名にちなめる松方伯爵、西村捨三氏をはじめて、有志の人々、相謀りて、碑をたつべしとぞ。碑の表面には、大久保公の歌を、松方伯みづからかきつけ、裏には、稅所子爵の文をゑりつくべしといふ。その歌、この文。

大久保公の歌

おとにきく高師の濱のはま松も
世のあた波はのかれざりけり

(稅所篤氏の文)

こはいにし明治六とせの夏の夕つかた大久保利通の君と高師のはまみんとてやとりをいてゝはまの石に腰うちかけ四方のけしきみわたすほと松の林のなかはきりたるをみていかなる故にかといはるゝに近き頃士族授産の爲にとてはらひ下けたるなりとこたへけれはそはけしかることかなかゝる名所の松の數百歲經たらんをこと〳〵くきりはらはんはまことになさけなきわさなりこゝのつかさとあるもの心なしと

や云はんとてた丶ふ紙とうて丶書かれたる歌也れのれもとりあへす

いかにせんたかねれろしのはけしさに
　　なみたふるひしをの丶えそこれ

といらへしてけれは何はとまれ明日よりはこの事やめさせてよ京にかへらんのちともかくもすへしとあるにやかてそをと丶めたりき今殘りたるはまたくかの君のたまものといひつへしこのよし石にしるして後世に傳へんとて一言しるしてよとす丶むる人のあるにまかせつたなきれのかかへしのことの葉さへありのま丶にかきしるせるはさきにこの縣に介たりしちなみあれはなりけり

明治三十一年十月　子爵　税所　篤

●紀念碑　かの世に聞えたる久留米絣は、寛政十一二年のころ、井上でん女が十二三歳の時、はじめて、織り出でたるなり。(當時、でん女は、筑後の國、御井郡、久留米通外町に住めりき。明治二年四月廿六日歿す。年、八十二。なほ、委しくは、本誌第九十號、漫錄欄、四十三頁を參照すべし。)かくて、今は、一ヶ年の產額二百萬圓餘に上れりとぞ。されど、福岡縣、久留米市の有志者、相謀り、千餘金を醵集し、そこの名產の鼻祖井上でん女が紀念碑を建てつといふ。かくて、其の績と名とは、其の名產と共に、萬世の後までも、たえせざらまし。

●稀有のことなり。兵庫縣、西庄村といふ處に、姙婦七人ありけるが、みな同し時に、子うめり。其の內、一人は、三つ兒を產み、六人は、みな、双兒を產めりとぞ。さて、思へど、母親七人にて、嬰兒十五人を產るなりけり。

●似つかぬ文　れよそ、知事、村長などいへど、たかきひき丶の別こそあれ、何れも、人の頭たるべき司なり。されど、其の司人は、れの〳〵、ふさはしき識あるべきは、いはでもの事なり。文かくに巧拙はあることながら、か丶るはすくなかるべし。下野とのみき丶て、他は、皆、もらしつ。そこに、小學校建築落成式を行へるに、知事臨みて、祝文をよみあげ丶れど、村

長、また、答辭を述べたりといふ。その文の一節をぬき出で、掲ぐれど

知事祝文の一節

校舍の新なるは猶衣服の新なるが如く部室の區劃整然たるは猶矜壁の折條稜々たるが如き乎是實に本村の面目と謂ふべし

村長答辭の一節

碧天高く萬馬肥ゆ氣宇愈壯快成本日縣知事代理官並に郡官諸君親しく御賁臨あらせられ本村尋常高等小學校の典を擧行せらるる誠に本村の光榮なりと云はざるを得ず加之將來に於ける教育上進路に向ひ懇篤なる諭辭を賜ふす感泣激切の至りに堪へざるなり

●女子職業學校（東京神田にあり）の卒業生は、去し十三日、校友會をもよほせり。時に、裁縫、刺繍、編物、造花、圖畫等、れの／＼製れる品々を、抽籤法にて、（一本金二十錢）來賓の人々に購求を請ひしが、其の代金をぞ、悉、校舍新築費償還の資に充つべしといふ。

●有住齋翁みうせぬ　翁、やみて、久しく、ふしどにありしが、終に、去し二日、なき人の數に入りぬ。いと惜しかぎりなり。翁は、本邦の故實禮節にくはしく、かねて、和漢の學に通ぜられたり。業を門に受けしもの多く、著書も、亦、すくなからず。かくて門人等、相はかり、翁の遺志をつぎて、柞園女塾とを麻布永坂町にたてして、生徒を教授すといふ。今、翁の畧傳を得たれど、

有住齋翁畧傳

翁は、奥州白河阿部侯の藩士にして、有住治右衛門の子なり。鐐助、勝積、後、齋と改む。和漢の學に通せり

人生の所業は、一二に止まらず。又、人々好惡あり上中下の生限ありて、窮りなきは言ふまでもなけれど、予弱年の昔、舊藩に關四郎兵衛と云ふ老人ありて、平生教訓ありし一語の耳に止れるは、人一藝を熟知する時は、假令、無道の世に當るとも捨らるゝ事なし。無藝大食は採用する者なしと。金言と覺えて、古實禮節の門に入り、數年困苦すれども、其の域遠くして到り難し。されども途中にして是を捨てなむ、又何藝をか固有の業とせん。所詮生涯を一業にゆだねてれくらむやとれもひ、今日迄も執心の業さまさず從事せしが、師とたのみたるものは皆口口口の塵と成り、又此の道に從事するものなく、諸... 萬端の問答、多く老衰の身を以て、之に相對する... うき口口、、、、事いさゝかも語り置まく云々と、晩年に述懷せられき。松岡大人の門弟大脇普輔...

世の門に入りて、故實禮節を治め、嘉永五壬子年、二十二歳の時、初免狀を得、次で、安政七庚申年、嘉禮免狀を受けしより、愈々、斯道講究の志を堅くし、古今の書籍を渉獵して、一身を顧ざりき。東都に登りては、雙松亭松岡氏の門に遊べり。後、其の師範を托せらるゝに至れりしは、實に、歳、四十五歳の時なり。本邦禮節の大義を解釋せんとして、かくて、先、記、紀、萬葉より、國史、律令を初め、物語書、雜書をも、通覧考證して、益々、力を盡さんとし、晩年に及ぶまで、猶、筆を閣かざりしが、病の犯す所となりて、言語訥澁、共に、意の如くならざること、三年。終に、明治卅一年、十一月二日、麻布永坂の家に沒せられぬ。年八十八。麻布櫻田町、大法寺に葬る。六十五歳の時、わが墓碑に、きさめよとてよめる歌

わか世既に終らんとする時

花をめて風をあはれふわたゆめの
　さむれは西に月かたふきぬ

門下に、敎を受たる人、其の名、世に聞えたる者れはし。

著書の最、世に行はるゝは、類聚婚禮式、女禮式と婚禮法等なり。又、遺稿中には、〇類聚祝之書〇類聚産所式〇類聚丁年式〇故實禮節作園家集あり。其の歌一二、

日本人

ひらけゆく世にれくれじと朝な夕な
　うつりも行くかあちさゐのはな

朝鮮人

かたましきそしりは得ともたけ高き
　すかたありけり衣かさの山

英人

木を山に羽ぶく熊わしれのれのみ
　くもゐのものと思ひけるかな

佛人

八十國のたからあつめてやちまたに
　こがねしろかねしかんとやれもふ

米人

をゝしさもまこともありて月の輪に
　心のくまはてりとはりみゆ

又、源氏物語考證圖繪、源語考演題、紫花一辨等あり。

●附錄として、明治三十二年度女鑑歌文月並兼題の刷物をそへたり。猶此附錄いひれてせ給はゝ數のあらん限りはまゐらすべし。





十一月廿日兼題　枯野

天

霜枯てひとついろにぞなりにける
いづくかあきの花野なるらん
伊豫國松山市港町三丁目百　白石梅子

地

朝しもは花とにほへどかれすゝき
まねぐふゆのはとふ人もなし
伊豫國松山市鉄炮町十八番戸　野中あさ子

人

いろ〳〵に匂ひし花のかげもなく
しものかれ野となりにける哉
肥後國菊池郡城北村　佐々小琴子

秀逸（十首）

打まねぐ尾ぞなが袖もやれはてゝ
見渡しさむきふゆの野邊かな
肥後　田代艶子

八千草も殘るかたなくしもがれて
あはれさびしくなれる野邊哉
肥後　田代綾子

八千草の花ぞかりかはむしの音も
かれてさびしき冬の野邊かな
伊豫　玉井隆子

名にしれふ青野か原もふゆかれて
霜よりほかのいろなかりけり
丹波　羽室象子

こがらしの枯野をわたる音もなし
をぞなかそでも霜にふしつゝ
東京　横山柳子

むさしのはあはれ日毎に霜がれて
花のにしきのかげもとゞめず
石見　中山とみ子

枯れ渡る野邊の千草に今朝はまた
みなれぬしもの花ぞさきける
東京　野澤尾上子

かれのこる尾花か袖もやれはてゝ
見るもさむけき冬ののべかな
東京　屋摩高滿子

霜がれて尾花かそではまねけども
くる人もなきふゆののへかな
伊豫　仲田榮子

いろ〳〵の千草はかれて一つ色に
しもの花さくふゆの野へかな
遠江　岡部やよ子

（以下原稿到着順）

べみれば風にまれきし小すすきの
しもかれはてゝさむけかりけり　濱口貞子

がらしにふきみだされし糸すすき
かれたる野べはくるひともなし　石井豊子

きしはきのふ今日ぞとおもひしに
いつしか枯れしのべのやちぐさ　山内かず子

しあきの色あせはてゝかれなばな
まれくもさびしむさしのゝはら　根岸豊子

すすきかれふす野へのあはれなば
ひときはみするゆみはりのつき　江口華子

落はなまれくすゐ野なきてみれば
しもかぜさむくからすなくなり　佐々有興子

のきてにしきと見わしなゝのべも
けふはいろなくしもかれにけり　輕部鶴子

にかれあらしになれてなか〳〵に
風のおとたかし野べのかやはら　淺井静子

らすゝきかれたつ野べの霜わけて
ひともときくのはなをみるかな　島山雪子

千ぐさはみなしもがれて小笹はら
かぜのみさわぐふゆののべかな　島山千嘉子

がすみし家のなごりぞすゐいしを
枯野のなかに見るぞかなしき　島山美子

れはてし野末にたてるなみなべし
見るにつけてもあはれまされり　島山千代子

なこそあたなるものとおもひしか
のべのくさばも枯れはてにけり　島山百合子

ゝなきかれ野とわれはおもひしを
はなよりけなるけさのしもかな　島山清子

べみればたゞ霜かれにかれはてゝ
のこゝろこまつもさびしかりけり　住山叢子

いろ〳〵にみつゝすぎこし武藏のの
ひとめもくさもかれはてにけり　住山静子

女郎花すゞきかるかやかれはてゝ
つきのみひとりのこるのべかな　松原常子

おきわたすしもにくさばの色もなし
あをのがはらの名にはそむかず　榊田鈴子

のべ見ればちぐさの色もうつろひて
さやけきしものはなさきにけり　森若子

むさし野の千草のはなもしもかれて
ひとついろにもなりにけるかな　西村虎子

しも深みのべはおほかたうつろひて
なきにしむしの音さへかれぬる　大森純子

かれはてしちぐさの中のひとつまつ
かはらぬいろぞめでたかりける　品川登羅子

おく露にはぎもすゞきもうらがれて
のなかのみづのおとのさびしき　神田静子

のべ見ればちぐさの花のいろあせて
ひとついろなるしものはつはな　根岸英子

しもふかみちぐさは哀れかれふして
なごりもとめぬむしのこゑかな　根岸初音子

かれはつるのべの千草はしろたへに
けさこそしものむすびそめけれ　濱口寛子

そでたれてばなぬきしは夢なれ草や
しもおきわたすむさしのゝはら　濱口信子

おくしもに千草もいつかかれはてゝ
あきのかたみとみるぞかなしき　楢綺子

おくしもに野末のちぐさうらがれて
ながめさびしきむさしのゝはら　木村鍊子

けさみればのべの枯葉にさきにけり
つゆよりもろきしものはつはな　千葉里子

あたしの丶ゆふべの雨ははれやらで
かれしすゞきのふすがあはれさ　横山初子

やちくさの露にやどりしあきくれて
かれの丶しもにさゆるつきかな　大島愛子

やちくさの露にみしより身にしむは
かれの丶しもにさゆるつきかげ　高橋信子

冬がれののなかのみちのひさつまつ
かはらぬいろもさむげなるかな　小川金子

のべみればちぐさはいつか色あせて
ひさりうるはしゝものはつはな　小川富子

わがみどりめでにしのべゝ霜がれて
さびしさまさるあきのおもかげ　高島溶子

哀れさをあきのすゑのにまれくなり
しもがれすゞきゆふべさびしき　竹村竹星子

霜枯れて見るもさむけきすゝきはら
しかのなく音ものこらざりけり　安孫子かづ子

ゑしがれの野中のいほにやどるよは
まくらべさむくきつれなくなり　山口千枝子

かすゝゝの草のひかりもやゝきゐて
いまはさびしきみやぎ野のはら　萩原草子

秋にきて見しはゆめなりおもかげも
かはりはてたるのべのいろかな　石川類子

うつり行くわがみにつみて哀れなり
ゑもないたゞく野邊のたもかげ　石川らく子

なまめきし色香もうせてなみなべし
ゑもにかれふす野邊のあはれさ　石川南江子

はる秋にさひきしひさもふゆされは
くさもろさもにかるゝ野邊かな　石川久子

枯れわたる野邊こそここに淋ひしけれ
むしのこゑさへたえさかりゆく　安村歌子

なでしこのこのころ姿もあはれなり
かれ野が原のふゆのあけぼの　曾根雪子

あさしもに百千のくさは枯れにした
なほさりけなきまつのいろかな　遠藤眞久子

しもがれてさひしかりけり淺茅はら
ちぐさのはなのおもかげもなし　木村きく子

もゝくさはのころ色なくかれふして
しものみさゆる野べのあさかぜ　栗生きく子

人めさへくささへかれしむさし野に
あはれはかりはかはらざりけり　田中しげ子

かたみにさのこりし菊もうらがれて
おくしもさゆるむさしのゝはら　名取よし子

おくしもなはらひかれてや冬の野の
なはなかそてぞやれはてにけり　名取正代子

むしの音も千草もいつかかれはてゝ
おくしもゑろしむさし野のはら　坂田きみ子

八千草のしもかれはてし野邊見れは
のころこまつもさびしかりけり　仁保しま子

霜かれぬこまつの陰かはいろもなし
あはれさびしきふゆのべかな　永井さい子

みわたせば尾花が袖もしもがれて
のころいろなきみやぎ野のはら　小林文子

かれのころ草葉にしものおきそめて
あさかぜさむきむさしのゝはら　山根久子

春の野の千ぐさのはなもあきくれば
あさかたもなくうつろひにけり　齋藤せん子

おく霜に千ぐさの野邊はかれふして
ひとついろにもなりにけるかな　林　瑟子

鳥の音も千ぐさも枯るゝあきの野は
あはれはかなきものにこそあれ　林　琴子

花すゞきまねきしかげもかれはてゝ
いろなきのべとなりにけるかな　尾立　英子

おく霜にをばながそでもうらがれて
ふくかぜさむしむさしののはら　尾立　富子

花とみしきのふのあきもかれはてゝ
見るめさびしきむさしのゝはら　村上　てゐ子

けさ見れば霜のはなのみ咲きみちて
みわたしひろきむさしのゝはら　高橋　かれ子

さをしかのなくねもたえて萩のはに
おくしもしろしみやぎののはら　關口　光子

野邊みればすゞきがもとの思ひぐさ
かれゆくふゆになりにけるかな　大塚　鐵子

秋とひしちぐさのはなもしもがれて
あはれさびしき野べとなりけり　龜山　信子

おくしもに尾花がそでのかれはてゝ
たてるもさびしみやぎのゝはら　龜山　文子

霜さゆるかれのゝはらのあさかぜは
いとゞ身にこそしみわたりけれ　龜山　うた子

花すゝきかれ生のなかにさびしくも
野もりがいほぞあらはれにける　德永　萬壽子

花さきし千ぐさはしもにかれはてゝ
さびしさまざま野べのいろかな　小森田　輝子

きのふみし花のたもとをぬきかへて
かれ野のはらぞさびしかりける　澤田　春子

うちわたすをばなが袖もしもがれて
しぐれにくるゝむさしのゝはら　漆原　きしゑ子

あきのゝにいろあらそひし八千草も
ふゆかれそめてつゆぞはなさく　橋本　豐子

八千草をめでしすそのもいまはたゞ
しもかれはてゝ訪ふひともなし　塙　いさむ子

野邊みれば霜のはなのみさかりにて
枯れゆくふゆになりにけるかな　野路　千賀子

今朝みればはぎもすゞきも霜がれて
のもりがいほはあらはれにけり　谷口　婦佐子

木も草もいろなくかれしふゆの野に
今朝置くしもぞはなと見えける　澁谷　いく子

あはれさのかぎりを見せて霜がれし
ふゆのゝすゑにゆふひ落ちたり　谷口　とも子

ことごとく枯野のけしき見にくれば
おのづからなるあわれしられぬ　田中　濱子

いろいろの千ぐさ百くさいにし秋の
おもかげもなくかるゝ野べかな　加藤　眞子

野邊みればいつより秋のなごりとて
しらぬまでになへてかれけり　加藤　壽枝子

のべみればあきはさまざま花さきし
ちくさおしなへかれにけるかな　加藤　蕭子

みどりなるあきの千草のおもかげも
みぬばかりにかれしのべかな　加藤　桂子

はる近くなるをおもへばなかなかに
しもかるゝ野もたのしかりけり　澁谷　きよ子

もゝ草のかれゆくのべのはなすゝき
あきのなごりとなほのこりけり　椎野　ぬき子

秋の野のをばなのいろもふゆかれて
ひとまちがほのそでぞさびしき　四條　駒子

おく霜にかれてゆく野のあはれさは
まつぞむかしのかたみなりける
笠木かず子

かすかなる虫のこゑさへあさたえて
ひろ野の千くさかれはてにけり
無名

きのふまで虫のやどりとおもひしが
かれてあさなきよもぎ生のはら
（前後無名を禁ず）川上喜代子

木がらしに殘る木のはもちりはてゝ
さびしさまさるふゆののべかな
川上博子

咲きわけしちくさの花もしもがれて
野へはひとつのいろにみえけり
羽田三緒子

秋のゝにまねきしすゝきなれふして
かれのはつゆもしもさかはれり
河田いし子

霜がれし野邊のかや生に暮るゝ日を
をしむすゞめのこゑあはれなり
高橋ちん子

まねきつるすゞきが袖もかれはてゝ
しものはなさく野邊さなりけり
高橋榮子

昨日まではぎにすゞきにあこがれし
おなしのべさも見ぬふゆがれ
谷口さだ子

霜がれのちくさのなかのひめこまつ
みさりいやますふゆののへかな
林環子

葉がくれになきつる虫のねもかれて
のへはいろなくなりにけるかな
武谷慎榮子

一しほのあはれそへけり枯れはてし
ふゆ野にのこるなでしこのはな
橋本たつよ子

吹く風のおさばかり立て小野のはら
うら淋しくもなりにけるかな
西艶子

見し秋のはなのいろ〳〵いつしかさ
おもかげかはるふゆの野べかな
加藤久子

すみれ草つみにし野邊はあれはてゝ
枯れしをばなにきたかぜぞ吹く
川村高子

なまめきしをばなが袖もかれはてゝ
まねかぬ野べにふゆはきにけり
林久子

やちぐさは色なくかれてむさしのも
あはれはてなきゆふぐれのそら
坪内晴子

しもかぜに尾花がそでもやれはてゝ
のべはさむけくふゆがれにけり
稲原菫子

かれ草を吹きしくあらしそらさえて
つきこほる野にきつれ鳴くなり
櫻井はな子

北にそひ山さへもなきなすの野の
くさのかれふにあらしふくなり
櫻井ふく子

二羽三羽おさるからすのかけ見えて
立もこそさゆれふゆがれの野邊
曾我よし子

冬くればかれのにのこるいさはぎの
こゝろぼそくもよるひさぞなき
成田うの子

ふみなれし野邊のちぐさに霜おきて
いこゞあはれはいやまさりけり
秋山ふみ子

のべみれば秋のちぐさはうらがれて
わがそでのみぞつゆけかりける
日吉あさ子

のべはみなあらしのためにうらがれて
ひさめもくさもかれはてにけり
絹川ます子

おく霜にのべのちぐさもいろあせて
あはれさびしきふゆがれのさま
原田順子

百くさの枯れにしあさにひさもさの
をばなのそでにしもぞおきける
高屋萩野子

里びさのかりのこしたるふゆぐさは
しもより外のいろなかりけり
山田璋子

虫のねもちぐさのいろもあきはてゝ
林文子

さびしさまさるふゆがれののべ

どりなはひさ木の松にまかせつゝ
ゑものはなのみさける野べかな
美濃君子

せさむき夜中の月かげうつすなる
枯野のつゆぞあはれなりける
孤華よし子

のすゞき立てるも淋しゑもしろく
見わたす野べはふゆがれにけり
寺尾さかへ子

つかしき花野はゑもにかれはてゝ
千くさのいろもわかたざりけり
寺尾まさ子

もさゆるかれのゝはらのひめ小松
これより保かにみるいろもなし
米盛たい子

ちまれく尾花がそでもやれはてゝ
ゑもかれはつるふゆののへかな
櫻井ちゑ子

くかせに枯野のしもなはらはせて
まれく尾ばなのそでのさむけさ
吉岡歌子

もなきかれののはらさおもひしに
なはなかうへなてらすつきかけ
間宮道子

てみれは吹く風さむしにしきかさ
めでしあき野もしもにかれつゝ
綿野りき子

わたせは霜のはなのみさかりにて
野邊のちぐさはかれはてにけり
竹腰隆子

もかれにうつろひ果てし武蔵野は
きつのみさりもさむけかすけり
竹腰婦美子

過見れば草はみながらかれはてゝ
に保ひしはなのおもかげもなし
稲田綠子

し秋のなごりもいつかうつろひて
ありしいろなきふゆののべかな
稲田早苗子

なすゝきいつまで誰なまねくらん
ひさめもくさもかれしふゆ野に
大林安子

おく霜さひさついろにぞなりにける
ちぐさにみにしのべのけしきも
原ゆう子

霜ばしらある日になれてふゆの野は
たゞふきすさぶかぜぞさむけき
篠崎りん子

木がくれも野もりが庵もあらはれて
かれ野はさらにひさかげもなし
篠崎ふさ子

露ばかりあだめくいろもなかくに
かれてあはれのふかき野べかな
志鎌たか子

かぜさゆるあしたの原な見わたせば
しもより保かのいろなかりけり
仲田しげ子

音にかよふかぜの音のみのこされて
あはれかれゆくさなしかの野べ
永井花子

幾すちのみちなのこしてやちくさも
ひさめもかるゝふゆののへかな
三浦鋭子

きてみれば千ぐさの野邊は色なくて
うつらのさこにしもぞおきける
長尾郁子

見渡せばはなももみぢもなかりけり
いまぞかれのさひさもいふらむ
末次たみ子

おしなへて枯れにし小野の入れ疊さ
見ゆるもさひしまつのひさもさ
幡谷よう子

風のおさにふゆのさひしさしられけり
くさきもかれしみやき野のはら
遠藤まん子

秋にみしちぐさのはなもふゆかれて
ゑもおく野べになりにけるかな
中村喜枝子

哀れてふあきははなゆゑなくさめき
かれゆく野べはいかにながめん
中澤千野子

ゆくみちのいさゝさみしき枯野路に
ふるさささむくゆふかせそふく
天野吉子

殘りなくはきもなはなもかれはてゝ
早川信惠子

御園生の菊のさかりになりぬらん
みかきのかぜも香に匂ひけり

紅葉深　安東菊子

山の名はうすひといへど秋ふかく
そめ盡したる木々のもみぢは

山家の歌の中に　海上壽子

わびしらに猿猴なくなり世の中の
うきことしらぬ山かげにして

秋田家　土岐幾子

山田もる賤からき身はなれつゝも
秋としいへどさびしかるらむ

夕鹿　足立三尾子

さらぬだにかなしき秋の夕ぐれに
つまとふ鹿のこゑきこゆなり

有住齊(號柞園)翁みうせぬるをいたみて

翁のみまかり給ひし夜　小林眞子

限りあることよひ一夜をいかにして
つかへまつらんあはれ一夜を

石井泰次郎

み敎をまつのみとりこうちすてゝ
はゝその紅葉またきにぞある

皇國のためあれはも惜む人はもよ
人のためにをきみをしむらむ

世れしなべて菊の遊する秋にあひて
千代もといのりし翁うしなひぬ

十川あさ子

國のため千代もと祈るかひもなく
かへらぬみちに君いでましぬ

辭世の詠歌を見はべりて　中山櫻峯

言の葉はあとの千代まで殘るとも
ちりにし花ぞはかなかりける

娘　常子

かねてよりかくとはしれど今更に

をしきは今日の別れなりけり

孫　鐵子

海山にうけしめぐみのはしをだに
返しもおへずけふのわかれ路

谷田陸軍中央幼年學校長、堀井東京陸軍地方幼年學校長の送別の宴に　下田義天類

立ちかはる時になりぬと、初雁にあとをゆづりて、燕のゆくをしみれど、育てこし雛をあともひ、その親とさきにもたゝず、その子等とあとにも捨てず、諸共につぞさ列ねて、たのしげに軒端はなれぬ、つぞくらのむれにもあらず、初雁の友ならなくに、年まねくはぐゝみたてし、武夫のますらたけをの、うなゐこのうなゐはなりを、中ぞらに見捨てたまひてその親とたのみし人の、二人まで袖うち列ね秋霧の立ちのまかひに、立ち別れゆくをし見れど、大君のまけのまに〳〵、ますらをはゆくとふものと、かねてより聞きてはあれど、早くより言ひてはあれど、しかすがにおもひ迷はれ、世の常は眼にもとゞめぬ、つぞくらのむれをさへこそうらやまれけれ。

別るともつぞめなりせぞ花さかむ、春はふたひととひこむものを。

里の小山　　れきつとり

頃は夕暮のほどにてありき。例のわが舊知己なる小山にとのぼりゆきぬ。むかしを思ひ出でむとてなりけり。むかひは渺洋たる海原遠く見渡され、うしろは連延たる峯長くたゝなはれり。さゝやかなる吾が村里は即ちその間にはたがれるなり。波かゝる磯、鷗ねむる小島はこゝよりみさぐれど、すべて一眸の内にちゞめられて、さながら吾には心染みたる畫のなくなれるを再見出でたらむやうなり。宜なり。こゝをは常に歸省の樂の内の一つにかぞへたくことは。松の根の見覺ねある所にすわれど、石もこけも自しとねとなりて侍せり。眼を仰ぐれは、沖に横ほれる雲の濃かりしは、何時の

ほどにかはらむ、れはろにたなびきて、空とればゆるわたりにも、白帆とみゆるが、二點三點ぞかり現はれたる、吾がむかしの友なりし人の父の船も雜るらし。やう／＼傾きたる日蔭の木の間よりもれて吾が肩を過ぎ、二きだぞかり前に彩りたるわかね、いはむ方なく艶なり。ふりかへれど、少しまぞゆき山の端には、帶の如く引きはへたる霞の山の中らを立きり渉れて、又わだし山に現れたる身もゆるぐ心地す。少し下りたる杣に音するものあり。配るともなく見やれど、ことでとく頭ふりつゝ、三歩ぞかり先にくるものあり。萩の枯枝をくゞるを見れぞ雉の雌なり。見ざるまねしてなれどろきそ。をかしの物やとてこよかし。慣れもせよと念ずるをりしも、人ありとや知りけむ。少し傾けながら、羽たゝきわはだゝしく谷をへだてたるかなたの山に舞ひさがりぬ。手の物とられたらむやうなり。自失しながら目を轉ずれぞ、何時のまに何物のなしたる奇功ならむ。海原は横に限りもなくよどみ渡りて、水と空とはさは／＼しきまで、一は濃く一は淡紫の色をなしたるに、夕陽を帶びたる白帆のきら／＼とし水にもその影のはのみゆれたる浦にこそ、花も紅葉もだにぞいはまほしき。あはれ昔は、吾もこゝにてこそ人となりしか。里の故老が、われに、など故里を見捨てしぞといひてなじりけるはゆゑありけりな。吾ははに久しく他鄕にのみありけり。諸共に下り行く柴刈をとめの名を知らぬも吾からにこそ。

雜報



●大御いでまし　大元帥陛下には、去し十三日、都をたゝせ給ひ、新橋より、滊車にめさせ給ひて、大演習地へ、いでまさせ給へり。かくて、皇后宮陛下には、御ともにたゝせ給ひて、新橋まで、奉送し給へり

●降誕　閑院宮載仁親王殿下の妃智惠子殿下は、お

し二日、王女を生ませ給ひ、御名をぞ、季子とつけ給りとぞ。

●御患　小松若宮依仁親王殿下の御息所は、去し七日、腎臓病にかゝらせ給ひ、八日には、いよ〳〵重らせ給ひて、御熱度も、四十二度にのぼらせ給ひしかど、八宮殿下をはじめ奉り、御親族までも、厚く、御看護させられ、御醫師には、ベルツ博士西郷醫學士等、たえず看護し奉れりとぞ。

●孝貞　羽後の秋田市に、渡邊みね女といへる婦あり、今より、七八年さきに、夫は、にげうせて、行方も知れぬに、姑に孝養おこたりなく、又、幼兒二人をはぐゝみながら、家計をとゝのへ、女の手一つに今日をすぐすが、いとあはれなりとて、見るもの、聞くもの、感賞せざるはなしといふ。

●又　これも、いとよく似たり。伊豫の國、宇和島る高滿寺村の人、菊地忠次が妻に、とよ女といへるあり。去し明治廿三年、夫忠次に死に別れてよりは、七十路に餘れる老姑を奉養し、二人の幼兒をおほしたてつゝ、わが手一つに、家を保つとぞ。これも近郷、感ぜさるはなしといふ。

●孝女　羽前の山形市に、寺庭やす女といへる少女あり。幼くて、父にわかれ、兄を隆賢といへるが、これは、衣食のために、今に十餘年が間、他郷にあり。やす女ひとり、起居もまゝならぬ老母を奉養しあけくれ、おこたらずといふ。されど、其の名、近隣にたかく、一市みな、子女をいましむるに「かの寺庭のやす女を見ずや」とて、をしへ草とすとぞ。感ずべき少女なり。

●烈婦　こは、新領地臺灣にてのことなり。烈はもとより烈にして、婦たりとも、かゝる意氣なくてやはあるべき。さはあれども、國におきてあれど、如何ばかり堪ふまじき怨ありとも、みだりに人を殺すはよからず。今はたゞ、其の烈を稱するのみなり。臺南縣の土人に、李春といへる人あり。妻を潘招といへり。李春、或日、山に入りて、木こりてありけるを、生蕃來

て、其の首を斬りてけり、播招、家にありて、其の夜は、待ち明しつれど、歸り來ねど、翌日、近隣の人を伴なひ、山に分け入りて、さがし求めて、辛じて、其のなきがらを得たり。時に、生蕃、男二人、女一人、合せて、三人打ち連れて來たるを、播招、まづ、鎌もて、其の女を斬り、やがて、殘れる二人をも、擊ちて、仇をむくい、さて、夫のなきがらを運び歸りて、之を葬り、墓前に、仇の首三を供へて、夫の靈を慰めきとぞ。貞烈感ずるにたへたり。

●孝子　陸中の國に、阿部忠平とて、今年十八歲なるがあり。篤疾の父、癈疾の母、兄、叔母をも、扶持奉養れろそかならぬ事、こゝに八年が間なり。縣知事きゝて、褒賞して、金五圓を賜へりとそ。

●母子再會　當時、大阪、高津、四番丁に住める澤村いち女といへるは、今年六十三歲なり。もと、岡山縣、邑久郡、牛窓村の人にて、淸七といへる人の妻なり。昔は、足らぬ事もなくて、過しゝが、十四五年以前、夫淸七とゝもに、大阪にうつり住み、堂島の米相場をすまひて、少なからぬ損失をうけ、一度ならず一度まで、利なくして、資產、殆、空しくなれり。かくてゝ、淸七はいたく憂ひて、遂には病にをかされ、八年以前、空しき人となりぬ。いち女、夫に後れて、せんすべもなく、人にやとはれて、洗濯などして、辛くみ今日を過しけり。こゝに、二人いまだ、故鄕にありけるころ、子一人ありけり。名を健次といひしが、廿一三歲の頃、修學にとて、東京にのぼれり。かくて、淸七なくなりてよりは、學資を得んすべもなけれど、知人をたよりて、英國の滊船、シナー、オブ、チヤイナ號に、靴磨にやとはれ、日本、支那の近海を航しありてけるが、この間に、外國語にも通じたりけれど、こたびは、香港にとゞまりて、英國商人、オーガスチンといへる人にやとはれて、年ごろを過せり。さて、今は、資金も、よきほどに積みたれど、いでや、故鄕にかへりて、父母の安否を問はゞやとて、立かへり、か

い岡山の牛窓の里に到れど、我が家は、昔のすがたならず。父は、はやくみうせ、母はなほ後れ居て、大阪にありと聞けど、何處をそことも、たしかならねど、消ゑなんどかり、心をおとしゝが、かくてあるべきにのあらねどとて、再、大阪に到り、此處、彼處とさがしもとめしかど、遂に尋ねあてゝ、十七年がほどにて、始めて、再會し、母子ともに、夢心地してよろこびしといふ。親子の情、さもありけんかし。

●一家五夫婦　は、いと稀なり。まして、睦しく、今日を送るをや。北海道、根室に、成田伊三郎といへる人あり。祖父、父、弟二人と、合せて、一家五夫婦なり。常に、いと睦しくして、曾、家に波風のたちしことなく、一夫婦毎に、各、受持を定めて、家業を勵めど、子孫のふゑ廣がるにつれて、資産も亦、増殖すといふ。諺に、笑ふ門には福來るともいへり。

●奇特　の人もありけり。かの陸中と羽後との國さかひに、仙岩峠といへるところあり。この頂に、二十年を經て、住める老夫婦あり。共に、年、八十歳に餘れども、身すこやかなること、壯者におとらず。常にこゝに居て、雪中、行旅の人を救ふを以て、こよなき樂とすといふ。かくて、これが爲に救はれて、命を助かりしもの、七十餘人の多きに及べりといふ。

●老教師　福井縣、織田村の小學校に、林詮とい る教師あり。今年六十餘歳なるが、明治の初より、教育に從事し、實踐躬行、幼童を導しかど、この一村は兒童の氣風、他とことなりといふ。凡、教師は、かくあらまほしくこそ。

●生徒の鑑　仙臺市なる高等小學校の生徒に、森まつ女といへるがあり。課業を終へて、歸る途に、一人の乞食、嬰兒を捨てゝ去らんとするを見、何故ぞと問へるに、乞食、この嬰兒の母は、産みおとして間もなく、にげて行方を知らねど、せんすべもなくて、かくて、乳飲器をあがなひ得つれど、こをさへ童子等のに、打ち碎かれぬれど、今は、養ふに道なくて、捨て

んと思ふなり」といふを、いとあはれがりて、直に、家にかへり、父母に乞ひて、乳飲器を購ひて、之を與へきとぞ。

●又　信州、北佐久郡、春日村の人、河井市次郎といへるは、男女三人の子を持てり。この三人、ともに、一里ばかりを隔てたる學校に通學するに、一日も欠席せしことなく、學業も、亦、成蹟優等にして、常に、級の首席を占むといふ。かくて、又、家にかへれば、三兒相携へて、山に入り、薪をこりて、家計を助くとぞ。いと感ずべし。

●おとにきく高師の濱　は、かくれもなき泉州の名所なり。この濱に、年ふる松の數多おいたてるを、前に、子爵税所篤氏、堺縣の令たりしころ、士族授産の爲にとて、悉、きりたふさんとしけり。時に、大久保内務卿、(利通公)たま〳〵、こゝに遊びて、この事を聞き、こは心なきわざなり、とて、和歌一首を詠み出で、子爵に示せけるに、子爵も、亦、かへしよみて、遂に、この事やみにき。かくて、こたび、こゝの濱は、公園地となりたれば、この事を、松の千歳にのこさむやとて、名にちなめる松方伯爵、西村捨三氏をはじめて、有志の人々、相謀りて、碑をたつべしとぞ。碑の表面には、大久保公の歌を、松方伯みづからかきつけ裏には、税所子爵の文をゑりつくべしといふ。その歌この文。

大久保公の歌

おとにきく高師の濱のはま松も
世のあた波はのかれざりけり

(税所篤氏の文)

こはいにし明治六とせの夏の夕つかた大久保利通君と高師のはまみんとてやどりをいでゝはまの石に腰うちかけ四方のけしきみわたすほと松の林のたかはきりたるをみていかなる故にかといはるゝに近頃士族授産の爲にとてはらひ下けたるなりとこたへけれはそはけしかることとかなかゝる名所の松の數歳經たらんをことゝゝくきりはらはんはまことになさけなきわさなりこゝのつかさとあるもの心なし

や云はんとてたゝふ紙とうてゝ書かれたる歌也おのれもとりかへす

いかにせんたかねおろしのはけしさに
なみたふるひしをのゝえそこれ

といらへしてけれは何はとまれ明日よりはこの事やめさせてよ京にかへらんのちともかくもすへしとあるにやかてそをとゝめたりき今殘りたるはまたくかの君のたまものといひつへしこのよし石にしるして後世に傳へんとて一言しるしてよとすゝむる人のあるにまかせつたなきおのかかへしのことの葉さへありのまゝにかきしるせるはさきにこの縣に介たりしちなみあれはなりけり

明治三十一年十月　子爵 税所篤

●紀念碑　かの世に聞えたる久留米絣は、寛政十一二年のころ、井上でん女が十二三歲の時、はじめて、織り出でたるなり。(當時、でん女は、筑後の國、御井郡、久留米通外町に住めりき。明治二年四月廿六日歿す。年、八十二。なほ、委しくは、本誌第九十號、漫錄欄、四十三頁を參照すべし。)かくて、今は、一ヶ年の產額二百萬圓餘に上れりとぞ。されど、福岡縣、久留米市の有志者、相謀り、千餘金を醵集しゝ、そこの名產の鼻祖井上でん女が紀念碑を建てつといふ。かくて、其の績と名とは、其の名產と共に、萬世の後までも、わえせざらまし。

●稀有のことなり。兵庫縣、西庄村といふ處に雄婦七人ありけるが、みな同し時に、子うめり。其の內、一人は、三つ兒を產み、六人は、みな、双兒を產めりとぞ。さて、思へど、母親七人にて、嬰兒十五人を產みなりけり。

●似つかぬ文　およそ、知事、村長などいへど、わかきひきゝの別こそあれ、何れも、人の頭たるべき司なり。されど、其の司人は、おの〳〵、ふさはしき識あるべきは、いはでもの事なり。文かくに巧拙はあることながら、かゝるはすくなかるべし。下野とのみきゝて、他は、皆、もらしつ。そこに、小學校建築落成式を行へるに、知事臨みて、祝文をよみあげゝれど、村

長、また、答辭を述べたりといふ。その文の一節をぬき出でゝ掲ぐれど

知事祝文の一節

校舍の新なるは猶衣服の新なるが如く部室の區劃整然たるは猶袴襞の折條稜々たるが如き乎是實に本村の面目と謂ふべし

村長答辭の一節

晧天高く萬馬肥ゆ氣宇愈壯快成本日縣知事代理官並に顯官諸君親しく御境臨あらせられ本村尋常高等小學校の典を擧行せらるゝ誠に本村の光榮なりと云はざるを得ず加之將來に於ける敎育上進路に向ひ懇篤なる諭辭を辱ふす感泣激切の至りに堪へざるなり

●女子職業學校（東京神田にあり）の卒業生は、去し十三日、校友會をもよほせり。時に、裁縫、刺繡、編物、造花、圖畫等、それ〲製れる品々を、抽籤法にて、（一本金二十錢）來賓の人々に購求を請ひしが、其の代金をば、悉、校舍新築費償還の資に充つべしといふ。

●有住齊翁みうせぬ　翁、やみて、久しく、ふしどにありしが、終に、去し二日、なき人の數に入りぬ。いと惜しかぎりなり。翁は、本邦の故實禮節にくはしく、かねて、和漢の學に通せられたり。業を門に受けしもの多く、著書も、亦、すくなからず。かくて、門人等、相はかり、翁の遺志をつぎて、柞園女塾と云ふを麻布永坂町にたてゝして、生徒を教授すといふ。今、翁の略傳を得たれば、

有住齊翁略傳

翁は、奥州白河阿部侯の藩士にして、有住治右衞門の子なり。錄助、勝續、後、齊と改む。和漢の學に通せり。人生の所業は、一二に止まらず。又、人々好惡あり。上中下の生限ありて、窮りなきは言ふまでもなけれど、予弱年の昔、舊藩に關四郎兵衞と云ふ老人ありて、平生教訓ありし一語の耳に止れるは、人一藝を熟知する時は、假令、無道の世に當るとも捨らるゝ事なし。無藝大食は採用する者なしと。金言と覺えて、古實禮節の門に入り、數年困苦すれども、其の域遠くして到り難し。されども途中にして是を捨てなば、又何藝をか固有の業とせん。所詮生涯を一業にゆだねてれくらむやとおもひ、今日迄も執心の斷さまさず從事せしが、師とたのみたるものは皆口口口の塵と成り、又此の道に從事するものなく、諸君萬端の問答、多く老衰の身を以て、之に相對する物うき口口ヽヽヽヽ事いさヽかも語り置まく云々と、晩年に述懐せられき。松岡大人の門弟大賜普輔

恒の門に入りて、故實禮節を治め、嘉永五壬子年、二十二歳の時、初免狀を得、次で、安政七庚申年、嘉禮免狀を受けしより、愈々、斯道講究の志を堅くし、古今の書籍を涉獵して、一身を顧ざりき。後、東都に登りては、雙松亭松岡氏の門に遊べり。其の師範を托せらるゝに至れりしは、實に、歳、四十五歳の時なり。本邦禮節の大義を解释せんとして、かくて、先、記、紀、萬葉より、國史、律令を初め、物語書、雜書をも、通覽考證して、益々、力を盡さんとし、晩年に及ぶまで、猶、筆を閣かざりしが、病の犯す所となりて、言語執筆、共に、意の如くならざること、三年。終に、明治卅一年、十一月二日、麻布永坂の家に沒せられぬ。年六十八。麻布櫻田町、大法寺に葬る。六十五歳の時、わが墓碑に、きさめよとてよめる歌

わか世既に終らんとする時
花をめて風をわはれふわたゆめの
さむれは西に月かたふきぬ

門下に、敎を受たる人、其の名、世に聞ゑたる者ればし。

著書の最、世に行はるゝは、類聚婚禮式、女禮式と婚禮法等なり。又、遺稿中には、
○類聚祝之書○類聚產所式○類聚丁年式○故實禮節
作園家集あり。其の歌一二、

日本人
ひらけゆく世にれくれじと朝な夕な
うつりも行くかわちさゐのはな

朝鮮人
かたましきそしりは得ともたけ高き
すかたありけり衣かさの山

英人
木を山に羽ぶく熊わしれのれのみ
くもゐのものと思ひけるかな

佛人
八十國のたからあつめてやちまたに
こがねしろかねしかんとやれもふ

米人
をゝしさもまこともありて月の輪に
心のくまはてりとほりみゆ

又、源氏物語考證圖繪、源語考演題、紫花一辨等あり。

●附錄として、明治三十二年度女鑑歌文月並兼題の刷物をそへたり。猶此附錄いひれこせ給はゝ數のあらん限りはまゐらすべし。





十一月廿日兼題　枯野

天　伊豫國松山市湊町三丁目百　白石梅子

霜枯てひとついろにぞなりにける
　いづくかあきの花野なるらん

地　伊豫國松山市鉄炮町十八番戸　野中あさ子

朝しもは花とにはへどかれすゝき
　まねぐふゆのはとふ人もなし

人　肥後國菊池郡城北村　佐々小琴子

いろ〳〵に匂ひし花のかげもなく
　しものかれ野となりにける哉

秀逸（十首）

打まねぐ尾花が袖もやれはてゝ　肥後　田代艶子
　見渡しさむきふゆの野邊かな

八千草も殘るかたなくしもがれて　肥後　田代綾子
　あはれさびしくなれる野邊哉

八千草の花ぞかりかはむしの音も　伊豫　玉井隆子
　かれてさびしき冬の野邊かな

名にしれふ青野か原もふゆかれて　丹波　羽室象子
　霜よりはかのいろなかりけり

こがらしの枯野をわたる音もなし　東京　横山柳子
　をぞなかそでも霜にふしつゝ

むさしのはあはれ日毎に霜がれて　石見　中山とみ子
　花のにしきのかげもとゞめず

枯れ渡る野邊の千草に今朝はまた　東京　野澤尾上子
　みなれぬしもの花ぞさきける

かれのこる尾花か袖もやれはてゝ　東京　屋摩高滿子
　見るもさむけき冬ののべかな

霜がれて尾花かそではまねけども　伊豫　仲田榮子
　くる人もなきふゆののへかな

いろ〳〵の千草はかれて一つ色に　遠江　岡部やよ子
　しもの花さくふゆの野へかな

（以下原稿到着順）

べみれば風にまれきし小すゝきの
しもかれはてゝさむげがりけり
滝口貞子

がらしにふきみだされし糸すゝき
かれたる野べはくるひともなし
石井豊子

きしはきのふ今日ぞとおもひしに
いつしか枯れしのべのやちぐさ
山内かず子

しあきの色あせはてゝかれなばな
まれくもさびしむさしのゝはら
根岸豊子

すゝきかれふす野べのあはれなば
ひときはみするゆみはりのつき
江口華子

落はなまれくすゐ野なきてみれば
しもかぜさむくからすなくなり
佐々有興子

のきてにしきと見えしなゞのべも
けふはいろなくしもがれにけり
輕部壽子

にかれあらしになれてなか〳〵に
風のおとたかし野べのかやはら
浅井靜子

らすゝきかれたつ野べの霜わけて
ひともときくのはなをみるかな
畠山雪子

千ぐさはみなしもがれて小笹はら
かぜのみさわぐふゆののべかな
畠山千嘉子

がすみし家のなごりぞすゐいしな
枯野のなかに見るぞかなしき
畠山美子

れはてし野末にたてるをみなへし
見るにつけてもあはれまされり
畠山千代子

なこそあだなるものとおもひしか
のべのくさばも枯れはてにけり
畠山百合子

ゝなきかれ野とわれはおもひしを
はなよりけなるけさのしもかな
畠山清子

べみればたゞ霜がれにかれはてゝ
住山叢子

のころこまつもさびしかりけり

いろ〳〵にみつゝすぎこし武藏のの
ひとめもくさもかれはてにけり
住山靜子

女郎花すゞきかるかやかれはてゝ
つきのみひとりのこるのべかな
松原常子

おきわたすしもにくさばの色もなし
あなのがはらの名にはそむかず
榊田鈴子

のべ見ればちぐさの色もうつろひて
さやけきしものはなさきにけり
森若子

むさし野の千草のはなもしもかれて
ひとついろにもなりにけるかな
西村虎子

しも深みのべはおほかたうつろひて
なきにしむしの音さへかれぬる
大森純子

かれはてしちぐさの中のひとつまつ
かはらぬいろぞめでたかりける
品川登羅子

おく露にはぎもすゞきもうらがれて
のなかのみづのおとのさびしき
榊田靜子

のべ見ればちぐさの花のいろあせて
ひとついろなるしものはつはな
根岸英子

しもふかみちぐさは哀れかれふして
なごりもとめぬむしのこゑかな
根岸初音子

かれはつるのべの千草はしろたへに
けさこそしものむすびそめけれ
滝口寛子

そでたれてばなぬきしは莎なれ草や
しもおきわたすむさしのゝはら
滝口信子

おくしもに千草もいつかかれはてゝ
あきのかたみとみるぞかなしき
楠楠子

おくしもに野末のちぐさうらがれて
ながめさびしきむさしのゝはら
木村琢子

けさみればのべの枯葉にさきにけり
つゆよりもろきしものはつはな　千葉里子

あたしのゝゆふべの雨ははれやらで
かれしすゞきのふすがあはれさ　横山初子

やちくさの露にやどりしあきくれて
かれのゝしもにさゆるつきかな　大島愛子

やちくさの露にみしより身にしむは
かれのゝしもにさゆるつきかげ　高橋信子

冬がれののなかのみちのひとつまつ
かはらぬいろもさむげなるかな　小川金子

のべみればちぐさはいつか色あせて
ひとりうるはしものはつはな　小川富子

わがみどりめでにしのべも霜がれて
さびしさまさるあきのおもかげ　高島綠子

哀れさをあきのすゑのにまれくなり
しもがれすゞきゆふべさびしき　竹村竹呈子

霜枯れて見るもさむけきすゝきはら
しかのなく音ものこらざりけり　安孫子かづ子

しもがれの野中のいほにやどるよは
まくらべさむくきつれなくなり　山口千枝子

かず〳〵の草のひかりもやゝきえて
いまはさびしきみやぎ野のはら　萩原草子

秋にきて見しはゆめなりおもかげも
かはりはてたるのべのいろかな　石川類子

うつり行くわがみにつみて哀れなり
しもをいたゞく野邊のおもかげ　石川らく子

なまめきし色香もうせてをみなへし
しもにかれふす野邊のあはれさ　石川南江子

はる秋にとひきしひともふゆされは　石川久子

くさもろともにかるゝ野邊かな

枯れわたる野邊こそことに淋ひしけれ
むしのこゑさへとほざかりゆく　安村歆子

なでしこののころ姿もあはれなり
かれ野が原のふゆのあけぼの　曾根雪子

あさしもに百千のくさは枯れにしを
なほさりげなきまつのいろかな　遠藤貞久子

しもがれてさひしかりけり淺芽はら
ちぐさのはなのおもかげもなし　木村きく子

もゝくさはのころ色なくかれふして
しものみさゆる野べのあさかぜ　粟生きく子

人めさへくささへかれしむさし野に
あはれはかりはかはらざりけり　田中しげ子

かたみにとのこりし菊もうらかれて
おくしもさゆるむさしのゝはら　名取よし子

おくしもをはらひかれてや冬の野の
をはなかそてぞやれはてにけり　名取正代子

むしの音も千草もいつかかれはてゝ
おくしもしろしむさし野のはら　坂田きみ子

八千草のしもかれはてし野邊見れは
のこるこまつもさびしかりけり　仁保しま子

霜かれぬこまつのほかはいろもなし
あはれさびしきふゆのゝべかな　永井さい子

みわたせば尾花が袖もしもがれて
のこるいろなきみやぎ野のはら　小林文子

かれのころ草葉にしものおきそめて
あさかぜさむきむさしのゝはら　山根久子

春の野の千ぐさのはなもあきくれば
あさかたもなくうつろひにけり　齋藤せん子

おく霜に千ぐさの野邊はかれふして
ひとついろにもなりにけるかな　林　瑟子

鳥の音も千ぐさも枯る〻あきの野は
あはれはかなきものにこそあれ　林　琴子

花すゞきまねきしかげもかれはてゝ
いろなきのべとなりにけるかな　尾立英子

おく霜にをばながそでもうらがれて
ふくかぜさむしむさしの〻はら　尾立富子

花さみしきのふのあきもかれはてゝ
見るめさびしきむさしの〻はら　村上てゐ子

けさ見れば霜のはなのみ咲きみちて
みわたしひろきむさしの〻はら　高橋かれ子

さをしかのなくねもたえて萩のはに
おくしもしろしみやぎの〻はら　關口光子

野邊みればすゞきがもとの思ひぐさ
かれゆくふゆになりにけるかな　大塚儀子

秋さひしちぐさのはなもしもがれて
あはれさびしき野べとなりけり　龜山信子

おくしもに尾花がそでのかれはてゝ
たてるもさびしみやぎの〻はら　龜山文子

霜さゆるかれの〻はらのあさかぜは
いとゞ身にこそしみわたりけれ　龜山うた子

花すゝきかれ生のなかにさびしくも
野もりがいほぞあらはれにける　德永萬鶴子

花さきし千ぐさはよもにかれはてゝ
さびしさまさま野べのいろかな　小森田輝子

きのふみし花のたもとをわきかへて
かれ野のはらぞさびしかりける　澤田春子

うちわたすをばなが袖もしもがれて
しぐれにくる〻むさしの〻はら　淺原きしゑ子

あきの〻にいろあらそひし八千草も
ふゆかれそめてつゆぞはなさく　橋本豐子

八千草をめでしすそのもいまはたゞ
よもかれはてゝ訪ふひともなし　堀　いさむ子

野邊みれば霜のはなのみさかりにて
枯れゆくふゆになりにけるかな　野路千賀子

今朝みればはぎもすゞきも霜かれて
のもりがいほはあらはれにけり　谷口婦佐子

木も草もいろなくかれしふゆの野に
今朝置くしもぞはなと見ねける　澁谷いく子

あはれさのかぎりを見せて霜かれし
ふゆのすゝきにゆふひ落ちたり　谷口とし子

こゝごさく枯野のけしき見にくれば
おのづからなるあわれしられぬ　田中濱子

いろ〳〵の千ぐさ百くさいにし秋の
おもかげもなくかる〻野べかな　加藤眞子

野邊みればいつより秋のなこりそさ
ちらぬまでになへてかれけり　加藤綾枝子

のべみればあきはさま〴〵花さきし
ちくさおしなへかれにけるかな　加藤繁子

みさりなるあきの千草のおもかげも
みねはかりにかれしのべかな　加藤桂子

はる近くなるをおもへばなか〳〵に
しもかる〻野もたのしかりけり　澁谷きく子

も〻草のかれゆくのべのはなすゝき
あきのなごりとなほのこりけり　椎野ぬき子

秋の野のをばなのいろもふゆかれて
ひとまちがほのそでぞさびしき　四條駒子

おく霜にかれてゆく野のあはれさは
まつぞむかしのかたみなりける　笠木かず子

かすかなる虫のこゑさへあさたえて
ひろ野の千くさかれはてにけり　無名（前後無名を禁ず）

きのふまで虫のやさりさおもひしか
かれてあさなきよもぎ生のはら　川上喜代子

木がらしに殘る木のはもちりはてゝ
さひしさまさるふゆののべかな　川上博子

咲きわけしちくさの花もしもかれて
野へはひさつのいろにみえけり　羽田三緒子

秋のゝにまれきしすゝきなれふして
かれのはつゆもしもさかはれり　河田いし子

霜かれし野邊のかや生に暮るゝ日を
なしむすゞめのこゑあはれなり　高橋ちん子

まれきつるすゞきが袖もかれはてゝ
しものはなさく野邊さなりけり　高橋榮子

昨日まではぎにすゞきにあこがれし
おなしのべさも見えぬふゆがれ　谷口さだ子

霜かれのちくさのなかのひめこまつ
みさりいやますふゆののへかな　林環子

葉がくれになきつる虫のれもかれて
のへはいろなくなりにけるかな　武谷提榮子

一しほのあはれろへけり枯れはてし
ふゆ野にのこるなでしこのはな　橋本たつよ子

吹く風のおさばかり志て小野のはら
うら淋しくもなりにけるかな　西艷子

見し秋のはなのいろ／＼いつしかさ
おもかげかはるふゆの野べかな　加藤久子

すみれ草つみにし野邊はあれはてゝ
枯れしなばなにきたかぜぞ吹く　川村高子

なまめきしなばなが袖もかれはてゝ
まれかぬ野べにふゆはきにけり　林久子

やちぐさは色なくかれてむさしのも
あはれはてなきゆふぐれのそら　坪内晴子

しもかぜに尾花がそでもやれはてゝ
のべはさむけくふゆがれにけり　稲原菫子

かれ草を吹きしくあらしそらまねて
つきこほる野にきつれ鳴くなり　櫻井はな子

北にそひ山さへもなきなすの野の
くさのかれふにあらしふくなり　櫻井ふく子

二羽三羽あさるからすのかけ見えて
志もこそさゆれふゆがれの野邊　曾我よし子

冬くればかれのにのこるいさはぎの
こゝろぼそくもよるひさぞなき　成田うの子

ふみなれし野邊のちぐさに霜おきて
いさゞあはれはいやまさりけり　秋山ふみ子

のべみれば秋のちぐさはうらがれて
わがそでのみぞつゆけかりける　日吉あさ子

のべはみなあらしのためにうらかれて
ひさめもくさもかれはてにけり　絹川ますゑ子

おく霜にのべのちぐさもいろあせて
あはれさびしきふゆがれのさま　原田順子

百くさの枯れにしあさにひさもさの
なばなのそでにしもぞおきける　高屋萩野子

里びさのかりのこしたるふゆぐさは
しもよりほかのいろなかりけり　山田瑋子

虫のれもちぐさのいろもあきはてゝ　林文子

さびしさまさるふゆがれののべ

どりなはひさ木の松にまかせつゝ
志ものはなのみさける野べかな
美濃君子

せさむき夜半の月かげうつすなる
枯野のつゆぞあはれなりける
濵華よし子

このすゞき立てるも淋し志もしろく
見わたす野べはふゆがれにけり
寺尾さかへ子

つかしき花野は志もにかれはてゝ
千くさのいろもわかたざりけり
寺尾まさ子

もさゆるいれのゝはらのひめ小松
これよりほかにみるいろもなし
米鑑たい子

ちまねく尾花がそでもやれはてゝ
志もがれはつるふゆののへかな
櫻井ちゑ子

くかせに枯野のしもなはらはせて
まねく尾ばなのそでのさむける
吉岡歌子

もなきかれののはらさおもひしに
なはなかうへなてらすつきかげ
間宮道子

てみれは吹く風さむしにしきかさ
めでしあき野もしもにかれつゝ
綿野りき子

わたせは霜のはなのみさかりにて
野邊のちぐさはかれはてにけり
竹腰隆子

もかれにうつろひ果てし武蔵野は
きつのみさりもさむけかすけり
竹腰婦美子

過見れば草はみながらかれはてゝ
にほひしはなのおもかげもなし
稲田緑子

し秋のなごりもいつかうつろひて
ありしいろなきふゆののべかな
稲田早苗子

なすゝきいつまで誰をまねくらん
ひさめもくさもかれしふゆ野に
大林安子

おく霜さひさついろにぞなりにける
ちぐさにみねしのべのけしきも
原ゆう子

霜ばしらあまる日になれてふゆの野は
たゞふきすさぶかぜぞさむけき
篠崎りん子

木がくれも野もりが庵もあらはれて
かれ野はさらにひさかげもなし
篠崎ふさ子

露ばかりあだめくいろもなか〳〵に
かれてあはれのふかき野べかな
志鎌たか子

かぜさゆるあしたの原を見わたせば
しもよりほかのいろなかりけり
仲田しげ子

音にかよふかぜの音のみのこされて
あはれかれゆくさなしかの野べ
永井花子

幾すぢのみちなのこしてやちくさも
ひさめもかるゝふゆののへかな
三浦鋭子

きてみれば千ぐさの野邊は色なくて
うつらのさこにしもぞおきける
長尾郁子

見渡せばはなももみぢもなかりけり
いまぞかれのさひさもいふらむ
末次たみ子

おしなへて枯れにし小野の入れ蟲さ
見ゆるもさひしまつのひさもさ
幡谷よう子

風のおさにふゆのさひしましられけり
くさきもかれしみやき野のはら
遠藤まん子

秋にみしちぐさのはなもふゆがれて
志もおく野べになりにけるかな
中村壽枝子

哀れてふあきははなゆゑなくさめき
かれゆく野べはいかになかめん
中澤千野子

ゆくみちのいさゝさみしき枯野路に
ふるさゝさむくゆふかせそふく
天野吉子

殘りなくはきもなはなもかれはてゝ
早川信惠子

あはれはふかしむさしのゝはら

にしきなすもみぢもいつか散はてゝ
　こすゑさびしきふゆの野邊かな　江島さつ子

やちくさにすたきし虫のねもたえて
　かれにし野邊にしものはなさく　富田梅子

あかざりしのべの千草はかれはてゝ
　たゞたえ〳〵にのこるむしの音　湯淺うの子

いろ〳〵にさきし千草もしもかれて
　あはれさびしき野となりにけり　菅沼愛子

夢なれやあきみしちぐさかれはてゝ
　ひとついろにぞしもはおきける　梅園ふみ子

いにしてふ秋をおふらむかれをはな
　のづらにひとりうちまねきけり　佐久間八重子

むしのねもあはれなりけりかれの原
　つきのやどらんかすみたになく　伊藤うめ子

花もみちなごりもなしきかれのはら
　みはたすかぎりしもぞおきける　伊藤あや子

さり〳〵ににほひしちくさ霜かれて
　ひといろともなれる野邊かな　降田槇子

見わたせば野邊の千草もかれはてゝ
　ひとついろなるしもぞむすべる　小川よし子

目にさはる物もあれ野のはなすゝき
　かれふすさまもあはれなりけり　吾妻ちか子

なりしきてしばしやすらふ花すゝき
　かれのゝさまもめかれざりけり　諸井くら子

あらしさへさはらずなりて冬がれの
　野邊はことさらさびしかりけり　舘脇ます子

秋の野のなごりふられてかれをばな
　まねくさまさへあはれなりけり　池谷さみ子

あかざりし秋のちぐさのいろもなく
　かれはてにたるのべのさびしさ　戸塚識千

かれふしゝ尾花がうへにおきかへて
　しものはなのぞをかしかりける　中桐季子

置くしものゝころ小草もむしのねも
　かれてさびしきふゆの野邊かな　金原吉子

春みてしみどりは松にのこしおきて
　あきのはなのはふゆかれにけり　菅良子

虫のこゑはなのなごりも絶はてゝ
　なかめつきたるふゆの野邊かな　香川頴子

目にさはる物こそなけれ見わたせは
　きのふにかはるふゆかれの野へ　香川里子

きのふみし千くさの野べもいろうせて
　かれ〳〵のこるむしのこゑかな　竹村良子

見渡しの野はひといろにかれ果てゝ
　置くしもにのみはな見るかな　玉井ふく子

八千草のみどりは松にゆづりおきて
　野邊はくまなく枯れはてにけり　山本なみ子

なかめてし野べの千草は枯れぬれど
　おきたくしもをはなと見るかな　北原季子

いろもなきすそ野の原のふゆけしき
　尾はなかそでもゐもかれにけり　笹子雪枝子

日にそへて枯れゆく野邊の群すゝき
　ゆふゐもはらふおとのさひしさ　笹子茂子

見し秋のかげもさゝめすきのふけふ
　しものみしろきかれ野はらかな　都水渡留子

草葉みな枯れにし野邊のきのふけふ
　うづらのとこやさむけかるらむ　目黒佐喜子

おくしもにひとつ色とそ成りにける　服部かつみ子

ちくささみてしのへのけしきも

はみなあらぬさまなるふゆがれの
くさのかれはにしものはなさく
坂井みつぎ子

りさしもわかすありにしま淸水に
つきやさゆるまでかゝるゝのへかな
木下つれ子

からしにたはなが袖もやれはてゝ
ひさもまれかすなりにけるかな
隈本ちゑ子

さなくしもの花のみさきそひて
ふゆがれさひしあさちふの野べ
高砂菊代子

きわたる風のやさりもなきまでに
しもがれはてしふゆの野邊かな
高砂きよ子

まもなく月すみわたる小夜なかに
すごさまされるかれのはらいな
高山信子

一月廿日兼題　書翰文の効用

天　東京本所區新小梅町一番邸　塙　いさむ子

堅の雲井遙に、隔たれる處、あるは其なりはひにいしみて、日々の務に忙しき身は、逢ひ見て語らはましき事ありとも、などて、たやすう自らはゆきやらべき、まいて一日のうちに、こゝらの用事いでくるや。さるを、世にたよりよき書翰文てふものありて、のがじゝ心に思ふよしを、水莖の跡にかき流して、にとりかはせぞ、げにまのあたり、語らふ心地せらて、いとつぞちに、事のよしをも知らるるなり。況んや、故郷遠く立ち別れて、馴れぬ異郷にある人は、四季をり〳〵につけ、あるは見るもの聞く事によりて、いたく故郷の戀ひ忍ぞるゝ時にも、一ひらの消息によりて、詞を交はさるゝは、いかに嬉しく、悦ぞしからんかし。

地　東京四谷區傳馬町壹ノ卅七　目黒佐喜子

なべて、世の人の性として、人の言ふを聞き、己れ亦言はまほしき程を口にあらはし、斯くして、互みに其心を知り合ふ、此れを談話とぞいふなる。されど、遠く處を隔てたらむには、何をもてか其意を通はすべき。斯る時、必無くて叶はぬもの、即て書翰にぞあるなる。只一本の筆に、思ひの程を言はしめて、能く千里の外の友を打笑ませ、あるは、袖を濡らさする、書翰の力こそ恐ろしけれ。巧みに物したるは、中々に目のあたり逢ひて語るにも増す心地ぞする。年を經たるふみがらなど、徒然のふし取り出で、見たらむには、さながら其折におひぬる思ひして、すゞろにはゝ笑まれつ、限りなう興ある物になむ。亦親の許よりおこせ給へるなんど讀む折には、いみじう懐かしく、はた忝けなく、何となうかたち改まるやう覺えて、然るべき節など口づから教へ給はりしよりも彌増して身にしみ渡るは、あやしくもある書翰の力哉。

人　備前國和氣郡閑谷　西　艶子

漢文の雄々しく嚴なると、雅文の優に美しきとには、及ぶ可くも有らねど、其が効用の大なるは、書翰文にこそあれ。譬へば、精巧なる花瓶と、粗野なるきふすとの如し、美しく品上れるを以て、或は室内の裝飾に、或は客人の饗應に、其の用、無しとにはあらねど、あながちに、其れ無くとも、さてありなん。其れに反して、見どころ無ききふすも、朝な夕なは更なり、折々につけて、ものまゐる時だに、ともすれば手に取らるゝまで、用多きぞかし。凡そ、何事にまれ、實用に適ひてこそ、ものは尊けれ。彼の、公用に、私用に、或は祝詞吊詞に、國の内外をとはず、絶え間なく、往復する書翰を、一一數まへたらんには、いかに夥しきものなるならん。其を思ひても、書翰文の如何ばかり、世に効用あるかは、いと明かに知らるかし。

（以下原稿到着順）

中山さとみ子

あしたには萬里の外の消息を知り、夕には千萬の遠きも廣く交際のせらるゝは書翰文の効なり、喋々口を叩かず、あゆむを要せず、只ゐながらにして思ふ事を通じ、其用をはたすも皆書翰文の効なり、書翰文の効大なるかな。抑も書翰文は、人の世を渡るに必ずしも、欠くべからざるものなり、文は學ふ程其思想を充分に書きとる事を得るものなれば、誰人も學ばざるべからず、書翰文の効用、實に廣く大なりと云ふべし。

藤原藍子

相互の吉凶をつげ、はたおのが思ふ事を細々と、人のもとにいひやる

に、いとたよりよく、海山へだてし國はおろか、たとひ遠き外國にわ
る人の、いみじうおぼつかなく、いかにあるならんなどゝ、思ひわ
る時にも、これを見れば、さながら、さし合ひ語り向ふやうの心地し
てうれしくたのしきを感ずるものは、そも何ぞや。外ならず、書翰文
の効によればなり。すべて、書翰文は、わが意想をして他に通はしむ
を以て、目的とするものなれば、いたづらに、虚文冗語を連ね、文辭
のたくみに妙ならん事をつとむるは、非なるわざぞかし。

曾根よし子

寢食を同じうしてむつび睦しゝ、親子兄妹の間にもあれ、同じ學びの
園に、苦樂を共にせし師弟朋友の中にもあれ、いかでか、片時もへだ
て別るゝ事なくて、たのしくうつせみの世をすごし得べき。別るゝ事
は誰しも願はねど、あるは公の務めの爲め、あるは已れの用事の
め、その他さり〳〵の事にうちまぎれて、しばしも津の國のこやのひ
まなき世の中なれば、勢ひやむことを得ざる事にこそ。されば、か
るわづらはしき世に生れあひたる者は、別るゝ事を常の如くに思ひ
めて、たとへ、身は、幾山川をへだつとも、玉章の文の力をかりて
父母をなぐさめ、弟妹を敎へ、朋友に親しまん事を、ひたすら心
べし。かしこの山ははや紅葉しぬらし、今年も雪はまこそふるらめな
ど、思ふがまゝなうれしき文の力にて、まのあたり懐しき父母、親し
き友などゝ、語りつ笑みつ、つどひあふ心ちぞせらるる。秋雨軒端
淋しう、かりがね遠くなき渡りて、何となう物さびしき頃、親しき
よりの文、あるは、さやけき月に、古郷を忍ぶ折から、なつかしき
母よりおくりこされたるなど、ここにうれしうなむ。

佐々有鄰子

世の中に、いともいとも尊ばるゝものゝいかなるものかと、友人の問
に答へて曰く、そも〳〵天地のはじめより、人類といふものうまれ出
つれば、朝夕晝夜のわかちなく、言とひかはすものから、文字なくて
はかなふべからざれば、千早振神代より、まちかたといふものありて
當世用ふる文字の用をなしゐるに、中古の代より、支那文字のうるは

しきものわたり來ければ、是をそのまゝにわが皇國の物品の名稱にひ
ど當て、神代のまちがた文はいつとなくすたれゆきぬ。いさ口なし
・、志がはあれども、支那文字の効用は、皇國の書翰文に用ひて、海上
渺瀚千里をゆきかひし、思ふふしぶしおつるくまなくかきかはしぬる、
のなめでたの効用なるかな。

名取正代子

ころづよりも、消息文こそかゝまほしきわざなれ。これ、人の許にい
ひやる詞なれは、あだし文とはたがひて世にふる人の、つれ〴〵暑さ
寒さのなりふしにつけつゝ、こととひかはすは更にもいはず、さみに
おこりたる事、將ものゝだいじなども、かたりかはさんに、たゞ〳〵
しく拙ききはゝ、おのづから心おとりせらるゝまゝに、いかゞはせん
などゝ、ためらふひまには、事を欠き用をも直に辨ぜざる事あり。さ
れば、たかきみじかきのけぢめなく、常に文かく事の上につきて、詞
づかひざま、將文の法をも、つばらにまなびあきらめて、さきの人
・、ほど〳〵につけつゝ、なめしからず、又かしこまりすぎぬ樣もの
すべし。これ、よのつれの務の一つにして近きは更なり、海山へだつ
遠つ國の人までも、逢ひ見ずてかたみにたよりいひかはすべきわざに
しあれば、何くれの學びはさもあれ、文はいさよくかきならはでや
は。

吉岡歌子

降りみふらずみ定めなき時雨の空の、物思はしき折しも、親しき友の
・ひきて、物語する折から、近き世の書翰文こそ、普通高等の二樣あ
りとはいへ、何れも文躰いとあやしく、樣がはり、口にする言葉とのけ
・め著るく、幼き兒女等のよくし難きものなれば、あはれ、言文一
致にあらためばやといふ。實にや其躰にのみ拘ひて、年の程をも辨へ
・、あながちに數へてこそ、さる事もあらめ、數へ方だに宜からんに
は、何かは難かるべき、まして、やゝ物なれては、自からよくしうべ
き業なるをや、ねるらぬ要事、さるべき折節、花鳥の便につけても、走
り書せる厂の玉章は、坐ながら思を人につけ、見ん人も、いかに床し

からまし、くだ〳〵しきよの常の言葉にて書きたさん事、文字多く
時を費し、見ん人のためにも、樣あしかりなん、いかで捨つべき文
さまならんや、とさ兎角云ひあへる折しも秋子の君より、
時雨の雨のわびしきに、獨さへぬるゝ心地し侍るを、いかにわ
らせ給ふらん、はかなき物語もきこえかはしたく、疾くわたり
はずや、あなかしこ。

綿野りゑ子

さあり、さればよ、時雨の雨の淋しきに、などくだ〳〵しくありたら
にはいかに見劣りやせまし、縱も捨つべきものにやさいへば、否とも
らへなきは、實にさ思ひたんめりかし、たゞしは我からの心奢りにや
何事か書きてんなど、なれぬ文に案じわび、ふみつゞらより、取り出
たる一卷に、おのが思ひの題ありて、こま〳〵とものしありける、
さも〳〵嬉しきものぞかし。なべて。世にすぐれたまひし御方へ
そばに置きたまふと聞くなるを、まいて、ものわきまへぬ己等、こ
にまさるたからあるべきかは。

佐久間八重子

家國かしき故郷の父母、最貴き師の君の平らを壽ぎ、最親しき遠方
友どち、あるは最いとしき同胞の千里の外にあるを、暑さ寒さにつ
て音信れ、又花の朝、月の夕、學びの友をよび集め、あるは商業に、
業に千里隔つる人と打ち語ること、眼のあたりにあるごときは、一と
て此書翰文の効にあらざるはなからむ、されば、菅公も「海と山千里
へだて住むとても言ひかはす文のかけ橋」とこそいはれたれ、
しこれなくばいかに不便ならむ、わけて開け行く今の世は、郵便電信
法を設けられてあれは、この効用最よくあらはれて、さながら矢丸に
付けたらむが如く、千萬里の海山へだてる人といへども、數時若くは
日にして、こその言ひかはすことを得らるゝやうになれる、こそいと
でたけれ。

河原よし子

凡そ、世に効用あるものあまたある中に、わけていちじるしきに、書

文にやあらむ。遠きは、百里千里もへだゝりたる人に、あはでかなはぬ用あるも、たゞ一ひらの文をおくりなば、それにて、まのあたりかたらふと同じごと、用を辨じ、事足りて、あまたの費用と、たふとき日子とを、はぶきぬられ、近きは花のあした月のゆふべに、親しき友を招き、あるは川狩、山あるき、さては祝ひ事、吊ひ事など、わが身のゆきかぬる時々に、さら〳〵と文にしたゝめやれば、かへりてたがひのたよりよくて、なか〳〵にたのしきふしのみ多かり。なほ四季をり〳〵の見舞狀、其他しらせやるべき出來事のあるたび〳〵、書簡文の効用、かぞへつくされぬほどにぞある。されど、また文のたよりのかきあやまりにて、いたく事の齟齬をなすこともあればよく心すべき事になん。

父の墓に詣てゝ　　佐々聰子
露ながら手向くるはなにおもかげを
たつれてまさふわがこゝろかな

萩の露　　仝
手折りなばあへなく玉もけぬべきを
いかにかめてんはぎのはなつゆ

古里萩　　山田瑋子
ふるさとの庭のあきはぎさきしより
あれたるやどもなつかしき哉

雁　　畠山千代子
ふるさとのたよりもがなと思ふころ
いとなつかしきかりがねぞする

萩　　畠山ゆり子
あきかぜも心してふけ萩がはな
うつろひがたにはやなにける

木枯　　大塚纖子
散りはてゝむなしき枝をいつまでか
ふきすさふらんこがらしのかぜ

奥山紅葉　　仝
見る人もなくてちるらんおくやまの
もみぢはよるのにしきなりけり

天長節　　野路千賀子
みひかりの顯はれましゝ今日なれは
みやこもひなもいはゝぬはなし

阿佛尼　　稲原菫子
ほそかはのきよきながれも十六夜の
つきかげなくは世にはしられじ

かれ〳〵女鑑にいみじき歌文出だし玉ひし久間春子の君のうせ玉へるを知りて　　大坂　日吉あき子
このふみにのこれる君がことのはを
くりかへしてはぬるゝそでかな

又西つや子の君の御文を見て
ことのはの花のともがき結ばぬまに
ちらしゝきみがこゝろいかにぞ

世をはかなく思ひけるなり師の君の俄かになくなり給ひぬるよし承り侍りて　　山田瑋子
さらに世は夢かうつゝかうつゝとも
ゆめとも分かぬわかれのみして
まことゝも思はぬまでにおどろくは
きみがなき世のたよなりけり



華族女學校學監下田歌子先生著

家庭文庫

全拾貳冊和裝(隔月一回發行)正價 ●壹冊金參拾五錢 ●參冊前金壹圓 ●六冊前金壹圓九拾錢 ●郵稅壹冊六錢

第七編 家事要訣

本書は、衣服の取扱ひ、裁縫、洗濯、染物等の簡易法、及び住居の撰定、構造に就きての注意、殊に室内裝飾、清潔法等は、專ら婦人の責務に屬することなれば、最も適切必要にして、實地應用の補けたるべきことを示さんとし、合せて金錢出納、家事經濟の概畧をも掲げんとする也。

全壹冊和裝　菊判大和綴
正價卅五錢　郵稅六錢

家庭文庫總目次

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

大日本女學會

總裁小松宮妃殿下
副總裁鍋島侯爵夫人

月謝參拾錢束修參拾錢●會則は申込次第送呈すべし●昨年十一月第一卷發行以來每月引續き發行●目下各卷共再版出來せり女達とく入會申込みあれかし

會員募集

●女學講義世評一斑

●『時事新報』女學講義は着實の方針を取り組織甚だ宜しく婦人の自宅教習書として最も適當のものなるべし等一回は滿二年を經て先頃講了し今度第二回の第一卷を發行したるが三宅秀氏の家事衛生後閑菊野子の家事政理三島通良氏の小兒衛生關根正直氏の國文土屋弘氏の漢文其他理化日本地理文法作文作歌裁縫禮法活花點茶及史傳小說詞藻等ありて華實兼備はり浮華輕躁の風なく實益を主とする好雜誌なり●『讀賣新聞』本邦女子教育の甚だ發達せざるは實に慨歎せざるを得ず地方に在ては高等教育を受けんと欲するも就て學ぶの校舍なく爲に小學校卒業後直に學を癈するは遺感の極と謂ふべし大日本女學會茲に見る所あり此程通信教授の法により女學講義第一卷を發刊せり(中略)高等教育を受けんとする女子の爲には極て良好の講義錄なり●『東京朝日新聞』女學講義は卷首に皇后宮の御歌を掲げ奉り次に學科手藝科小說詞藻御伽譚雜錄雜報等を精選し其用意の周到なる所を見るべく優に女子必讀の講義として稱揚するを得●『教育時論』日本女學會は女子教育の不振を慨歎し通信教授の方法に據りて女子教育の普及を圖り賢良貞淑の品性を涵養するを以て目的とす(中略)其擔任講師の如きも華族女學校及女子高等師範學校教授其他博士學士等なれば少しも申分なし●『帝國文學』中等以上の婦女にして高等教育を受けんとするもの、必讀のものにして又此種のもの、内にて最も卓絶したるものなることは夙に世の認むる處今更に予輩の呶々を要せざるなり(中略)予輩は編者諸氏の誠實熱心なる力により愈々益々この女子教育の普及發達を圖りかねて賢良貞淑の品性を涵養する目的を果されんことを切望す

九月廿五日第十一卷既刊

東京市麴町區
土手三番町
大日本女學會

故實禮節師範

有住齊先生いにし二日みうせたまひぬるによりて、敎へ子ら相謀りて、かねて禮節敎授の傳へをうけられたる令娘常子刀自をもて後の敎師と定め、從來の敎授方法に更に設けられたるものをも加へて敎授せらるヽにより、このよしつげまゐらす。

明治三十一年霜月　　門末　石井泰次郎

稟告

本塾は左の學科に就て速成懇篤に敎授す

學科

禮法　國文　英語　點茶　活花
裁縫　作歌　包物　結物

授業料

月謝金壹圓　束脩金五拾錢

入學志望者は入學証書を差出さるべし。証書雛形は敎場にあり。

敎授主任　有住常子
幹事　石井泰次郎

麻布區永坂町壹番地

柞園女塾

●割烹學校廣告●

本校は日常雜菜料理より諸祝 式料理に至るまでを速成簡易に敎授す

●授業時間

男生徒　毎土曜日午前一時より仝 五時まで
女生徒　毎日曜日午前九時より午後四時まで

●敎授科目

○雜菜料理法○普通料理法○茶會席料理法○諸祝儀式料理法○婚禮式料理法

●敎授法

○切方○煮方○燒方○搔敷物（野菜むきもの造物の事なり）○献立方○給仕方○庖丁式○包物○結物

●費目

入學金五拾錢　月謝金五拾錢

●寄宿生募集●●●●

本校開設以來、日猶淺しと雖、幸にして同志の賛同を得、日々盛大に趣くを以て、今回更に規模を擴張して寄宿生を募集す。
志望者は本校に就て問合せらるべし。

東京市日本橋區本町一丁目拾二番地

割烹學校

敎授主任　四條流庖丁師範　八世　石井治兵衞

女子教育要言　全

三輪田眞佐子著

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史曩に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきものゝ標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處する方法を述べられ本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらるゝかを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べられ蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に說き諭されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざるの良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目錄

●定價金三十錢
●郵税金四錢
●郵券代用一割增　但一錢切手に限る

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

伯爵副島種臣君題辭●富田鐵之助君序文●岡勇次郎君著
文學士濱田健次郎君校閲

訂正再版

日本米穀之將來 及米價變動の原因

全一冊 菊版二百六十頁 定價三十錢 郵税六錢 郵券代用一割増

今や經濟界は極めて亂調を呈し邦民の一日も欠く可からざる米價は古今未曾有の高直を現はし尚益々昂騰すべき其の止まる處を知らざらんとす今後如何なる邊に迄到る可きやは其道の者は勿論一般に講究すべき問題なり

本書は本邦米穀需用供給増減の理由價格の變動及び來りつゝある現象將に來らんとする現象等廣く世界の大勢より我國の情況に照し統計を示し類例を擧けて詳細反覆之を論辯したるものにして一讀自覺せしむるの良書なる事は本社の確に保證する處なり特に本社は本書の普く行き渉り聊か邦家に稗益あらん事を期し定價の如きは最も之を低廉に一時に十冊以上御求の時は特別を以て定價より一割減にて高需に可應候間續々御注文あらんことを

東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八十八）

發行所 國光社

男爵高崎正風先生序 ◎ 本居豊穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美 自一卷至八卷 紙數壹千百頁 上中下 合三冊

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書れはかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり巻となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の粟田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、このたび我社にて、摺り巻にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、わらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として、言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

全三冊 正價壹圓五拾錢

遞送料 四種郵便卅錢●小包○十里迄七錢○百里迄十二錢○百里以外二十四錢

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社 (電話新橋八八八)

●紅塵庵俗禪譯●

富岡永洗筆挿繪數圖頗密畫 無比極彩色口繪!!

四版

清風高節
秀美優雅

國の譽 獄中花（ひとやのはな）

●全一册●

總クロース金文字入

●菊版美本●

正價金五十錢
郵稅金八錢

神氣清潔なる一名士が國事上の寃枉に座し惡魔の如き法官殘忍酷薄なる獄吏の下に苦悶するに當り高尚優美なる妙齡の一少女が溢るゝ計の熱情もて之を慰藉救護し其身神の安全を保ち苦心百端少女が神聖無垢なる愛情は遂に名士の熱心せる或る植物に古今無比の玉花を開かしむると共に其幽閉を救ひ大に名聲を宇內に發揚し最名譽ある儀表の下に最清廉なる結婚を爲すに畢る斬新奇警高尚なる小說にして其寫出す處には彼の獄界の悲慘なる相思の情愛等人情の精微讀者をして一讀恍然たらしむ世の紳士淑女一本を備て座右の友とせられん事を

▼▼▼▼▼▼試に本書所載の目次を掲ぐれば

國のはまれ ひとやの花 目次

●發行所 國光社●

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

（電話番號新橋八八）

再版　生田目經徳編　再版

製本　大和綴　頗優美

定價　金二十五錢
郵税　金四錢

標註 雅文消息集

日用消息文の摸範は之を中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたしこの篇専ら心を用ひて古人の消息文中より高尚にして雅致なるものを採り

春の部　廿七編
夏の部　十六編
秋の部　十九編
冬の部　十一編
雜の部　二十四編

の各部に別ち註釋最も懇切に參考者の便よからんことをはかれり……又

北畠親房の　吉野御事書案
源頼朝の　三河守範頼に答ふる書
島津忠の　垣人におくる書
德川家康の　二代將軍の方への教誨文
俊寛僧都女の　父の鬼界島にあるにおくる文、
大高源吾の　母におくる書
小野菊女の　夫采女正に遺す文

の三十七頁の附錄を添へたり

斯道に志しあるもの一本を坐側にたきて摸範となさば益を得ること大なり

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國遞送		

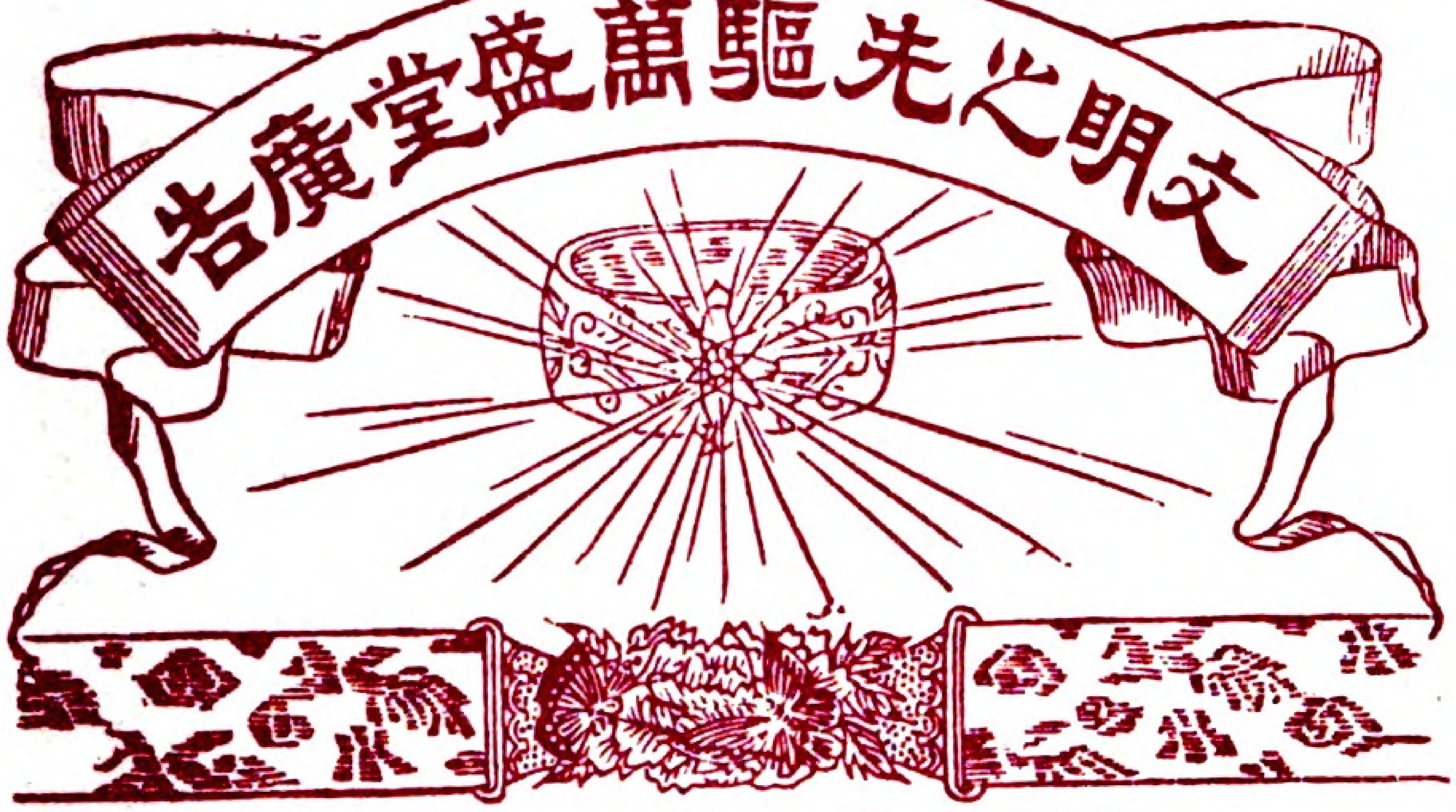
明治三十一年十一月十九日印刷
同　年十一月二十日發行

編輯兼發行人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛

印刷人　東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木艮雄

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）　國光社

（明治二十四年八月四日内務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）



従來世間にありふれたる
品々とは比較下さるべく候

我國美術の精粹
金製彫刻付並ニ諸寶石入
指環帯止

萬盛堂

神田區
小川町
壹番地

陳列販賣の品々は購求の有無に
拘はらず御來駕の程奉願上候

（印刷所　東京國光社印刷部）